



八尾の自然と文化

ボタニカル

植物社会デザインと広域的都市間ネットワーク

Urban Resilience with Nature:
Botanical Social Designing and Inter-Cities Networking of Yao, Osaka

■ 編集

岡野 浩・西辻 豊・太田博之

Hiroshi OKANO Yutaka NISHITSUJI Hiroyuki OTA

大阪市立大学 都市研究プラザ

Urban Research Plaza, Osaka City University

■ 編集協力

やお文化協会

Yao Cultural Association

八尾の自然と文化

Urban Resilience with Nature:
Botanical Social Designing and Inter-Cities Networking of Yao, Osaka

(編集)

岡野 浩・西辻 豊・太田博之

(Edited by)

Hiroshi OKANO, Yutaka NISHITSUJI, Hiroyuki OTA

(編集協力)

やお文化協会

Yao Culture Association

大阪市立大学 都市研究プラザ
Urban Research Plaza, Osaka City University

目次 Contents

はじめに Introduction	3
第1章 八尾の植物文化	5
(① ヒト・モノと植物) Person/Thing and Botany	
第2章 考古学から見た人と植物の共生	7
第3章 八尾の文化財と植物	9
第4章 高安の花木と出会って/枝木とたわむれて	12
第5章 捨てるとこない木綿	18
第6章 フラワー・ソサイティ 齊藤農場	19
第7章 八尾の特産野菜	21
(② 知と植物) Wisdom and Botany	
第8章 綿作りと河内木綿	22
第9章 日本人と花のかかわり	24
第10章 八尾高校の植物と教育の創造性	27
第11章 伝統民芸づくりもん祭り	29
(③ 場・道と植物) Space, Roads and Botany	
第12章 ブータンで国葬となった八尾のひと：自然と農業	30
第13章 ワシントンの桜と八尾	32
第14章 八尾北高校におけるビオトープと科学	33
第15章 中高安・服部川地区の造園業	37
(④ 集り・交流と植物) Associating, Interacting and Botany	
第16章 『植物とのふれあい』出版	39
第17章 高安自然再生協議会	41
第18章 環境アニメテッドやお	44
第19章 生駒チャレンジ登山大会	47
第20章 押し花・木工作品	49
第21章 茅葺屋根の保存と生活	51
(⑤ 広域的都市間ネットワークの構築) Constructing Wide Areas' Multi-Regional Networking	
第22章 造園業の変遷：株式会社庭樹園・創業140年の歴史から	53
第23章 「自然再生ネットワーク」を次世代へ	63
第24章 八尾市の環境と植物	66
第25章 植物社会デザインと都市の復元力：地域・文化の編集者としての植物	70
おわりに Postscript	85
筆者紹介 Contributors	

本書は、大阪文化の発祥の地ともいえる河内・八尾にスポットライトを当て、「市民知」による創造的な空間づくりの類型を示し、文化的な地域間の交流のありようを示すことを意図した『大阪・八尾の都市創造性：市民知による文化実践分析と文化編集』（2013年）の続編である。

都市における様々なアクター（行為する者・物）を植物や自然に置き、それらのネットワーキングのあり方が、いかにして「市民知」を創造する「場」として重要な役割を果たすことに繋がるのか、また「市民知」を生み出すメカニズムやそれを促進するための政策やサポートのあり方、（海外を含めた）他の地域との連携（ネットワーキング）などについて考えたい。

すなわち、都市の創造性¹、とりわけ文化の創造性と持続性に関連するものとして個々人の「記憶」を取り上げ、その記憶を呼び覚まさせるものとしてヒトが歩んできた、多様な「道」（海の道、川、街道、そして精神的「道」）を遡上にあげたい。ヒトとモノ、コトとを結び付け、「記憶」を蓄積したり除去したり埋めたりする「複合物」として（海の道、空の道とともに）「文化の道」として位置づけ、重要なアクターと捉えたいのである²。

「植物的社会デザイン」は「植物」を主役あるいは媒介とした文化編集（岡野2016ほか）の構成技法によって社会生活を持続的に進めていくありようを捉えようとするものであり、「創造性の基礎には植物由来のものがある」ことを意味している。また、持続的に維持するためには広域的な都市ネットワークを張り廻すことができるかにかかっている。

本書の構成については、まず、八尾の方々にこれまで見聞きした植物にかかわる「実践」、そしてこうした過去の「実践」やそれを見聞きした「記憶」、自らが行ってきた「実践」を述べていただき、様々なヒトやモノ、コトに関するテキストを「①ヒト・モノの創造性」「②知と創造性」「③場・みちと創造性」「④集り・交流と創造性」の4つのカテゴリーに分類する。その上で、「⑤広域的都市間ネットワークの構築」では①から④の関連づけを行う活動に焦点をあてながら説明を試みた。すなわち、八尾の創造性についての理論的・歴史的考察を行い、文頭で述べた UNESCO 創造都市ネットワークの7つのカテゴリーを統合する新たな枠組みの可能性を示し、都市の創造性の源泉は、こうした市民の方々の日々の活動と、それを集約し発信するための「世界の人々に開かれた」オープンスペースと様々な「道」を理解する能力であることを主張する。また、そうした有形・無形の文化財を維持し、発展させ、ヒトやモノを総体として尊重する感性が重要であり、文化を社会が編集することに対する認識が求められる。

本レポートシリーズの作成の提案に賛同し、執筆いただいた方々にまずお礼を申し上げたい。とりわけ、前回と同様、私が示した素案を吟味しながら執筆者との調整にご尽力いただいた、共編者の「やお文化協会」理事長・西辻豊氏に感謝したい。太田博之氏には本年度で創業140年の節目を迎える（株）庭樹園の実践を編集いただく

¹ 大阪市立大学・都市研究プラザ¹が主導して2012年に設立した都市創造性学会（AUC）（設立総会：パリ政治学院）の第2回大会（2013年5月31日および6月1日：ロンドン大学）において、UNESCO 副事務局長補のフランチェスコ・バンダリン氏（Francesco Bandarin）は、UNESCO 創造都市ネットワークの7つのカテゴリーである「文学」「映画」「音楽」「工芸」「デザイン」「メディアアート」「食」の分類について触れ、現在見直しの議論を行っていることを紹介するとともに、先進国と開発途上国の都市間でさらなる交流が必要であること、そして、「都市の創造性」と「世界遺産」との密接な関連性を獲得すべきことを強調した。都市創造性についてのバンダリン氏の見解は、氏と共同で編集した、国際ジャーナル *City, Culture and Society* の第2巻第3号（UNESCO 特集号）の編集後記や、第3巻第4号からバンダリン氏と共同で立ち上げた *Urban Creativity Forum* の巻頭言を参照されたい。

² ここでいう「市民知」とは「市民による実践知」として捉え、「市民が持っている実践・理論の相互浸透から長い年月をかけて形成された知」と定義づける。

とともに、次世代にむけての自然と人のかかわり方についてお纏めいただいた。大阪市立自然史博物館主任学芸員の塚腰実氏には貴重なコメントをいただいた。さらに、様々な事務作業とともに、生駒山を縦断する登山大会についても執筆いただいた、やお文化協会・渡瀬弘美さんに謝意を表したい。八尾在住の画家・大槻洋子氏にはカバー画を提供いただいた。八尾市役所からは表紙写真（與兵衛桃林堂）を提供いただいた。

八尾において連綿と続いてきたコト、それらの実現を支え保持してきたヒト、媒介環となり、結果として生み出されたモノ、道（物理的な道と精神的な道）の分析が本レポートシリーズによって説得的になされているかは読者の判断に委ねたい。

都市の創造性は、その都市に住んできたあるいは現在住んでいる人々だけで維持できるものではない。都市を訪れ、関わり、当該都市のことを他の都市に伝えた人々などとともに、何にもまして自然の役割が重要である。本書・第I部にみられる八尾の事例を通して、さらに口絵に示した古地図を通して、山と川、道の背後にある、見えない様々なアクター（ヒト・モノ・コト・道）の関係性・ネットワークを感じ取っていただければ幸いである。

第1章

八尾の植物文化

Botanical Culture of Yao City

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

八尾市は1948年（昭和23年）4月1日に、旧八尾町、龍華町、久宝寺村、大正村、西郡村の5ヵ町村が合併して市制を施行しました。この時は「田園都市の建設」を目指すとされています。その後南高安町、高安村、曙川村そして志紀町と若林地区の合併で現在の市域になり、今では大阪市の東部に位置する人口28万人の大阪の衛星都市です。

日本経済の復興に合わせ、市の財政基盤強化のために工場誘致を進め、現在は隣接の東大阪市と共に「中小企業の街」となり、都市分類では「工業都市」となっていますが、東部には高安山系を有し、自然豊かで歴史と文化を有する街と言えます。

日本の生活様式は、西欧に比較し、農耕民族であり、住宅も「木と紙で出来ている」と言われ、植物と共に暮らして生活の基盤を「家庭」と呼んでいるように、日本人の生活の場は、家と庭が一緒になった場所であったと言えます。

戦後の経済復興により、都市に人口が集中するようになり、ニュータウンと呼ばれる住宅団地の建設が進み、生活様式にも変化が見られ、個人住宅に庭を持つことが出来なくなることで公園が整備されることとなります。八尾市には、大阪府の久宝寺緑地公園があり市民にとって有難いことです。

地球環境の保全問題が世界的に取り組みれることになり、市の施策としての環境保全、緑化事業と合わせ、市民による環境保全、緑化活動も種々取り組まれています。1980年に制定された市民憲章では、前文に「八尾市は豊かな伝統と美しい自然に恵まれたまち」とあり、五箇条の一つに「みどりのまちをつくりましょう」が入れられています。

今回は八尾における歴史的な経過を含めて「八尾の植物文化」を考えてみました。

歴史的経過

縄文時代には高安山麓に人が住み始め、河内湾の海の幸、生駒山系の山の幸に恵まれた生活が出来ています。

弥生時代になると稲作が行われ、集落ができ、集団生活が始まります。稲作に関連した祭りに使われたと考えられる銅鐸が出土し、銅鐸にはシカやサカナ、カエルなどが描かれていて、豊作を願う祭りが村ごとに行われていたと思われれます。

古墳時代には、大きな木があり、その木で船を作ると早い航行が出来たと記録があり、久宝寺遺跡から準構造船の一部が出土しています。準構造船は丸木を削り抜いた船底部に舷側板や立板を持つ船で、瀬戸内海を利用した水上交通により各地との交流が行われていたと考えられます。

室町時代には、稲の改良と案山子に関する話があり、品種改良した稲に雀が来るようになったのを防ぐようにしたと言えます。この時代の遺跡から「掻揚田」が見つかっています。掻揚田は田んぼの中に島状に盛り上げた畑があり、この島状の畑に木綿が栽培され、近世の木綿作り、河内木綿産業へと発展していくこととなります。

文化財

八尾市の文化財には、国指定の重要文化財で、聖徳太子の御作であると伝えられている「木造十一面観音立像」と、我が国に伝わる禁制の最も古い「木造制札」と、木造の仏像、建築物、そして天然記念樹が多くあり、歴史と伝統を有する豊かな都市であると言えます。

八尾市指定の文化財である郷塾「環山楼」は、江戸時代に八尾の寺内町に住んでいた豪商が私財を投じて郷塾を設け、京都から儒学者伊藤東涯を招いて講義を受けるなど人材育成に尽くした建物であり、今も八尾小学校の敷地内に保存されています。

産業関係

大阪市に隣接する八尾市は、大阪の経済活動と密接な関係にあり、生活面においても大阪の経済活動に関心が深く、居住地のことよりも大阪の動きに関心が深いことから「ベッドタウン」と言われてきました。

今回のレポートでは、高度経済成長時代に工業都市として発展する素地として、河内木綿や造園業が八尾の産業活動、そして生活文化に大きな影響を持ってきたことを振り返ってみました。

河内木綿は農業としての綿作りから、手工業による木綿作りへと進み、経済活動として捉えても、明治時代に近代資本主義が西洋から日本に影響する以前に、既にその素地が生まれていたと言えるように産業活動と深く関わっています。また、機織りや染色面、日常生活に欠かすことが出来ない繊維製品として生活文化面にも多くの足跡を残しています。

造園業では大阪の池田市と並んで八尾が取りあげられています。今回は、庭樹園の太田氏のご尽力で産業活動面での貴重な記録を残すことが出来ました。

生活と植物文化

古くから花や植物が生活と結びついていることは、奈良時代編纂された万葉集に花や植物を歌ったものが多いこと

からも分かります。

高安地区の花作り、人と花との関わりについては豊臣時代末の大坂の陣で多くの戦死者が出たのを弔うために花が必要になったことから始まったとされています。造園業については、隣接の奈良県にある山岳信仰の場・朝護孫子寺信貴山の整備事業に八尾の人達が関わったことから始まるのが今回明らかになりました。

旧大和川河川敷である玉串側、長瀬川沿いは、周辺の田畑よりも高所で砂地の良い住宅地として開発され、生垣に囲まれた庭と住宅がある高級住宅街として知られていますが、最近では近代生活に合った新しい住宅に立て替えが進んでいます。

生活の近代化、女性の社会進出などにより、娘時代にお茶やお花を習うことが少なくなり、正月に注連縄をつけ、門松を立てる家も少なくなっていますが、植物と共に暮らしてきた生活習慣を大切にしている人達があり、集合住宅の入り口に門松を立てているのを見ますと気持ちが落ち着くのが感じます。

今後も自然環境を保護し、植物と人との共生の必要性を守り続けていく運動を組織的に取り組んでいる「環境アニメイテッドやお」「高安自然再生協議会」の活動が市民の間に広がり、豊かな自然環境を守り続ける八尾市が都市として発展していくことを願っています。

第2章

考古学からみた人と植物の共生

Human and Flora's Symbiosis from the Archaeological Perspective

原田 昌則 (Masanori HARADA)

今から3万年前の氷河期には、大阪湾や瀬戸内海も陸地であり、「古大阪平野」は針葉樹の森林が広がり、ナウマン象やオオツノジカなどの大型動物がユーラシア大陸から渡ってきていたと思われ、八尾市に隣接する大阪市平野区の長原遺跡周辺から、これら動物の足跡が見つかっています。古大阪平野に人が住み始めた2万年前の石器が発見された八尾市南西部の八尾南遺跡や太田遺跡、長原遺跡一帯は、河内大地の先端部に位置し、ここに集まる動物の狩猟場であったと思われま



河内湾

気候の温暖化が進んだ1万年前は、海面が上昇し日本列島はほぼ今のような形になり、6千年前にはさらに海面が上昇し、八尾市南西部の亀井町付近まで河内湾となります。

これは亀井遺跡でハマグリ(ハマグリ)の化石が出土していることで確認できます。河内湾の周囲の山や川岸には、カシ類、エノキ、ムクノキ、ケヤキなどが生え、さらに気温が高くなり河内湾の終わり頃には、イチイガシ、アラカシ、ヤマモモ、シイノキ、イヌマキなど照葉樹林が広がっていったと

考えられます。

八尾市南東部の恩智遺跡では、縄文土器や石鏃などと共にシカやイノシシなどの骨、タイの骨などが多く見つかり、ここでも狩猟生活がされていたことが分かります。この時代の人々は、シカやイノシシ、タイなどのほかマテバシイ、シリブカガシ、シイノキ、イチイガシなどの実(ドングリ)を食料にしていたと思われま

す。住居は、地面に穴を掘り、柱を立て屋根を葦などの植物や土で覆った半地下式の「竪穴住居」です。水越遺跡、八尾南遺跡でこの住居跡が見つかっています。縄文時代には八尾は河内湾の海の幸、生駒山系の山の幸に恵まれた生活ができたと考えられます。2千百年前の弥生時代の中頃には、大和川水系による堆積物で平野部の陸地が広がり、海水と淡水が混じる河内潟になって「米作り」が進みます。山賀、久宝寺、亀井、田井中、池島、福万寺、恩智などの遺跡で、集落や水田跡が見つかっています。集落の中には、水害や集落間の争いからムラを守るため集落を溝で囲んだ「環濠集落」が出現しています。遺跡調査の結果から潟にはヨシが茂り、周辺にはカナムグラ、コナギ、イボグサ、カタバミ、オナモミなどが茂っていたことが分かっています。

稲作に関連した祭りに使用したと考えられる銅鐸が、恩智遺跡東方の生駒山地西麓部の垣内山、都塚山と跡部遺跡から出土しています。銅鐸にはシカやサカナ、カエルなどが描かれており、豊作を願い、ムラ毎にお祈りや、お祭りが行われていたものと思われま

す。弥生時代の終わりから古墳時代の遺跡から、カシ類やシイノキの花粉が減り、アカマツの花粉が増加します。このことは古墳造営が活発化し山林部が開発され周辺部の照葉樹林を切り開かれ、その後二次林化したマツ科の林が増えた事を物語っています。



池島・福万寺遺跡（水田跡）

この時代、日本に女王卑弥呼がいた邪馬台国があったと中国の史書に書かれています。女王卑弥呼は中国に使者を送っていますが、久宝寺遺跡からは準構造船と言われる船の一部が出土しています。準構造船は、丸木を削り抜いた船底部に舷側版や縦板を持つ船で外洋航海も可能な船です。この時期の八尾は大陸から九州、瀬戸内海を経て大和への水上交通の要地と考えられ、人、物、文化がつながる重要な場所であったといえます。

『古事記』仁徳記の枯野という船の話では、高安山の高さを超える影が出来るような大きな木を使って「枯野（かれの）」と名付けられた船が作られ、淡路島に水をくみに行き、天皇の飲料水にしたと書かれています。八尾市のどこにその樹があったのかは分かりませんが、地名に木の本などがあることと関係があるように思われます。

古墳時代中期以降になると、現在の河内平野に存在した河内湖周辺の集落では、馬の飼育が活発に行われています。

その馬飼いい集落の一つである八尾市北部から東大阪市東南部の池島・福万寺遺跡で、小麦の生産をしていた畑の跡が確認されていて、人馬の食糧確保のための小麦栽培が行われていたことが確認されています。

奈良時代では、引田部赤猪子がよんだ歌「日下江の入り江の蓮 花蓮 身の盛人 羨しろきかも」から河内湖の名残の池周辺の環境が推定できます。

室町時代の遺跡からは、「島畑」「判田」「高畑」「掻揚田」と呼ばれる田んぼの中に島状に盛り上げられた畑が見つかっています。これは洪水によって埋没した水田を復旧させるため、土砂を一箇所に盛り上げられたことによります。中世以降に見られる耕地形態で、島畑部分を中心に綿花の栽培が行われ、近世には河内木綿が地場産業に発展しました。

室町時代には、稲穂の改良と案山子に関する話があります。原始時代の稲穂には麦の穀にある針状の毛である芒（のぎ）があったとされています。それらは農作業の障害になるため、品種改良を進めて農作業の効率化を図ったところ、雀などの鳥害が発生するようになり、案山子を立て、鳥害を防ぐようにしたといえます。

江戸時代の資料には、生駒山地に草原が広がっていたことが書かれています。この頃の農作業の技術として、田畑の肥料として刈り取った草を土に混ぜる「刈敷」技術があります。農産物の増産を図り、刈り取った草を肥料とするために、山林の木を草に変えたものと思われる。

参考文献

辻 誠一郎 (1996) 「開発と植生の変化」『考古学による日本歴史 16 自然環境と文化』雄山閣出版。

松尾信裕 (2008) 「稲作技術の到来・長原遺跡」『大阪遺跡』大阪市文化財協会。

宇野諄一ほか (1991) 八尾市若林町所在・八尾南遺跡発掘調査概要Ⅱ—大正川流域調整池築造こともなう— 大阪府教育委員会。

別所秀高 (2009) 「河内平野のおいたち」『河内文化のおもちゃ箱』河内の郷土文化サークルセンター。

大阪府文化財センター (2008) 「島島のはじまり」『考古学からわかる郷土の歴史 池島・福万寺遺跡発掘調査 25 年のあゆみ』大阪府文化財センター。

八尾市緑化協会 (1994) 『植物とのふれあい：八尾植物』八尾市緑化協会。

『古事記』『日本書紀』総覧別冊歴史読本 新人物往来社、1989 年。

第3章

八尾市の文化財と植物

Cultural Heritage and Flora

川西 茂(Shigeru KAWANISHI)

八尾市には、多くの文化財があり、市民の歴史・文化に関する意識の向上に資していますが、植物では聖徳太子の古戦場である大聖勝軍寺に、太子が戦乱で難を逃れたと伝える棕の木「神妙棕」が大切に保存されており、大阪府指定の天然記念物である樹齢千年といわれる楠の大樹が玉祖神社、渋川神社、善光寺にあります(計3本)。

木製・木造の文化財としては、国指定の重要文化財が2点、大阪府指定の文化財が4点あり、国指定の重要文化財の一つは北条時政が玉祖神社の宮寺「菌光寺」に下した「木造制札」で、我が国に伝わる禁制の最も古いもので玉祖神社に保存されています。もう一つは、聖徳太子の御作と伝えられている神宮寺感応院の十一面観音立像です。

大阪府指定文化財は、楠の大樹3本と仏像神像4体で、玉祖神社の神像は宿禰夫婦の像であると伝えられています。朝鮮半島風の座法形式をしていて、文化交流を考える資料にもなっています。

八尾市指定の建造文化財は環山楼、宝殿神社、顕証寺、旧植田家住宅、常光寺、玉祖神社とそれらの門、庫裏などです。その中で環山楼は八尾寺内町の豪商石田利清が私財をもって設けた郷塾で、京都の儒学者伊藤東涯を招いて講義をするなど近隣の人々の勉学に役立てた建物で、修復保全されて八尾小学校内に保存、一般公開されています。

木製・木造の文化財は仏像など7点あります。いずれも信仰の対象として大切に守られていると共に、貴重な文化財として後世に伝えていかなければならないものです。

以下、国と大阪府の木製・木造の文化財についてその概要説明をします。

国指定の重要文化財

木造十一面観音立像(恩智・神宮寺感応院)

恩智は古代「母木(おもものき)の里」と言われ、この仏

像は俗に「母木観音」と呼ばれ、聖徳太子の御作と伝えられています。檜の一本彫りで、右手の一部、頭部の化仏、纏衣、左手の一部は後世の補修で、像の木理は美しく表れていて、丈は108cm。少し腰を左にまげていますが全体として調和のとれた素朴さを漂わせています(藤原初期の作品)。



木造十一面観音立像(八尾市文化財課)

木造制札(神立・玉祖神社)

文治元年(1185)、北条時政が玉祖神社の宮寺「菌光寺」に下したもので、寺並びに畑、山林などへ乱入妨害することを禁止するとの制札です。縦20cm、幅15cm、厚さ1cmの将棋の駒形板に墨書して、門前に掲げるための釘穴が上部に残っています。我が国に伝わる禁制の最も古いものです。

なお、国登録の有形文化財には、慈願寺、桃林堂板倉住宅、旧植田家住宅(八尾市指定文化財)、浅野家住宅、高田家住宅があります。



木造制札（八尾市文化財課）

大阪府指定文化財

木造男女神像（神立・玉祖神社）

この神像は、もと神社のご神体として祭られた宿禰夫婦の像であると伝えられています。

檜材の一本造りで、男神像は丈54cm、頭上に冠を戴き、前襟を広く開けた袍形式の衣服をまとっている。女神像は丈45cm、左膝を立てて座っています。この座法は朝鮮半島風のもので、頭髮は頭の中央で二分し、耳の両側に垂れています（藤原後期の作品）。

神像彫刻は、天平時代に始まり藤原時代に最も盛んに作られました。神像は、神仏混淆の本地垂迹説に基づいたもので、明治初期の神仏分離によって仏像と区別されることになりました。

木造二臂如意輪観音思惟半跏像（太子堂・大聖勝軍寺）

本尊として崇拝されていたものです。像の体内から発見された金銅弥勒菩薩像と同じ形式の半跏思惟像で、丈128cm、上半身は裸形、瓔珞をつけ、頭部に輪光を頂き宝冠も美しく、右手をかすかに頬につけたいわゆる思惟の形。全身前にややかがみ、左手は屈曲した右足の足首においている。衣は柔らかくゆつたりと流れ、左足は、わずかに指先のみ表し、蓮台に乗せています（藤原時代の作と推定）。

木造四天王像（太子堂・大聖勝軍寺）

四天王は須弥壇の四隅に安置して東西南北の四方を守護したものです。この像は、別名四大臣像ともいい、聖徳太子が物部守屋を攻められたとき、戦勝を祈って白膠の木をもって自ら彫られたといわれます。形式としては我が国で最も古く、法隆寺のものと同型で、四天王寺に安置された

四天王を祖型として作られたものとされています。四体とも檜の一本彫りであり、足下に邪鬼を踏まえ直立していきわめて素朴な像容です（寺伝によると推古時代になるが後世の作と思われます）。

木造毘沙門天像（太子堂・大聖勝軍寺）

この像は両肩から先が補修され、元の姿は不詳ですが、全体に静かな姿で平安時代の末頃の作品とされています。

楠の木3本（玉祖神社、善光寺、渋川神社）

いずれも樹齢千年と言われる大樟樹で、玉祖神社の楠は幹回り8m、善光寺の楠は幹回り6.3m、渋川神社の楠は幹回り7mです。幹にはしめ縄が張られ大切に保存され、3本とも八尾市の保全樹となっています。



玉祖神社の楠

なお、八尾市の保全樹のうち、矢作神社の大銀杏は、幹に大きな乳房状の突起を持ちます。この皮を煎じて飲むと母乳が良く出ると伝わる俗信仰は、民俗学的にも貴重です。この樹は八尾市文化会館大ホールの緞帳の図柄（原画は画家藤田尚保氏）に採用されています。



矢作神社の大銀杏

八尾市指定の木製・木造の文化財は下記の仏像と建造物があります。

八尾市指定文化財

- 蘭光寺** 木造阿彌陀如来立像
- 常光寺** 木造地藏菩薩立像
- 常光寺** 木造伝又五郎大夫盛繼座像
- 常光寺** 木造毘沙門天立像
- 清慶寺** 木造阿彌陀如来立像
- 大聖勝軍寺** 木造聖徳太子孝養像・二王子立像
- 念佛寺** 木造阿彌陀如来立像
- 環山楼** 八尾市
- 宝殿神社** 宝殿神社本殿 (附 木造狛犬一对)
- 顯証寺** 本堂、表門・両脇築地塀、長屋門 (付 西長屋)、東長屋、渡廊、庫裏
- 旧植田家住宅** 主屋、表門、土蔵一・土蔵二、渡廊、控舎
八尾市
- 常光寺** 本堂・阿彌陀堂・行者堂 (付 本堂復興記額・阿彌陀堂再建板札・行者堂厨子)、三門 (楼門)
- 玉祖神社** 本殿 (付 棟札)
- 能面** (父尉、翁、三番叟) 個人

第4章

高安の花木と出会って

Meeting with Flowers and Trees at Takayasu

牧江良祐 (Ryosuke MAKIE)

1 はじめに

今から約30年前八尾市に転居してくる。2月の末冬枯れの高安山の山腹に淡いピンク色の花木を見つけた。その一本の「さくら桃」から大窪と神立(こうだち)が切枝花木・花卉³の栽培地と知った。目を追って山は美しい花山に変貌していった。朝に夕にカメラを手に服部川辺りまで、一年を通じて、4,5年間撮影して回った。

当時、高安山麓で活動する市民グループが三つあり、参加して、自然観察・古墳めぐり・笹や下草刈りなど楽しみながら、併せて個人的に聞く里の人のお話からも多くのことを学ばせてもらった。

2 当地の切枝花木・花卉生産の歴史

神立・大窪の花づくりは江戸時代に始まった。明治時代後期にはこの地で培ってきた切枝花木の促成開花の工夫により一躍先進地となった。その後、各家が競って種類の違う花づくりに励み、日本三大生産地になった時期もある。

時代を通して枝ものの景気がよい時は、家によっては繁忙期自宅に出稼ぎ者を受け入れ寝食を共にして働いた。半島出身者の他、伊勢から来る人が多かった。蔵があり、石垣上に家が並ぶ里の風景から当時が偲ばれる。



坂の「十三街道」沿いに家が立ち並ぶ神立集落

戦後日本が立ち上がり高度経済成長期に入ると花づくりの里は、徐々にではあるが、厳しい波にみまわれ始める。高卒女子は労働力として社会に求められ、それまでは嫁入り前の当然の習い事だった「茶道・華道」に時間が取れず、いつしか遠ざかって顧みなくなっていった。また、此の頃建設されていく公団住宅の様式は「花」を飾るゆとりスペースがないものだった。

花づくりの里では——後継者になる筈の男子高生の多くが進学し、大学卒業後は企業に就職して、里を出て行った。



啓翁桜

その後、日本経済が絶頂期からバブル崩壊。そして平成7年(1995)阪神淡路大震災。それまでずっと下降線を辿ってきた「枝もの類」がこの少し後でぱったり売れなくなった。日本経済の影響と、生活スタイルが全て洋風になったためか……?

それまでは、神立の各家は冬は枝もの、春からは菊中心の花づくりを長年続けてきた。枝ものの種類が各家で異なるので一概には言えないが、高齢化した多くの家ではこの時「花卉の切り花」に絞る選択をした。

ところがここにも難題があった。輸入の洋花や、増加した他産地との、花の品種や品質競争。何より痛手は、道路網の発達で集荷過剰になり、価格の下落が起き始めたこと。そこへ「切り花」に対して鉢物やガーデニングの流行が追い打ちになる。このように急速に激しく変化していく花事情の中でも里の花農家さん達は、知恵と工夫で頑張ってお

³ 一般的には「花木」は花の咲く木、「花卉」は草花である。生産地と市場では「切枝花木」を「枝もの」という。

られる。

3 「山の花木畑」今昔

生駒山系高安山の奈良側は朝日が昇り、なだらかな山だが、大阪側は急傾斜の山で、日が沈むまで西日の日照時間が長い。そのため西日対策が要る。水はけは良いが土質は脆いので、溜め池管理も重要である。このような自然条件の下に神立・大窪の花農家さん達は苦労して切枝花木の栽培を続けて来た。

3-1 十三越え（十三街道）沿いの畑

神立地区北部の山中には、大阪玉造と大和を結ぶ古くからの街道が通っている。『伊勢物語』で知られる在原業平や伊能忠敬が通った山路。

この道沿いに切枝花木畑が幾つも造られた。急な山道を山車（木造りの荷車）で重い肥料を運び上げたり切り枝を里へ下したりするため、しっかりした道の近くから競争で切枝花木畑を拓いたと思われる。

山の奈良側にも戦前から切枝花木畑を持っている人達があり、「八尾十三峠線」が出来るまでは、山中の産業道路でもあった。

この山の八合目あたりに湧き水が出る。そこには古くから地藏を祀り「水呑さん」の名で旅人に親しまれてきた休憩所がある。今、この展望台からは大阪平野を一望にでき、明石海峡大橋も遠望できる。

水呑さんの裏山の「府民の森」はかつては村有林で、村人達が植えた山桜がある。近年展望台下に、桜の他種々の花木を植え込んできた。10年ほど経てばこの周辺が市民のための美しい花園になるに違いない。

3-2 おと越え沿いの畑

神立と大窪地区の間になる渓谷の道。大阪の平野から久宝寺・八尾の二つの寺内町を通り大和へ出る道。険しいが距離が短く、自動車時代になるまで結構通行者が多かったようだ。

切枝花木の栽培が盛んになり、大正3-4年(1914-5)に開墾が始まる。「おと越え」と「木山谷（きやまんに）」が開墾地だった。当時70代半ばだった人の話では、大正の末から昭和の初めごろは激しい競争で山の上へ上へと石垣を造り、段々畑を築いていったそうで、「谷川の水は、開墾

による山の土砂で一年中赤土色やった」。

平成10年(1998)8月生駒山系集中豪雨時、山中の二つの小池が崩壊、また山の上の方でも土石流が発生した。現在は砂防ダムが建設されていて、ハイキング道としても通行が困難になった。



集中豪雨による開墾畑の石垣の崩壊跡

3-3 大窪の山

約30年前、山腹の埋め立て地横で「さくら桃」と出会った地。当時の「大窪の春山」は白木蓮・沖縄の寒緋桜やレンギョウなど多くの種類の花木の花で非常に美しい風景だった。

また、聞くところによると、かつては、この山の近くには棚田があり美しい景色で知られていたという。

しかし今では、花農家さんも高齢になり、枝ものも安値で共同作業の「出会いごと」の道づくり（草刈り）も行われなくなり、花木は葛に巻かれていく有様。イノブタがミミズを捕るために掘り返し、山の花木畑は荒れていく。それでも春には花木が名残りの花を咲かせている。



3-4 広がっていった切枝花木栽培地と「出作」

切枝花木の栽培が盛んになり、東大阪市の横小路辺りから大窪まで高安の山は、不適格の処・柴山（里人が燃料を取る山）・薪炭林（個人所有の燃料山）・宮さん山を除いて高安山は切枝花木栽培の山になった。

さらに現在77歳くらいの人の話では、50~60年前、当時の若者何人かが連れだつて「出作（しゅっさく）」をして

いたという。遠くの花木畑へ出向いて栽培と伐り取りをすることで、榛原・飛鳥・吉野・和歌山・滋賀・鳥取、群馬まで行く人もあったらしい。「伐り出し」というのは、この人の祖父のころから行っていたそうで、地方へ行き、他人の樹木を伐らせてもらうこと。大宇陀・吉野・下市へはよく足を運んだ。長野へ行く人もあったという。遠隔地へ伐り出しに行き、出先の人との交流から格好な地を紹介され「出作」となることも少なくなかった。今では枝ものの需要が激減し、伐り出しに出る人はあまりいない。

3-5 神立、里山の段々畑

神立・大窪は山際の地域で、全体が坂地。神立は谷もあり平地が少なく、あらゆる工夫がなされた。

昔から「花木は山で、菊は畑に」と言われてきた。良い菊を咲かすために、菊はお米と一年交代で作るものだった。菊はお米より値が良く、よく売れたため、背の高い花木で影になるのを嫌ったものか。

住いの裏や横がすぐ畑という家が多い。そこで皆さん日当たりがあれば、借地であれ、所有地であれ、何処でも実に巧みに土地を活用してきた。

家の垣根のような処にマサキを。段差のある土手斜面には雪柳・レンギョウ・サンシュユなどを植え背丈が伸びる前に伐って出荷する。畑の土手には金宝樹・銀香梅・キンケイ・小手毬など。隅の邪魔にならない処にはトゲのある木瓜や、トクサ。池端には柳・雲竜柳・ネムノキ・パンパスグラスなど。

集落から山に入る間の地には丈が高くなるもの、広がるものを…房アカシヤ・丸葉ユーカリ・大王松など。たった一本だけ…啓翁桜・枇杷・梨・花桃・紅梅・普賢象などなど。小崖の土留めとして啓翁桜・椿を植えることもある。畑の間の小路をそれぞれの工夫を解釈しながら歩いてみると楽しい。



南の畑から望む神立集落

切り花では「一輪菊（輪菊）」が登場した。炎天下での菊の芽欠き作業はビーチパラソルの下でも厳しく辛い。一度摘んでもまた菊が生育するので、一本の菊のわき芽を何度も摘むことになる。こうして手間暇かけて白や黄色の花を頂に一輪だけ咲かせる。

神立では「夏菊」、露地で電照し、十月半ば頃出荷する「秋菊」、ハウス内で電照し、年末に出荷する「正月用の菊」この三種類の輪菊を生産していた。

大きい見事な輪菊は良い値になったが、大型設備を持ち協同生産する産地が現れ、立ち打ちできなくなった。今では葬儀の花に色彩豊かなものも使われるようになってきているが。

一輪菊生産者の中に約30年前（阪神淡路大震災以前）里の周辺の畑全面に花桃の苗木を植え付ける先例が出た。時が経って今となり、農業事情が変わると高齢化もあって、里中の畑にも菊ではなく、切枝花木の畑がぽつぽつ現れてきた。

3-6 八尾農免農道

平成22年（2000）里山の山際に農免農道が完成した。服部川から神立まで約2kmあり、造園業と切枝花木・切り花栽培者の農業道路である。

この道が完成した後、途中の道路沿いにも花木が植えられ始め、利便性の高い切枝花木畑となった。

西方には大阪平野が広がり、大阪湾や六甲山系まで見晴らせる。市民にも格好のジョギングコースとして活用されている。

4 切枝花木の促成開花

枝を伐り、肩に担いで狭く危ない径を下り、里へ下ろすのは重労働。今でもこの様な山仕事を続ける花農家さんが何人かいる。

早春、桃や桜の蕾がまだ小さく固い間に伐り取った枝を、開花促進のために、外の泉水に浸け置いたり、場合によっては加温する。1.2mに切り揃え5本ずつ10束をまとめ段シートでくるんで季節に先駆けて「花」を市場にだす。

やがて季節が進み春たけなわとなる頃、手入れの行き届いたこの花農家さんの花山が遠くから美しく望める。ここはアマチュアカメラマンの格好の撮影ポイントであり、ハイカーにも見所として喜ばれている。



桃の伐り取り作業

5 今人気の枝もの

「昔はなんでも売れたんや」と高齢の花農家さん。今はユーカリの他、山茱萸（春黄金花）・啓翁桜・花桃もよく出らしい。特にユーカリは「生け花」でも「フラワーアレンジメント」でも使い易いのだろう。

花はファッションと同じで時代で好まれるものが変わっていく。しかしどの花にも命があり人の心を和ませてくれると思う。

6 山の災害と虫害と葛

昭和40年(1960)代(頃)木山谷の用材松の林、玉祖神社の「宮さん山」の松の杜他、山の松が松食虫で全滅した。その後自然の力で「宮さん山」は落葉広葉樹の杜になり、今では小鳥の天国になっている。

平成28年(2016)日本全土でナラ枯れ発生。9月、遠くから高安神立の山並みの中に、枯れた樹林の存在がはっきり見て取れた。燃料革命で放置されてきた薪炭林跡もあるかもしれない。

市史年表に「797年(延暦16)高安山、山崩れのため人家埋まる」とある。断層活動でできた生駒山系の高安山の斜面は退化花崗岩のもろい山。花農家さん達の手入れの良い花木によっても護られてきたのではないだろうか。

葛はマメ科の大形つる性多年草。高木にも巻つき登り、葉にマウントして日光を奪い、つるで木を締めつけて枯らす。成育旺盛で盛夏には1日に1mも伸びるほど。昔は漢方薬や葛粉として利用してきたが、放置畑の葛が気になる。アメリカでは「害草」。



農免農道の西方に広がる八尾・大阪の風景

7 おわりに

各家に季節の生花を飾る文化があった時代、神立・大窪の花農家さん達は時の勢いに後押しされて日本各地から多くの種類の花木を、外国からも珍しいものを入れた。そのため高安の山は近辺の山と全く違った特別の山となった。ユーカリ・ユリノキは外国産の樹木。ユリノキは神立・大窪にしかない。秋風が吹くとまっ先に黄葉する。ナナカマド・マンサクは寒冷地のものだが、その他比較的寒冷な山地の樹木が多いらしい。ところがアオモジは台湾にあって、岡山を北限とする木。そして薪炭林としていたコナラなどの山は自然の二次林にかえて16種類ほどの樹木で覆われている。中には小鳥の好む小粒の実をつけるものもあるだろう。

12年ほど前まで冬期の探鳥会に参加していて、冬鳥のジョウビタキや水鳥のカモなどを見たり、また早春ウグイスの声を聞いたり、椿にメジロ、桜にヒヨドリが蜜を吸うのを見たりと、約30種類の鳥の観察ができた。あらゆる面で貴重な山だと思う。都市のすぐ近くにあるこの自然豊かな高安山を大切にしたいもの。

花農家さん達には残念ながら後継者はいない。しかし、皆さん年がいてもまだまだ現役。多くの花農家さんからは「技術があるから四季を通じた花づくりを続けていきたい」「街の人に花の里、神立を見に来てもらいたい。それについて何か考えていこう」という声も聞く。

また、若い人達に自然の良さを楽しんでもらおうと、山の手入れに余念のない方もおられる。ちょうどエコツアーの動きも伝わって来る。花づくりの里が大いに活気づくことを望み、将来を楽しみに思っている。

(この度のレポートについては神立・大窪の花農家の皆様にお世話になりました。感謝申し上げます)

枝木とたわむれて

啓翁桜の選別クズから生まれた「枝木人形」

啓翁桜（ケイオウザクラ）

1930年（昭和5）に久留米市山本の吉永啓太郎が中国系のミザクラを台木にして、ヒガンザクラの枝変わりとして作った桜。

山形では昭和40年代、全国に先駆けて促成開花が始まった。

神立には50年前（1967）ごろ入ったという。この桜は育て易く、増やし易く、花の色も薄紅色で神立では、またたく間に広がった。枝伐りしてきたものを促成開花のために桶や泉水に浸ける時に、また出荷のために選別する時に出る端切れや曲がった枝がもったいなくていただいていた。

枝ものの桜は十月桜（十月と春と二度咲く）・元日桜・寒緋桜・彼岸桜・啓翁桜・陽光桜、普賢象を始めとする八重桜（ぼたん桜）各種が栽培されているが、桜は桃と違い、一度伐るとその後何年か経たないと伐れないという。沢山植えられている啓翁桜の材が手に入り易く、それで枝木人形を創ってみた。

河内音頭



枝木人形の制作について

ポイント1 材料をよく観察する

桜の枝には味があるが桃の枝は真っ直ぐで面白味がない。枝分かれの部分をよく観察して巧く利用するとよい。剪定された傷跡も役立つことがある。さまざまな角度の二股を自在に活かせばよい。木なりの自然なカーブが魅力を生む。

ポイント2 工作について

爪楊枝ぐらいのものをダボに用いて部分を繋ぎ、腕や足を作り、胴体に取り付ける。同時にポーズをみながら作業する。接着面は斜めに角度をつけて切って接着すると、思い通りの曲りをつくることができる。

私達の日常の暮らしのワンシーンをユーモアで受け取り、小さな「枝木人形」として表現してみた。桜独特の木はだの温もりも手伝って木端が何か語り始めた気がする。

出来上がった「枝木人形」は、一番に、里の会館で「綿くり」の体験と併せて、会場に展示させてもらった。その後、八尾のペントモール画廊で高安の写真と共に展示した。



母子三人乗り

里の休耕地で野外コンサート

里で知り合ったおばあさん達は、長年にわたって家事と子育てと花づくりに携わって来られた。高齢になり坂の里から歩いて外へ出かけられないと知り、ハイキングに水呑さんに来る人達も一緒に、ひとときを楽しく過ごそうと、気軽な催しを開いた時期がある。5年間に計10回。

春は菜の花、秋はコスモスが揺れる中で、毎回70人ほどの方々とご一緒できた。演目はギター・詩吟・フルート・民謡などなど。ある年の秋、あまりに暑かったので、小野先生とギター教室の方々には花の集荷場をステージにして演奏していただいたこともあった。

皆さんボランティアで出演して頂き感謝している。

里の空き地におもしろオブジェ

里山の保全活動に参加していたころ集めた太いフジヅル、枯れ木の切り株など、直ぐには始末に困るものを材料に、ストーリーあるオブジェに創ってみた。



野外コンサート

家族で玉祖神社に来た子供たちが大きな昆虫のオブジェでひととき遊んでいく。

水呑ハイキングや、農免農道のウォーキングに来る人が、大阪平野を一望できる広い空間で、小鳥の声を耳に、気持ちの良いひとときを楽しんでいただければ…と思う。



オブジェを見る子供たち

※只今、スペース全体に朽木とキノコを配し、物質循環で森林の生態系が保たれる様を表現しようと製作中。

第5章

捨てるとこない木綿

Cotton could never be in the Baggage

村西 徳子 (Tokuko MURANISHI)

衣食住と一口にいうが、河内の、日本の「衣」をまかなって暑さ、寒さから護ってくれたのは木綿、「食」の代表は米、そのワラは雨露をしのぐ屋根となって「住」を支えた。日本人は古代からこのようにして生きてきたし、身近な田畑に綿と稲があればよかった。しかしその後、人間は進歩の名のもとで楽を求め、自分を自分以上に見せたいという欲を持ち、余分のものを持ち込み過ぎた。

河内木綿は本来の暮らしに最も必要な衣料として、大和川付替え後の新田に植えた綿から生まれた。自給自足から一足踏み出して製品化、人の役に立つ河内木綿で富が生まれた。限られた面積に、需要の高い綿の栽培をした河内人は賢い。

植えたワタは美しい花を付け、膨らんだサヤがはじけ綿が顔を出す。それを繰って種を取り、さらに杭いて糸に紡ぐそして織ったら布という身に付け易いものになる。木綿を産業化し、豊かになった河内人はさらに賢い。

糸を染めて織ると縞ができる。白布に型紙で糊を置き、染めれば様々な文様柄の布ができる。河内人は芸術家にまでなった。

襦袢(じゅばん)や着物、寒暖に合わせて着回す重ね着は、吸湿によって夏涼しく、冬は重ねることによって温くなる。そして晴れの目にはめでたい文様で染め上げた着物で装う。この素晴らしい天然繊維・木綿がいかに自然に適い、人間の健康に寄与するものか現代人は見直すべきである。

さらにエコロジーの視点からも、畑から生まれ育った木

綿は、着物が古くなったら寝間着。何度も水をくぐって適度に柔らかくなったものはおむつ、その後は雑巾、使い終わった最後には畑に埋めて肥しになり土に還る。完全リサイクルである。今、社会問題となっている消費生活の無駄を考えると、昔の木綿の文化は、如何に理にかなっていたかを思い起こしてほしい。

今、一握りになった土地ではあるが無農薬で綿づくりをし、赤ちゃんが直接肌につける肌着を河内木綿で作ってみたい。皮膚科へ行くとアトピーや全身原因不明の湿疹で待合室でぐずる子にいつも出会う。少子化で国の将来性さえ危ぶまれる今、この子達にオーガニックコットンで肌着を作ってあげられないものだろうか。

私たち NPO 法人河内木綿藍染保存会は、伝統の河内木綿文様染めを継承し、さらに文様を生かした商品づくりに取り組んでいる。昨年プリズムホールで開催された企画「河内木綿と生きる」では、ファッションショーに河内木綿文様が生かされていた。また、他のボランティアの人達の支援も受けながら、八尾市佐堂で取り組んでいる綿づくり「夢のコットンロード in 佐堂」運動も 8 年目を迎えた。

私達のささやかな運動が蒔いた一粒の綿の種の成果を、国や府・市が生かしてくれないか、さらにもうけを優先しない心ある企業がバックアップしてくれないだろうか。私は心の中でそう願っている。85 歳である。

第6章

フローズサイエティ 齊藤農場

Flower Society Saito Farm

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

フローズサイエティは1947年4月に市民、関西財界、大阪大学などの呼びかけで、戦後の荒廃の中から街と人に花を咲かせる運動として発足、一般市民を対象とした啓発活動を行っています。事務局は大阪市鶴見区の「咲くやこの花館」内にありますが、発足当初は、八尾市の齊藤農場内でした。

八尾市では、小学生が自分たちの八尾市のことを学ぶための参考書として副読本を作成しています。昭和34年八尾市教育委員会発行の副読本「私たちの八尾」には、フローズサイエティの齊藤さんの花作りについて、下記のように書かれています。

花作り

齊藤農場の初代社長さんは、小学生の時から花を育てるのが大好きで、太平洋戦争前は、中国上海で花壇の運営をしておられました。この頃病院へ見舞いに花を持っていき入院している傷病兵が、見舞いに貰った花を見て大変喜び、心が癒やされ元気になられる姿を見て、花が人に大きな力を与えることを知り、世界中の人が花を見るときに心を持てば、戦争はなくなると考えたといわれます。

日本に帰国した戦後は食糧難の時代で、花を育てるゆとりがなかったので、草花を育てる研究をし、小さな種が芽を出し花を咲かせるまでのことを勉強し、花作りの基本を覚えたと話されました。

あるとき、一生懸命に育てたアネモネが咲いたので近所の子供さんにあげると、数日後子供さんの母親がアネモネの花を買いに来られ、「肝臓病で入院して苦しんでいる主人がアネモネの花を見て苦しみが和らぎ元気になった」と話されたのを聞き、花の持つ力を再確認され、以来花作りに一層努力することになったそうです。

花を育てる日々の仕事は親が子供を育てるのと同様、愛情を持ち、優しく毎日必要だと思うことを教えるように、毎朝起きるとすぐに花壇や温室を見て回り、花の顔を見て水をほしがっているのか、水が多くて困っているのか、又、日光をほしがっているのか、日光が強すぎたのかを判断することから仕事を始めます。肥料をほしがっている植物には、適当な肥料をやります。花の種類によって肥料をやりますが、肥料のやり方が偏りますと花の形や色が違ってきます。冬になると霜よけをしてやるようにして、雑草が生えているとこまめに引き抜きます。植物、花の様子を毎日観察しながら、根気よく続けることが大切です。(以上、副読本から)



齊藤農場

育苗・人材育成

齊藤農場では花作りだけでなく、農業用の各種の苗の出荷をしておられ、三重県伊賀上野に農場を2箇所もち育苗をしておられます。近年、園芸や農作業を楽しむ人が多く、これらの人達の希望に応え、各種の苗を作って各地のホームセンターに卸しておられ、ホームセンターで苗を購入して農作物を育てている人の話では、齊藤農場の苗は育ちやすくて良いといわれます。



園芸用の苗

齊藤農場では、花を育てるだけでなく、花作りに努める人も育てておられます。その中には中国人の方もおられます。八尾市と友好都市締結をしている中国上海市嘉定区（当時は嘉定県）の農業技術研修生を受け入れていただき、齊藤農場で実技研修をしていただき、花作りの技術を教えてもらった結果、修了生が上海市で園芸場を持って頑張っていると便りがあったそうです。

フラワーズサイエティ（一般社団法人）

〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2-163

咲くやこの花館事務所内

主な事業

園芸大学、講演会、フォーラム

図書の発行 会報など

見学会 希望者募集してバス見学

花アブストラクト 掲載誌 20

受託事業

咲くやこの花館緑化相談

大泉緑地緑化相談

久宝寺緑地植木園芸相談

大阪府高齢者大学・講師派遣

第7章

八尾の特産野菜

Special Vegetables in Yao

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

八尾若ごぼう

若ごぼうはキク科の2年草で、繊維質が豊富で新陳代謝を活発にするとして、昔からよく食べられてきました。元々は日本には自生せず、原産地はヨーロッパからアジアにかけての温帯地方です。中国から薬草として渡来したと言われ、平安時代には食用とされるようになり、野菜として全国に広まるのは江戸時代と考えられています。

若ごぼうはかつて江戸時代に、現在の大阪市内の上町台地で多く作られていましたが、大正の頃に現在の八尾市域にも栽培が広がりました。戦後、都市化の進展とともに大阪市内や八尾市の西部では栽培されなくなり、現在では南高安地域が中心産地となっています。栽培は、9月中頃に種を蒔き、初めに芽吹いた葉茎は冬の間に霜にあたって枯れてしまうので、春先に再び葉茎が伸びたところで堀取って出荷します。八尾でも最初に生えた葉茎は霜枯れを待たずに、殆どが刈り取りされるようになっています。最初に生えた葉茎は筋っぽくてかたく、地元では殆ど食べられません。

若ごぼうの収穫は、ハウス栽培ものが1月下旬から2月下旬、トンネル栽培ものが2月中旬から3月中旬、露地栽培物が3月中旬から4月初旬に行われます。

一般に根を食べるゴボウと異なり、主に茎(植物学的には葉柄といいます)や根、さらに葉も食べられる野菜が「若ごぼう」です。「葉ごぼう」とも呼ばれ、地元では束ねた形が矢に似ていることから、「やーごんぼ」とも呼ばれています。独特の香りと歯ざわりが特徴です。江戸時代からの伝統と言われる独特の矢型の束で市場に出回り、春を呼ぶ野菜として親しまれてきました。

八尾市では、平成16年に12ヘクタールの畑で321トンが生産されており、大阪府の生産の約7割を占めてい

ます。その後統計調査が行われていないため、詳しい生産量は不明ですが、殆どの農作物の栽培が減少する中、ほぼ横ばいの生産量を維持していると思われます。府外では、四国・九州地方で生産されています。他産地の丸東に対し、横に並べて結束する「矢形」の出荷方法が八尾さんの特徴です。

八尾えだまめと紅だて

枝豆は大豆を未成熟な内に収穫したもので、蛋白質やビタミンなどの栄養価の高いわりに、カロリー控えめの健康食材です。八尾市は近畿有数のえだまめ産地です。完熟状態で出荷される「八尾えだまめ」は、甘みと旨みがたっぷり高く評価されています。

そんなえだまめが軟弱野菜同様、生鮮品であることがあまり知られていないのです。緑色の硬いさやに覆われているため、保存が利きそうに思われますが、収穫して2日たつとアミノ酸と糖分が半減するのです。八尾市のえだまめは、消費者の近くで出荷されるので、翌日に食卓に供されるため、美味しさを充分味わって貰えます。

お刺身のツマとして小鉢やサラダの上ののっている赤い小さな芽が紅だてです。朝に刈り取ってその日のうちに出荷できる利便性で、かつては全国でも8割が久宝寺で生産されていましたが、20軒あった生産農家が後継者不足や農地の宅地化で現在では2軒だけになりました。

紅だての辛み成分ポリゴジアルに殺菌作用があり、傷口や胃痛や胸焼けにも効果的な薬草として古くから用いられてきました。ビタミンやミネラルが豊富な新芽野菜としての価値を見直してほしいと、ドレッシングなどの加工品作りに挑戦されています。

第8章

綿作りと河内木綿

Producing Cotton and Kawachi Cotton

西辻 豊 (Nishitsuji Yutaka)

八尾市史によりますと、八尾での綿作りについては、慶長年間（1600年代初頭）に栽培されていたと見られ「久宝寺木綿」の名が記録に残っています。また高安山麓の扇状地にも、早くからも綿の栽培があって「山の根木綿」と呼ばれていた事が伝えられています。

江戸幕府も煙草、藍、甘蔗などの特産物は、本来の年貢米中心の政策上からも厳しく禁じられていたが、木綿栽培だけは特産物としながらも、これを本田畑に耕作することを黙認していたとあります。

この頃の衣料は、従来の麻布にかわって木綿が全般的に用いられるようになったのと、鎖国による綿花の高値が国内産業を援護することになったと考えられ、さらに大和川付け替えによって開発された新田が木綿栽培に適していたため、一層の発展を来すことになったと言えます。

綿作りは米作りのほぼ2倍の収益があり、さらに木綿織は実綿で売るよりはほぼ2倍の粗利益があったと推定されています。また、農家で綿織りをすると手間はかかるが、綿の種子は綿実油の原料となり、その絞り粕は綿実粕として肥料や飼料にもなる貴重な作物だったと言えます。

農家では、農閑期を利用して自家綿織り作業や、問屋の下で織り綿の賃仕事をし、木綿織の機仕事をしていました。従って村内の労働のすべては木綿作り、木綿織加工に向けられており、多忙なときには、他から奉公人を雇い入れることも多々あったようです。

江戸時代中頃になって、従来の白地木綿以外に織り糸を種々に染色して縞模様や格子模様に織ることが考案されると共に、型染布、筒書模様と工夫され、技術的にも進んでいきます。

縞模様としては、千筋織、万筋織、大名縞、格子縞と種々工夫されたものが織られるようになります。縞織を工夫した人が自分の作品の見本として残すため、布切れを帳面に

貼り付けて参考資料に残されたものを「縞帳」と言い、大切に保存されてきました。

その後、藍染めの型染め布が考案され、主に客用、結婚用夜具表地にすることが始まります。また、防染糊を用いる型染めが行われるようになり、染め模様として植物文では、菊、牡丹、桐、松、竹、梅、唐草などが使われ、動物文では亀、鶴、小鳥、蝶などが一般的に使われるようになります。

このように、綿作り・木綿作りが農作業だけではなく、物作りとして発展することになり織り方や染色の技術的なことさらには文様の描き方にも工夫がされ、いろいろな衣類、日用品が作られるようになります。

安政5年（1858）通商条約の締結によって、外国との貿易が進み、外国綿の輸入が多くなることで国産綿が値下がりしていくと共に、国産綿の綿毛の長さが外国綿に比べて短く、機械織りには不適であったため、綿作りは不利な作物となり、木綿織手工業も衰退の一途をたどることになりました。

なお、綿作り・木綿作りを産業としてみた場合、綿作りには肥料として干し鰯や油粕などの金肥を要することから、農家は作付け前に肥料商から前借りして収穫時に支払うことにしましたが、綿作りは天候に左右されることが多く、不作にあい農家が困難に陥ることも多かったようです。綿作りは、他の農作物に比して高収益をもたらす作物ですが、不安定な作物でもあり、肥料代も支払い得ない年もあり、農民が商人の前期的商業資本の元に囲いこまれ、その支配下で利益を搾取され、農民自体が近代的に発展することができなかったといえます。

伝統文化としての河内木綿

河内木綿の研究者・辻合喜代太郎氏（元大阪市立大学教授・八尾市史編纂委員）は、自ら研究活動続ける傍ら、地域の人達や愛好家に働きかけ、「河内木綿研究会」を組織し、それぞれの家に保存されてきた物を大切にすると共に、河内木綿に関する各種技術を伝承するように努められました。

今では市内の文化施設を中心に、個人的研究者も含めて、河内木綿の継承保存活動が行われるようになり、八尾市立歴史民俗資料館が主催して、毎年「河内木綿祭り」が行われるようになっていきました。このような動きの中で、活動に必要な綿の生産に努める人も出来ました。河内木綿研究会員である山本在住農家の寺尾和一郎氏がその一人です。

平成2年（1990）には寺尾氏の努力が認められ、大阪で開催された「花博」会場で、河内木綿の栽培展示が行われ、多くの人に河内木綿の花を見て貰うことが出来、栽培された綿を使っての綿織り等の実技体験や木綿製品の展示も行われました。

このように河内木綿は八尾の伝統文化として守られるようになり、今後も保存伝承が続けられることになることでしょう。

エルミタージュ美術館での河内木綿展

なお、辻合喜代太郎氏のコレクションは八尾市立歴史民俗資料館が寄贈を受け貴重な資料として保管されています。

辻合コレクションに興味を持ち、辻合氏意思を受けて河内木綿の保存伝承に努めておられる一人が、NPO法人「河内木綿藍染め保存会」理事長村西徳子氏です（『捨てる所ない木綿』を参照）。

平成15年（2003）9月末から2カ月間、ロシア・エルミタージュ美術館での河内木綿展「ジャパンプルーの世界」に辻合コレクションと共に旧家に保存されている貴重な河内木綿の着物などが展示されました。

この展示会は、サンクトペテルブルク市創都300年をお祝いする行事に、同じく300年の歴史を持つ東洋の織物「河内木綿」の展示をすることになったもので、文化財として展示されたものには、辻合コレクション、旧木綿問屋「綿吉」西岡家、同「嶋治」、旧黒谷庄屋坂本家に保存されている着物、法被、風呂敷などであり、これらと共に村西徳子氏と、河内木綿伝習所の西川悠子氏の着物復元作品などが展示されました。



エルミタージュ美術館での河内木綿展

河内木綿は農作物として、また、多くの人に利用される衣類として、さらには貴重な文化財として人との関わりを持ってきました。そして武部善人氏の研究にあるように、日本の産業面、さらには商業資本との関係まで人との関わりを持つ植物であったことをあらためて知ることになりました。

参考文献

- 武部善人（1981）『河内木綿史』吉川弘文館。
- 武部善人（1988）『綿と木綿の歴史』御茶の水書房。
- 村西徳子（1994）「河内型絵・河内木綿と藍染」
- 河内木綿特別展委員会（2003）『エルミタージュ美術館での河内木綿展・図録』八尾市史の各編

第9章

日本人と花のかかわり

八尾市高安地域における花づくりの調査成果を中心に

The Linkages between the Japanese and Flowers

岡田 清一 (Seichi OKANA)

はじめに

古来より人は、花は美しいものとして愛しんできた。日本人と花との関りについては、正月の門松・注連飾りにはじまり、桃の節句、花見、彼岸や盆、冠婚葬祭など、身近に見る伝統行事から感じることができる。現在、花屋さんには年中を通してさまざまな花があふれ、国内だけでなく世界各地から新鮮な花が消費者に届けられている。人は花に対して時代の経過とともに、快適な環境や景観、コミュニティや福祉など、求め方が変わってきている。人と花のかかわりについては、生産者、流通関係者、消費者など多方面から捉えることができる。本章では、昨年筆者が当館の企画展開催に伴って実施した八尾市高安地域の花づくりの調査成果を基に、生産地からみた人と花のかかわりについて述べる。

奈良時代から江戸時代までの人と花との歴史

奈良時代の『万葉集』には、日本人がいかに花とのつながりが強かったか、歌から読み取ることができる。数値で見ると、約4500首の歌のうち、約160首がハギ、サクラ、カエデ、タチバナ、ツツジといった花や植物を歌ったものである。ここで興味が引かれるのは、今でこそ日本を代表する花としてよく用いられるキクが1首も出てこないことである。キクは中国から入ってきたものであるが、栽培されるようになるのは平安時代になってからのことで、この頃の日本ではあまり知られていなかったようだ。

平安時代になると「古今和歌集」にサクラを歌ったものが多く見られるようになり、この頃からサクラが日本を代表する花になっていくようである。同時代の終わりごろから鎌倉時代にかけては、公家の調度品や衣装、また、牛車にキク、フジを模った「家紋」が用いられるようになる。

室町時代になると「能」の衣装に花の文様が用いられる

ようになる。そして、それまで観賞用としての対象から、「生け花」、「立華」といった装飾的な用いられ方が生まれる。

安土桃山時代では、千利休によって「茶花」と呼ばれる茶道や茶会の席に山野草の素朴な一輪挿しが見られるようになる。これは、派手さを競う先述の「生け花」、「立華」といった華道とは対照的なものである。

江戸時代に入ると、現在身近に見ることができるヒマワリ・オシロイバナ・カーネーション・マツバボタン・パンジーなどが外国から入ってくるようになる。

また、当該期は二代将軍徳川秀忠がツバキを好んだことにより、園芸が盛んとなった時期でもある。ツバキやサクラ、ウメ、カエデは人気を博し、幕末まで愛好され続けた。この時代になると、庭を有しない長屋住まいの町人までもが縁日に出かけて鉢物を求めたといわれる。

大阪における花づくりの歴史的背景

仁安3年(1168)に俊乗坊重源上人(1121-1206)が、中国よりスイセンの球根を持ち帰り、現在の和泉市桑原で畑作物として村人たちにその栽培方法を伝えた。これが大阪における最初の花の栽培で、全国で最も早い時期とされている。800年以上たった現在も当地では花づくりが主たる産業であり、とくに代表されるスイセンは和泉市において「市の花」となっている。



スイセン／和泉市桑原町

時代が下り、花の需要が増大するのは大坂夏の陣(1615

年)の戦死者の供養からと言われている。長居地区(現在の大阪市住吉区長居西)周辺では、それに合わせるように、キンセンカ、キク、ケイトウなどの仏花の栽培がはじまるようになる。大阪は平地が狭く、低地も水田に不敵な砂質地で、花づくりには好条件であった。なかでも長居地区一帯はそうした地理的環境に合致していた。その後、江戸時代の大阪庶民の余暇(娯楽)の過ごし方として、有名神社仏閣(四天王寺、住吉大社、大阪天満宮、今宮戎神社、生國魂神社など)への参拝が盛んとなり、大坂以外の他地域からも多数の参拝者による各季節の花の供花(仏花、供花)をみる。



昭和30年代のキク栽培の様子/八尾市神立地区

(八尾市市政情報課撮影)

八尾市高安地域における花づくりの歴史

八尾市は大阪府の南東部に位置し、東部には標高400m前後の高安山が南北に連なって奈良県との自然境界となっている。その山麓の西側に花の産地である高安地域が位置する。そのなかでもとくに花づくりが盛んなのは北部の神立地区で、大阪では既述の桑原町に並んで有名である。当地区における花づくりの歴史は古く、およそ200年前から夏ギク、秋ギク、寒ギクといったキク栽培が行われていたことが古文書史料(玉祖神社文書 大竹村甚兵衛一札 弘化3年(1846))から判明している。



現在の神立地区に残る「ムロ」

明治期になると当地区を中心に、キクその他の切花、春の枝もの(桜の木など)を大阪の間屋へ出荷するようになる。その後、飾花の流行に伴い、キクは農家戸毎に栽培されて

いく。中頃になると、先述の長居地区からの種苗や技術の導入により、ますます花づくりが盛んとなっていく。末期には、山の傾斜地を利用して建てられた石組みの「ムロ」と呼ばれる加温施設によって促成栽培が行われる。

大正9年ごろにガラス温室が導入され、昭和初期にかけて本格的な花づくりが大阪の各地域ではじまる。現在、花の産地として有名な土生滝や福田(岸和田市)、野畑(豊中市)、新稲(箕面市)など殆どの産地が当該期に成立する。



昭和35年のガラス温室/神立地区『大阪・花の歴史』大阪府農林会館 大阪花の歴史編集委員会 昭和56年3月発行より)

昭和4年(1929)、関西行幸の際に各地物産の陳列として、神立地区からシャクヤク、カラー、ヒメユリの3品が出陳された。戦中は「農地作付統制」により、観賞樹類は徹底的な打撃を受けるが、戦後、花づくりの復興は目覚ましく増産されていく。昭和28年(1953)、ビニールが開発されてビニールハウスが普及する。

その後、キクの収穫期を人工的に変動させることを目的に電照を利用する栽培法が始まる。キクは、日照時間が短くなると花芽を形成し、やがて蕾となり開花するという性質がある。その性質を利用し、花芽が形成される前に人工的に光をあてることにより、花芽の形成と開花時期を遅らせる栽培法である。八尾市の北側に隣接する東大阪市においてもキクの電照栽培が盛んに行われている。

現在は、身近に花を取り入れることが少なくなり、花の消費が減ったことや海外から多くの種類の花が運ばれてくるようになったことなどから高安地域の花づくり農家は、後継者問題も含め、厳しい時代を迎えている。しかし、各農家では、時代に合わせて消費者のニーズを探求し、キク以外にナゲシコ・カーネーション・ケイトウ・ヒマワリ・チューリップ・アスターなど、季節ごとにいろいろな種類の花を地元のみならず兵庫県や和歌山県など近畿圏内の遠方まで出荷し、日々健闘されている。



電照ギクの栽培／神立地区



水呑地蔵境内（神立地区）に建立された花塚碑

花供養

花づくり農家、花屋、花に関わる流通関係者など、生業の元となる花を供養する祭事が全国の寺院等で行われている。大阪で代表的なところでは四天王寺（大阪市）、龍安寺（箕面市）、憶念寺（吹田市）で、八尾市では神立地区にある水呑地蔵境内において毎年4月中旬ごろに当地区の花農家および関係者が参集し、慰霊祭が行われる。当地区では、昭和57年まで既述の四天王寺へ花農家の人々は参っていたが、翌年に水呑地蔵境内に「花塚碑」が建立され、当境内において行われるようになった。

おわりに

本章は「花」について生産者側から捉えたもので、結果的に「日本人と花のかかわり」という本題とややかけ離れ、偏った内容のものとなってしまったかもしれない。しかし、筆者が今年の企画展に伴う調査で実際に花づくり農家の方々の見聞を通し、人と花のかかわりについて現状を紹介できたことは意義あるものとする。時代は移り変わろうとも、生産者であれ、消費者であれ、花を愛しむ心は変わらないだろう。

参考文献

田中 宏（2005）『花と人間のかかわり 花の文化史』（自然の中の人間シリーズ 花と人間編6）農山漁村文化協会。

大阪府農業会議（1984）『大阪府農業史』大阪府農業会議。

渋谷正一・瀬川弥太郎（1981）『大阪・花の歴史』大阪府農林会館、大阪花の歴史編集委員会。

大阪府花卉園芸連合会（2003）『大阪の花：大阪府花卉園芸連合会設立50周年記念誌』

第10章

八尾高校の環境教育

Eco Education at Yao High School

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

八尾高校は、明治28年に大阪府立第3尋常中学校として創立し、建学以来地域の政治、経済、社会、教育、文化を担う有為な人材の育成をモットーとし「自力学習」「文武両道」そして「質実剛健」を教育の根幹に据えて、人材育成に務め、平成27年には創立120周年記念式典を挙行了した伝統ある高校です。

平成11年、大阪府立高校における環境教育推進のためのエコ・ハイスクール指定事業に応じて、環境教育起点八尾高校として様々な取りくみを進めることとなり、21世紀を担う高校生の環境問題への理解を深めると共に、環境に優しい学校作りを目指し、①緑化環境（花と緑にあふれた学校環境）②自然環境（自然に優しいエコロジー社会）③生活環境（資源再生のリサイクル生活）の3分野の取り組みを進めることとしました。

具体的な取り組みとして、①緑化環境では「八尾高2000年の森植樹祭」の実施に併せ、緑化推進、ビオトープの造成、ユーカリ樹の保護、狐山の再生に着手を。②生活環境の取り組みとしては、セミナーハウス屋上に風力太陽光発電装置設置。雨水を活用してグラウンドおよび樹木に散水するための貯水槽設置を。③生活環境の取り組みとしては、ゴミの分別、リサイクルの推進などを重点に、全校で取り組みを実施しました。

これらの取り組みにより、平成15年には全国ビオトープコンクールで「奨励賞」、全国学校関係緑化コンクールでの「準特選」を受賞しました。そして、創立110周年記念事業の中に、ソーラー発電システム、井戸掘削によるグラウンド・植栽への散水施設の設置をするなど、環境事業が続けられています。

ビオトープの造成作業

環境教育を地域に根付かせるため、ビオトープの造成事業では、造成工事の折々に近隣の小中学生に見学してもらった他、市内小・中・高校生の協力を得てアンケートを実施、調査分析を行い環境教育の指標を作成、ビオトープ事業の教材化、市内小中学生への教材提供をしました。また、幼稚園、保育所とも連携をし、自然との交流内容についての教材化によって環境教育について理解を深めるなど、地域との連携・交流にも務めています。

花いっぱい運動

大阪府八尾土木事務所の協力を得て、花の種から苗を育て、学校周辺にプランターを配置し、街の美化運動に資しています。

環境サミット開催

環境アンケートの調査結果を持って、市内教育機関の参加を得て環境サミットを実施し、学校教育における環境問題の理解を深めることに資しています。

八尾高にはシンボル樹が2本あります。いずれもが外来樹であり、国際化時代に生徒達が世界にまで飛び立って行くことを願っているように思います。

樹齢100年のユーカリ樹

明治30年4月、大信寺校舎が新築されたのに併せ、西運動場（現八尾高校敷地）の整備が行われました。初代校長・坪井仙次郎氏は、在任中に「草花園」を設けるなど、植物愛好家であり、東京小石川植物園をしばしば訪れておられ、行く度にすくすくと成長しているユーカリ樹に感銘し、生徒の健全な生育を願い西運動場に30本のユーカリ樹を植えられました。爾来ユーカリ樹が八尾中学校のシンボル樹と

なり、現在も同窓会報の表題にも使われ生徒達に愛されてきました。

昭和 9 年、鉄筋コンクリート造りの校舎が西運動場に建てられたとき、敷地整備で多くの樹木が整理され、ユーカリ樹も現在校門横に残っている 1 本になりました。平成 10 年創立 100 周年の記念事業の一つとして樹齢 100 年を超えたシンボル樹・ユーカリの空洞部に炭を入れPR樹脂で蓋をする保存治療が行われました。

メタセコイアの卒業記念植樹 (1956 年)

高校 8 期生の卒業記念に何をするか話し合われたとき、卒業生の中に植物に関心があり、当時「生きた化石」として話題になり成長が早いので、後輩の在校生の成長を願うことにもつながるとしてメタセコイアの記念植樹が行われました。

今では卒業生の願い通り大きく成長し、幹回りが 1 メートル 20 センチ、樹高が 18 メートルの大樹になり、野球場バックネットの裏側で成長を続けています。

2009 年、半世紀ぶりに 8 期生の同窓会が集まったとき、自分たちの願いを在校生に分かって貰いたいと銘板を立てることになり、メタセコイアが再デビューすることになり

ました。



バックネット裏のメタセコイアと記念銘板



第11章

伝統民芸つくりもん祭り

The Traditional Folk Arts *Tsukurimon Festival*

八尾木民芸つくりもん保存会

八尾木地区の人たちが毎年8月28日をお祭り日としている「八尾木不動明王」に農作物の豊作を感謝する気持ちを込めて、農作物を使った民芸展示物を作り、不動明王にお参りする人々と共に豊作を喜びあうように始められた「つくりもん祭り」が地域の伝統行事として300年間受け継がれています。

八尾木地区は八尾市合併前の曙川村の中心地であり、聖徳太子が物部守屋を攻めたとき、この地を通る川にさしかかったときに夜が明けたということから明川（現曙川）と呼ばれるようになったと伝えられています。

八尾市は、称徳天皇の信任を得た弓削道鏡の出身地であり、称徳天皇がこの地に行啓されることで設けられた行宮を平城京に対する西ノ京と呼び、由義宮が置かれたところが八尾木と推定され、由緒ある土地です。また、三条西公条が吉野詣の途中由義寺名残の金剛蓮華寺に参られたときの記録に、「この八尾という所は鶯の名所なり、よのつねのは尾を12枚重ねなり、この所は尾を8枚重ね、すぐれたるよし」とあり、8枚重ねの鶯の名所ということから、八尾の地名を名付ける理由の一つにもなっています。

八尾木不動明王についての伝説によりますと、宝永元年（1704）大和川付け替え工事で出土した石材を村人が持ち帰り、由義神社の北100メートルにある水路の橋に利用したところ、農作業に行き来する牛が其の橋を渡らないので不思議に思い、古老がよく観察すると、石の不動明王に気付く、有志が相寄り堂を建てお祭りすることになったとあります。

村人たちの信仰心が深まるにつれ霊験もあらたかになり、眼病を始め難病を治して頂けるといことが伝わり、参詣者が多くなったので、毎年8月28日を祭礼日としてお祭りする事になりました。祭り日には農作物を使って民芸展示物

を作り、庭先に展示して参拝者にも見てもらうことで、不動明王に感謝とお礼の気持ちを捧げることになったのが「つくりもん祭り」の始まりです。

この行事は戦時中に途絶えてしまいましたが、経済的にもゆとりを感じるようになった昭和52年に有志が相寄り「八尾木民芸つくりもん保存会」を組織し復活することになり、現在まで続けられてきました。

民芸作品のテーマは、テレビドラマで話題になる歴史上の人物や時の人、その年の干支などが取り上げられ、農作物等を使って作品を作り上げ、庭先や集会所に展示します。そして展示物の作者は作品の説明文に使用した農作物の名前をもじって取り入れるなど、文芸的な活動になっています。



小学生作品・ものけ姫 幼稚園児作品・ピカチュー

八尾木民芸つくりもん保存会では地域を挙げて取り組む行事とするようにと、曙川小学校校区まちづくり協議会と合同で取り組むことになり、地域の幼稚園、小学校にも参加を呼びかけ、子供達なりにかわいらしい作品が展示されるようになり、地域の連帯感の醸成、後継者育成に役立っています。また、これらの作品の素晴らしさに感動した他地区の人たちが、自分たちの地域や行事にも「つくりもん」を展示してほしいと申し出られることになり、八尾における「植物と人の共生」の実践が楽しく続けられています。

第12章

ブータンで国葬となった八尾のひと

自然と農業

The Person Born in Yao to have be National Funeral

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

国民総福祉量という考え方を主張しているヒマラヤ山麓の王国ブータンで国葬をしてもらった八尾の人がダジョー西岡です。ブータンの農業指導に一生を捧げ、ブータンの最高の称号である「ダジョー」を授与され、亡くなられたときは国葬をして送られ、3日かかっていた通夜・葬儀には5000の人が見送りに来られたことで、ブータンでは西岡京治を知らない人は無いと言われています。

八尾高校から大阪府立大学に進み、探検家でもある中尾佐助教授（当時）のもとで修士課程を終え、中尾教授や、川喜田二郎大阪市立大学教授（当時）らと共にネパールの学術調査に参加します。この時、中尾教授は西岡京治がブータンの農業に強い興味を持っていることを知り、開発途上国援助計画としてコロボ計画によりブータンに派遣する農業専門家として西岡を紹介します。

1964年5月海外技術協力事業団から派遣された西岡は、里子夫人と共にブータンに住むことになります。「最初の1年間はブータンのことを徹底的に調査せよ」との川喜田教授の教えを守り、各地を訪問、農民の声を聞き、農民の必要としている技術について調査をします。これが後に夫婦共著の「ブータン神秘の王国」にブータンでの生活ぶりを書かれることになると共に、農業指導が普及していく基礎になったと言えます。

自給自足の生活をしているブータンでは、食料品を売っている店がなく、日々の食事にこまめに赴任直後2日間食事の面倒を見てくれた開発庁の職員さんに紹介して貰い、いろいろ教えを請うた老夫婦が、西岡夫婦がブータンに来た目的を知り、「ここでは私たちが貴方達のアパ（父）とア

マ（母）になるから、貴方たちの両親に心配しないように手紙を書きなさい」と言い励ましてくれました。この老夫婦が王家に仕えてきた地域の長官であったことが王家とのつながりが出来、王家が西岡夫婦に配慮して下さることになります。西岡夫婦も真心を込めてブータンの農業指導に当たり、立派な成果を残したのですが「ブータン神秘の王国」の最後には、次のように感謝の気持ちを書いています。

ブータンに初めて住み着いた外国人である私たちは、旅行者には想像できないいろいろな障害にぶつかった。そんな時、この国でそれを助けてくれることの出来るのは、国王はじめ王家の方々であった。ブータン王家は、大変国民から尊敬されている。しかし、決して畏れられているわけではなく、人民に頼られている王家なのである。言い換えれば、非常に民主的な王家なのである。私たちが困難に出会ったとき、それをちょっと人に話すと、しばらくして、国王や王妃がそれを知っておられ、実に適切に助けて下さるのであった。

西岡が最初に取り組んだのは、パロの水田の一部に設けられた試験農場での野菜作りです。日本から持参した数種類の粃と野菜の種を育てることから始まります。精魂込めて作った作物は、パロの気候ともあい良く実ります。パロ城で春と秋に開かれる国会に各地から集まった代表者が、良く出来た米や野菜に目をとめ、彼らがその種子を求めて故郷に持ち帰ることで、西岡の作物がブータンの各地に広がっていくことになります。

最初の任期は2年でしたが、さらに1年延長され、3年目には成果を認めた国王が西岡に土地を選ばせてくれ、パ

ロ県ボンデ村に広さ7.6ヘクタールの日本式「パロ農場」が出来ようになります。広くなった農場では小型耕耘機や脱穀機を使うようになり、各地での農業指導にもこれらの農機具を貸し出すようになります。そして、国会に集まった代表者達が農場を視察し、西岡も各地の農場を訪問、視察と指導を重ねることで、西岡の農業技術がブータンに浸透していくことになります。

1976年からは「水田のある村をつかって焼畑農民を定着させる」という「シュムガン県総合開発計画」の責任者となります。遠隔山岳地帯で農民が直接参加して計画を立て、水田の開発、水路、道路、橋の建設、村落の生活基盤整備を行うもので、5年間に800回もの会合を持ち、土地の人たちが自分たちで作れるものを紹介して選ばせ、その土地にふさわしい、身の丈に合ったものを自分たちでやるということに徹し、農業指導を通じて人材育成をしています。5年間で700ヘクタールの水田が拓かれ、5万数千人の人々を焼畑農耕から定住農耕に変えたと記録されています。

1982年からは、ブータン政府第5次五カ年計画の農業開発計画作成に参加、パロのボンデ農場に国立農業機械化センターを発足させ、農具の製造、改良部門を強化させ、機械化による近代化、人手不足の解消に役立て、1988年には、パロ県パロ谷総合農業開発計画を立て、2年間で農村の基盤整備を完成させました。

なおブータンと日本との交流面では、大阪で開催された「花博」では、ブータン展示場を担当し、昭和天皇崩御の祭にはブータン国王の随員としての役を果たすなど、重要な役割を果たし、「ダショー」にふさわしい人物であったと言えます。

なお、ブータン・クエンセル紙（1992.3.28）には概要、次のような追悼文が掲載されています。

荘厳なる告別式には、あらゆる階層の人々、その殆どは彼の友人が参加した。

皇族王家からはナムギャル・ワンチュク国王、アシ・ソナン・チョウデン・ワンシュック殿下を始め、総軍司令官、外相他多くの高級官吏、貴顕紳士、日本からの友人、農民の大集団が参加した。

国王は西岡夫人と娘さんに対し、深い弔慰を示され、一生を捧げた仕事ぶりに対し、また、ブータン発展に価値ある貢献に対し深い感謝を示された。

日本の旦那はとても立派な人であった。農民と共に働き、農民を助けた。彼は「ゴ」を着てゾンガ語を話し、ブータンの食物を食べ、生涯をブータンで過ごした。

里子夫人は、「パロで火葬されたことは大変良かった。ダショー西岡はここで幸福であった」と言われた。

パロの農夫は、「彼は、我々にとって父親以上のものであり、彼は私たちと一緒に住み、我々の生活水準の向上を助けた。パロ谷も、この感情に反応した」と思いを述べる。



ブータン・クエンセル紙

参考文献

「神秘の王国・学習研究社」

『河内どんこう』41号

第13章

ワシントンの桜と八尾

Sakura Festival in Washington, D.C. and Yao

金子初美 (Hatsumi KANEKO)

ワシントンの桜祭りの歴史

ここ十数年の間の八尾の街に「ハナミズキ」が多く見られるようになったと思いませんか？ 私は最近「桜」「ハナミズキ」を見る度に思うことがあります。ワシントンの桜祭りの歴史は、1844年ナショナル・ジオフィッツ協会（初の初代女性）理事に就任した、エリザ・シドモアさんが、以前来日の際「日本の桜」に見せられ「ポートマック川沿いに桜の植樹を」と、提案したのが始まりで、以後24年間、所轄官庁に働きかけその後3人のキーマン（二世代大統領夫人も含め）を経て4人の念願が叶い、1912年、尾崎行雄東京市長が日本から桜を送ったのが始まりでした。

ハナミズキ100周年記念：桜祭り

3年後の1915年アメリカより日本へハナミズキを返礼として贈られました。このような歴史、ご存知でした？ 私も以前「河内どんこう100回記念」に掲載させて頂いた時の2012年「100周年記念：ワシントン桜祭り」を知ったのが初めでした。その3年後、2015年「ハナミズキ100周年記念：ワシントン桜祭り」もありました。私達はその記念行事にも参加しこの時は公式行事（日本大使館及び米国議会主催でのレセプションパーティー等々）や桜の女王を決めるガラパーティーにも参加させて頂きました。

「International Junior Princess」の誕生

この時の友人のお陰で主人（金子州成）はNCSS関西理事となり、「子供達に何か体験をさせたい」「日舞を広めたい」と思っていた私（西川由芸路）といたしましては「日米交流の場で子供達を舞わせよう！」と、2015年、初代International Junior Princessとして孫達を連れて参加した。米国のジュニア・プリンセス達は「プリンセスとし

ての、お勉強会」から参加されたが、私達は日米の公式行事から参加した。

4月12日 米国日本大使館でのレセプション（佐々江駐米大使ご夫妻と）

4月13日 米国議会主催：国立植物園でのレセプション

4月14日 ワシントンD.C.ウィラードホテル・レセプションでの日舞・さくら披露

4月15日 ガラパーティー（NCSS主催）（日舞・さくら さくら）披露

アメリカの皆さんから 日本の子供達の着物姿に 日舞に cute, cute!と盛大な拍手を頂きました。

帰国後の行事

帰国後は、八尾市長へのご報告に始まり、大阪松井府知事へのご挨拶、大島衆議院議長へのご挨拶にと（子供達にとりましても）大変有意義な1年を過ごさせて頂きました。八尾にも多く植樹されている「ハナミズキ」を見ていつも思うことは、2017年は「ワシントン桜祭り105周年」です。これからも続いて行く盛大な「桜祭り」「日本の桜」と「米国のハナミズキ」を通して、私は子供達には広い視野で、色々な体験をさせてあげたいと、未来を担う子供達に、世界に目を向け、体験できる環境を八尾から国際感覚豊かな子供達を送り出したいと思っています。また、河内音頭も唄えて、太鼓も叩ける私は「あの盛大なパレードに、河内音頭も加われば良いな」と希望は膨らむばかりです。私達はこれからも未来に向かう子供達を応援します。



第14章

八尾北高校におけるビオトープと科学

Biotope and Science in Yao Kita High School

塚口倫生 (Tomoo TSUKAGUCHI)

はじめに：環境問題へのアプローチ

人間の生産・消費活動が活発化するとともに、環境汚染問題、資源問題、環境破壊問題が、人々の関心事として大きく取り上げられるようになった。そして、問題解決へのアプローチのベクトルは豊かさや快適さを追求する欲求を減らす方向ではなく、豊かさや快適さを持続的に追求することを目標に、CO₂の排出削減＝クリーンな自然エネルギー(太陽光、風力、地熱・・・)の開発及びそれへの転換、生物多様性(種の維持)の保全、3R(リデュース、リユース、リサイクル)活動の推進といった活動に向けられるようになった。もちろん、人間の生産・消費活動と資源や環境の保護保全が両立するのであれば、それがベストで、あえて禁欲や時代逆行をよしとする必要はないだろう。ただ、資源や環境はすでに大きなダメージを受けており、現在も小さくはなかったかも知れないがダメージを与え続けているのだという意識は、常に持つておく必要があり、環境問題は、このことを踏まえて、これからも、ますます多様で継続的なアプローチがなされるべきだと思われる。生産活動のある企業、消費活動の場である家庭、そして、それぞれのバックボーンとなる研究機関、教育機関、さらに、行政、報道機関・・・、こういったもろもろの個人や組織が、環境問題の現状についての認識や情報を共有し、取り組みについての意図や方向性について議論や検証を重ね、お互いに連携しあうことが大切だと考える。

「環境教育」：環境を扱う教科とその視点

ここでは、環境問題についての意識を共有し、対応の方向性を検証するという面で、教育機関はどのような取り組みができるのか、あるいは、どのような取り組みをしてい

くべきなのか、という視点から考えてみたい。環境に係わる教科・科目とその内容を学習指導要領を参考に概観すると、小学1、2年生では、「生活」で、自分と自然とのかかわり、自然に関する活動、四季の変化や季節、動物や植物の成長などを、小学3、4年生では、「社会」で、飲料水・電気・ガスの確保、廃棄物の処理など、「理科」で、生物と環境、動物の活動や植物の成長などを、小学5、6年生では、「社会」で、環境の保全、自然災害の防止、公害(大気汚染、水質汚濁)、森林資源、農業や水産業など、「理科」で、植物の発芽から結実、動物の発生や成長、生物と環境(水、空気)のかかわり、食物連鎖などを学習し、中学校や高校では、グローバルな視点から環境問題(森林伐採・砂漠化、オゾン層の破壊、酸性雨など)を学習することになっている。私の地元、八尾市でも、小学校4年生で、市立のリサイクルセンターにおいて、身近なごみ問題と関連させながら、3R(リデュース、リユース、リサイクル)活動について学習している。

小学校で身近な環境として取り上げた内容をふまえて、中学校や高校でグローバルな環境問題として提示し、アクト・ローカリーへと、発展的に引き継がれていくことが大切である。たとえば、高校の「生物」で生物多様性の意義を取り上げたり、「家庭科」で地産地食や端布の再利用、残飯とコンポストでの堆肥化を実習してみたり、小学校から高校にわたる意識的・意図的な学習の積み上げなどが大切である。

また、家庭でも学校でも、実際の自然を自分の肌で感じるといった機会が少なくなってきたり、自分の五感で何か良くないことが起こりつつあるのではないかと、少しずつだけ良い方向に向かいつつあるのではないかと

った、気づきの場面が不足しており、その結果、学んで知っているけれども、その知識を実際の生活場面で生かすきれていない、自分の問題となっていくのではないかという懸念もある。この気づきをうながすということからいえば、「総合的な学習」や総合学科高校の選択科目などで試みられている体験型学習、問題解決型学習は中学生や高校生にとって、必要かつ有効な手法であろう。

教育現場でもこういった意識のもとでの取り組みの蓄積が期待されており、ユネスコ・スクールでの開発教育の手法（ディベート、調査、フォト・ランゲージ、発表、ワークキャンプ...）なども参考に、今後も、試行錯誤を繰り返しながら、この分野の学習モデルのスタンダードが確立されていくのではないだろうか。

総合学科高校の特徴：教科・科目を活用した取り組み

次に、総合学科高校・大阪府立八尾北高等学校での学校ビオトープを活用した「植物と人間の共生」にかかわる取り組みを紹介してみたい。

まず、総合学科高校について概観しておく、従来の「普通科」や「専門科」が、それぞれ、各高校で設定された単一の教育課程に基づいているいろいろな教科・科目を学習するのに対し、新設された第三の学科「総合学科」は、従来の教育課程では対応しきれない新たな学習課題や進路ニーズにこたえようというもので、たとえば、保育や福祉、環境、情報、表現や創作といった系列と呼ばれる選択科目群を各当該高校で設定し、生徒たちは、その中から、自分の関心や進路希望にそった科目を自由に選択し、各自が独自の時間割を作って学習するというものである。そして、この学校で設定する教科・科目においては、知識習得型、技術向上型だけではなく、体験型、問題解決型、地域連携型の学習手法を活用するような教育計画の作成も奨励されている。いわゆる「生きる力」や「みずから学ぶ力」を育成しようという願いが込められている。

さて、八尾北高等学校であるが、「人間・科学系列」に「ビオトープと科学」という選択科目を設定しており、毎年、20名前後の生徒が選択している。この科目であるが、2単位の週1回2時間連続の授業で、ひと言で言えば「晴耕雨読」的な科目で、授業は、原則としてビオトープ（2007年

度から着手しはじめた約1500㎡の空間）で実施している。学習内容は、観察や作業にあたっての説明、観察（そこに生息する動植物や気候そのものが対象）、作業（野菜や稲の栽培と収穫、収穫物を利用しての野外調理、工作物の作製）、観察や作業をしながらの会話...、といったことを基本に、具体的な授業内容については、授業担当者を含む6名の教員からなる週1回のビオトープ委員会という場で検討している。また、学習分野によっては地域の方々からのアドバイスやご協力（講師として、教材の提供など）を頂戴したり、地域連携行事（10月と3月の年2回実施している「学校ビオトープづくり&野外調理体験交流会」には、本校教員・生徒に加え、地域の小学生、ガールスカウト、地元のNPOなどから毎回約70～80名の方々に参加）と関連づけたりしている。この「ビオトープと科学」は、もともと「植物と人間の共生」を体感する場面が多く、また、意識的にそういう機会を多く設定もしている。

以下、その具体例をいくつか紹介してみよう。

(1)野草と野菜の観察、田植え

本校のビオトープには、菜園ゾーンと呼ぶスペースがあり、授業ではここで、1～2学期に夏野菜の栽培と収穫、2～3学期に冬・春野菜の栽培と収穫を実施している。最初の授業では、生徒にビオトープのいろいろなゾーンを紹介がてら案内するとともに、ちょうど花をつけている10数種類の野草についても、名前を覚えさせながら観察させ、あわせて、これから夏野菜の苗を植えることになる菜園ゾーンでの作業を説明している。その後の授業で、野草を抜き、耕耘機をかけて畝を整備し、そこに野菜苗を植えるのだが、現場で実際に作業をしてみることで、生徒たちは、いろいろな思いを抱いてくれる。

授業では、毎回、記録ノートをつけさせているのだが、この時期の生徒の記述を紹介すると、「雑草でも食べられるものがあるのでは」「野菜を植えるまでの下準備がたいへん」「植えた苗がちゃんと育つか心配」「土をさわるのはイヤ」「虫がけっこうついている」「(実の)形がへんなのが多い」「食べてみると案外イケた」「(どのタイミングで)とっていいのかわからん」「(野菜が)こんな風になるということを知った」「とってすぐ食べるのがイイ」「そのまま腐っ

ているのがある」「鳥も食べに来るのかな」「水やりとか、世話とか、農家はたいへん」などと記しているものがあった。

また、水田ゾーン（3m四方の田んぼ2面）では、毎年、泥田に長靴で入って、実際に田植えをするのだが、「足抜けへんでこまった」「調理手袋を5枚重ねたのに、田んぼの水が入って気持ち悪かった」とか、「これがご飯になるのか」「こんなに水があるんや」「こんだけでもたいへんなのに、広い田んぼはどうしてるんやろ」などといった記述があった。



目前の作業についての感想が多いが、中には、こういう作業を通して自分たちの食生活が成り立っているということや、野草や野菜、さらに虫や鳥といった人間以外の生物や生命に気づく生徒もいるし、この授業の中で、少しずつ、自然や人間社会のあり方に思いをはせるようになってくる生徒も少なくない。この授業には、1年間、自然（ビオトープとはいえ）の中で活動することによって、まず、自分と自然とのつながりをちゃんと感じ取れるようになってほしいという願いがある。

(2)ビオトープという空間

また、本校のビオトープには、15m四方の芝生ゾーンと呼ぶスペースがあり、授業では、ここに作製した手作り遊具（ハンモック、シーソーなど）を置いて、実際に使ったり、授業以外でも、体育祭のダンス練習や文化祭の撮影場所として活用している。しかし、芝生は手入れが必須で、春先から芝以外の野草が茂りはじめ、こまめに芝刈り機で手入れしないとあっという間に、使いにくい原っぱになってしまう。授業でも定期的にここを9分割して、分担して（5m四方を2～3名で担当）ジシバリやシロツメクサなどの野草を手作業で抜いたりもするのだが、これが結構たいへんで、生徒たちもすぐに音をあげてしまい、「こんな場

所いらんのとちがう」「グラウンドのような土でええのに」「楽な芝刈り機ないの」といった声があちこちから上がるのが毎年の恒例である。実際、生徒だけで芝生の維持はできていなくて、体育祭のダンス練習が始まる前などには、技師さんに芝刈り機で刈り込んでもらったりしておくのであるが、そうすると「やっぱり、芝生は、気持ちええ」とかいいながら、高校生が無邪気にそこで追いかけっこしたりするのである。



人間と自然の共生というのは、このあたりに素の姿があるように思う。自然の恩恵を受けるには、人間の自然への感謝が必要だし、それなりに人間の自然への働きかけが必要だが、人間は、普段はそういうことをおろそかにしがちだということだろう。

授業では、この自然への感謝とか、自然への抑制的な働きかけということをどう体得させていくかという部分について腐心しているが、実際にはまったく不十分であり、現状としては、まず人間が自然と共に生きているということと、自然は人間の都合だけではどうにもならないということ、身をもって感じよう、という段階でしかない。ただ、これが、環境教育や防災教育の原点であり、「生きる力」を育む教育のスタート地点だろうと考えている。

おわりに

以上、総合学科八尾北高等学校の人間科学系列の「ビオトープと科学」という授業を紹介しながら、「環境学習のねらい」「植物と人間の共生」といったテーマについて、思うところ、感じるところを整理させていただいたのであるが、繰り返しになるが、環境学習というのは、現状を知るといふ知識の部分だけでなく、その上でこれからの生き方をどう選択し実践していくかという行動の部分が大切だと思っている。いわゆる「知行合一」が求められる分野だと思う。

そこでは、行動のモチベーションとなる感情（エモーション）を育むことからはじめ、大きな気づきに支えられた使命（ミッション）へと導く、というのが望ましい展開であろう。

感情はどの世代というより、世代を越えて共感できるものである。きれいな空気や水、青々した草や木を、いいなと感じる。自然は、だれもが一番身近に感じるものである。教室の中での学習活動もちろん大切だが、教室の外へ出

て、自然の空気、水、植物などに触れて感じることに、これが、教育現場でできる環境学習の「最初の一步、重要な第一歩」だと考えている。そして、この感情を家庭や地域で共有しあうことから、少し大きな気づきや活動となり、さらに、社会全体でさらに大きな気づきや活動に広がるのではないか。「自然との共生」を使命として、どのように実践していくのかは、人間にとっての「生きる力」が問われているような気がしている。

第15章

中高安・服部川地区の造園業

The Landscape Industry in Takayasu, Hattori River District

西辻 豊 (Nishitsuji Yutaka)

服部川地区で多いときには170軒~180軒の植木屋(造園業)があった。今でも100軒程度がある。服部川に次いで山畑、郡川も植木屋が多い。植木をしている人とキバナを作る人(花卉園芸)は別である。

昭和30年~40年には服部川の8割ぐらいの家が植木業に従事していた。昭和初期は、植木が副業で農業が主であったが、昭和30年頃に逆転し、仕事の中身も植木を植えるだけでなく、新築家屋の外構工事もしていた。昭和55年頃・石油ショックまでが全盛であった。平成になり、仕事が減り、里山の手入れもしなくなった。



植木屋は家業であり、親の代から引き継ぎ、得意先も受け継いで仕事の範囲を広げ、長野県、石川県、島根県など遠方からの住み込み職人がおり、家族と同じように接し、結婚から独立まで見届け、独立して家を持つまでは持ち家に住まわせていた。

得意先の範囲は、昭和20年頃までは自転車で行ける範囲で、八尾、東大阪が中心であったが、得意先が増えるに従い、大阪市内や奈良県まで広がると、泊まりがけで行くようになり、全盛時代は兵庫県、京都府、滋賀県、和歌山県など近畿一円に出かけるようになり、工務店の紹介で仕事を貰っていた。

仕事の内容は、春は植栽、夏は剪定、冬は肥料おきと年間を通じて得意先の庭の管理を任されていた。

山仕事

服部川地区で「柴」とは、細い木の枝などのことで、薪(たきぎ)・薪柴(たきぎしば)等とも呼び、燃料にするための作業を柴刈りと呼んでいた。殆どの家では自家用の柴刈りをしたが、中には販売をする家もあった。(山手一帯では「柴」とは笹の一種の呼び名である。)

冬は農業も植木業も仕事が少ない時期で、柴刈りは1月から3月までの冬仕事である。持山のない家は、山持ちと言われる地主から柴や立木を刈る権利を買った。(山の境界には目印として、木の杭は腐るので「炭」を打っており、決められた範囲の山で柴刈りをする。)燃料に用いる木は、クヌギ、ホゾ(檜)、サクラ、カシなどで、クヌギ、ホゾが主であった。幹を割り木に、枝をエダキにした。一度伐採すると木で10年、ハシバで3年かかった。

次の写真は昭和30年中頃まで続いていた山仕事(大人も子供も山行き)の風景である。



年中行事(樹木関係)

門松: 正月の飾り、雄として黒松、雌として赤松をのし紙で包んで玄関に飾る

ハツヤマ: 山へ行き酒などを供し、柴刈りや木切のまねごとをしたり、松などを切って帰る。

餅花: 柳の枝に餅をつけ、玄関などに15日まで飾る。

ハルゴト: 子供連れで、山の桜の花の下で弁当を食べる。

七夕：笹に願い事を書いた短冊を飾り付ける。

高安・中高安の産業⁴

小学高学年生が自分たちの住んでいる八尾市のことを勉強するための副読本として作られたもので、子供が大人に尋ねていく文章になっている。その中から高安・中高安の産業の記録から、昭和34年頃の状況を纏めてみました。

1. 神立の花づくり

花造りは季節によりいろいろなものを作ります。球根から育てるもの、種根と言って株で増やすもの、枝物と言って切り花で出荷するもの、草物と言って草花として育てるものと4種類があります。近頃は、温室で熱帯植物も育てています。

良い花を咲かすのには土作りが基本です。粘土質か、砂地か、酸性になっていないか、その花に適した土を作るように研究をすると共に、毎日花を見守って水や肥料が不足していないか、害虫がいれば消毒するなど心を込めて育てることが大切です。

神立地域全体で（神立地区106軒の内102軒）花作りをしていて、耕作地比率では田畑の三分の二が花作り、三分の一が稲作です。

花の種類：半分が枝物、半分が菊。温室で熱帯植物の栽培も

枝物：桜、桃、雪柳、椿、山茶花、木蓮など

花物：菊、水仙、金盞花、カーネーション、ダリヤ、ケイトウ、かすみ草など

温室：椰子の木、ゴムの木、サンスベリヤ、アスパラカスなど

開始時期：200年前からというが、盛んになったのは明治で木綿作りが衰退した後。生け花や仏花を作るようになってから、だんだんと盛んになった。

出荷先：神立園芸組合の取り次ぎで大阪市内（天王寺、鶴橋、梅田など）

2. 中高安の植木づくり

学校の近くに大きな植木屋さんがあり、家の前には石灯籠が沢山並べられていて、大きな庭石がおいてあります。この地区で植木屋さんが多いのは、耕作面積が狭く（1戸あたり平均3反）で、土地が植木に適していて、狭い土地で収益が上がるためです。

植木はこの地区で育てるものもありますが、植木もそれぞれ土地によって育つものが違いますから、必要な植木を他府県から買ってきます。

植木の種類：松、槇、ソテツ、紅葉、つげ、シュウロなど

植木の購入先：遠いところでは、四国、千葉、埼玉、奄美大島、北海道など

地区別の特徴：郡川は苗木、服部川は植木、山畑は植木づくり

開始時期：200年前からですが数は少なく、郡川で2軒、服部川で2軒、山畑で1軒。大正頃から池田で技術を学ぶ人が増え、昭和17年頃は最も盛んになりましたが、戦争中は食糧増産で苗木も切り倒しました。最近では以前のように盛んになりました。

従事時期：稲作の忙しい6月と12月を除いて、年間80パーセントは植木仕事です。



⁴ 昭和34年八尾市教育委員会発行「わたしたちの八尾市」第4冊

第16章

『植物とのふれあい』出版

八尾の植物調査

Publishing Plants & People in Yao

齊藤 侑三 (Kozo SAITO)



1993年(平成5年)、八尾市自然保護の会が発足してから9年目に入った。この間、自然に関したいろいろな観察記録を積み重ねてきた。私たちの身近な自然は、10年単位で振り返ってみると、どんどん開発されて、あっという間に自然が失われて行く。今あるうちに、この

大切な物を記録し、保護しなければならない。ではどうすればよいのだろうか.....?それには先ず人々に人間が生活していく上で、物質的なものばかりでなく、自然がいかに関人のために、潤いとゆとりを与えてくれているかを認識してもらうことが大切だ。その一助として、八尾市の自然を知るための参考書を作成する目的で、自然歩道の草刈りなど請負資金を積み立てていた。

1993年1月に緑化協会から「身近な植物」の本ができないかと相談があった。他の自治体でつくっているところがあり、八尾市でも作っていききたいということだった。八尾市自然保護の会が(財)八尾市緑化協会からの委託で作成することになった。本を作るに当たって、図鑑の目次をコピーして、知っている植物名の横に生えている地名を保護の会の役員でチェックした。

日本に沢山の植物があるが、そのうち何種類が八尾にあるのだろうか。全部把握するのは容易ではないが、出来る限り調査して記録することにした。

秋には地下鉄八尾南駅周辺の植物を調べに入った。参加者に調査票を配り、自分で分かる物だけ記帳した。植物を採取する人、名前を書き留める人、写真に撮る人などに分

かれて、少しずつ前進...した。約1時間で終了し、採取した植物はシートの上に形の似たものどうし分類して並べ、順番に名前の確認をした。

ほとんどの名前が分かったが、2、3不明のものもあり、各自が持ち寄った10数冊の図鑑と首っぴきで名前の確認をした。その場で確認されたものは草本類だけで30科、107種、報告数345点あった。八尾南駅周辺という場所で八尾の平地の草本類がほとんど集約されているのには驚いた。

木本類は、この地域では街路樹、公園、住宅団地、工業団地に植栽されている物で占められていて、自然に生えている物はほとんど見当たらなかったが、15科、20種があった。

八尾市は河内平野の中央部、大和川が形成したデルタ上に位置し、東の生駒山系の秀峰、高安山があり、近畿圏はもとより、全国的分布からみても、本州産の平地にある植物のほとんどが観察できるという好条件に恵まれている。

樹木、野草、の文書スタイルを作り企画案を八尾市緑化協会の持って行くと「予算は出来るだけ取る努力をするから」この方向で取り組んで欲しいといわれた。

振り返ると、本にあげ本に暮れた1年で「素人にも分かりやすく、大人も子供も活用できる」という注文に応えるために専門用語はできるだけ避けた。

本には活動の役にたつように植物だけでなく「こども自然探検隊 自然地図をつくろう」にも取り組んだ。1991年、学校に生活科が入るだろうといわれ環境問題に多くの人達が関心を示していた。自然探検隊の素案を作成し、町内の子ども会役員と八尾市自然保護の会植物部会に見てもらったときに、小学校の先生が来られ「来年から生活科が入るので何か参考になるものはないか」とたずねられた。

そして、10月に校区内の神社の樹木調査に協力をという依頼があり植物部会から参加し、それを地図にしたのが“植物とのふれあい”の都留美嶋神社の地図だ。

1992年(平成4年)9月から学校は月1回土曜日が休みになった。八尾市自然保護の会はその休みを活用しようと「第2土曜子ども自然教室」を天候に関わらず毎月実施した。

この「第2土曜子供自然教室」では、次代を担う子供たちに自然遊びを経験させ、身近な自然のすばらしさを体験してもらおう事を目的に活動を実施した。例をあげると次のような内容だ。

- 1月：植物の冬越し(ロゼット)の観察=ロゼットを見分ける
- 2月：春の七草を知ろう=いくつ解るかな?
- 3月：焚き火の仕方=安全な焚き方
- 4月：道草食ってお花見=食べられる野草摘みと試食しながらのお花見
- 5月：焼き杉の工作=何を描こうかな?
- 6月：草や笹・竹の笛作り=伝承遊びの継承
- 7月：押し花作り=夏休みの自由研究にも?
- 8月：谷川の涼しさを求めて=温度差を感じて森林の効用を知る
- 9月：水生生物の観察=サワガニの親子・ヨコエビ・プラナリア
- 10月：ドングリ遊び=伝承遊びの継承
- 11月：蔓の工作=クリスマスリース作り=林の整理
- 12月：蔓の籠作り~イチゴ狩り=林の整理~自然の恵みを味わう

信貴山口駅に10時集合、2時から3時の間に終了する事で、1回も欠かさず毎月実施した。参加者は70歳台の人から若いのは3歳位までの参加者で、子ども自然教室では子どもに伝承遊びやターザンゴッコ、探検隊、自然の恵みで楽しい工作等、自然の中での遊びや観察を行っている。

残念ながら、生活科は1、2年生で終わりとなっている。そこで低学年むきに「初級編」から作り直し、生活科だけでなく、生物クラブにも引き続き、学生から大人の人達にも活用出来るように作成した。クラフトも「小枝のもっくん」や「小枝のエンピツ」の作成の方法なども掲載しており、森林教室、自然探索や各種イベントにも活用できる内容にした。『植物とのふれあい』は、いわゆる図鑑ではなく、私たちの身近にある植物八尾市域に限って、市街地、田畑、

高安山山麓、山間部の4地域に分けて、ごく普通にある、樹木・草本類を特徴、名称の由来、俗名、花言葉、利活用の方法等をのせて、分かりやすく説明している。

さらに、個々の植物からそれらが形成する森林、田園等を一つの生態系として捉えた視点から、植物の分布、適応、生理、水の働き等にと説き及んでおり、小・中学生の森林教室はもとよりご家族での自然探勝まで十分活用しうる内容となっている。学校教育、社会教育はもちろん自然に親しむ地域活動の場で、広く御活用頂ける内容になっている。

本の植物説明427点(うち、木本162点、草本265点)、カット278点、B5版373ページで厚さ1.8cmの本で、1994年3月に発行した。

本の作成には3年間を要するところ、全力を挙げて僅かに1年という短い期間で完成した。

当時『ゆとりの時代』といわれ、小学校も第二土曜が休みになった。企業も週休2日制が多くなっている。「独居老人に何か生きがいを持てるものはないだろうか」と問われたこともある。

家族そろって、また、子供会、婦人会、老人会の取り組みなどに入れて「近所の自然探検・自然地図づくり」に挑戦し、自分自身も『生きがい』を作ってみたいと思い「子ども自然探検隊 自然地図をつくらう」をまとめたのだ。そして、自然観察の結果を持ち寄り、町の自然を『地図に記録として残して行きたい』と記録していた。

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』がある。『神秘さや不思議さに目を見はる感性、それがThe Sense of Wonder』だ。大阪近辺で自分達のできることを通じ、自然を相手に『The Sense of Wonder』を大人はいつまでも持ち続け、次代を担う子供達と感動を共有していきたいと活動を続けている。

私達は自然の仕組み、例えば、気温とか雨とか、日なた、日陰によって植物の生育しているものが違い、これらをじっくり観察することによって、植物や動物、そして「生命の大切さ、自然と人間とのかかわりかた」を自分で発見していく喜びを、子供達ひとりひとりに見付けてもらい、『弱肉強食の時代』といわれてきた時代を卒業し、生態系のなかで共に生きて行く『共生の時代』がこれからの目指す道だと思っている。

第17章

高安自然再生協議会

Takayasu Nature Regeneration Association

加納義彦 (Yoshihiko Kanou)

はじめに

現在日本は、少子化を背景として人口の減少に伴い急激な高齢化が進行している。大都市近郊の里地・里山である八尾市高安地域においても、30代後半から40代前半の第二次ベビーブームに生まれた団塊ジュニアの世代の人口が急減し、地域の児童数が極端に減少している。その結果、高安中学校区における施設一体型小・中学校の整備に伴う跡地問題が大きなテーマとなっている。このような高安地域の自然再生は、大都市近郊の里地里山における過疎化地域の自然再生が必要である。

かつて、高安地域では、大きな市場に近い里山であったことが、地場産業の活性化につながっており、稲作や河内木綿を含む花卉栽培が盛んであった。また、夏期も水不足を補うために大小400もの溜池が農業用水用の人工池としてつくられ、溜池を含む里地里山の半自然地域がひろがり、そこにはニッポンバラタナゴを含む生物多様性が維持されてきた。しかし、戦後の高度成長期に農薬や化学肥料の大量導入によって、身近な生物は減少し、里山の利用は放棄され、溜池の放置されることによって、多くの生物が絶滅危惧種に瀕している。

したがって、この地域の自然再生の目標は、生駒信貴溜池群に生息するニッポンバラタナゴを含むこの地域固有の生物多様性を維持することによって、人と自然が共生して暮らせる持続可能な地域づくりを目指すことが重要であると考えられる。そのためには、地場産業である花卉栽培や造園業および養魚業を活性化し、新たなライフスタイルを構築するために、水と食料とエネルギーを少しでも持続的に自給できる社会システムを構築できる自然再生方法を考えることがこの地域の大きな課題である。

高安自然再生事業の目的

高安地域の里地・里山保全活動において、「高安自然再生協議会」及びこれに参加する各団体は、主に下記のような考え方にに基づき活動を展開する。

- ヒトの営みと自然が共生できるための里地里山の再生方法や水辺の伝統的水管理手法等を踏まえた「水循環・物質循環の再構築」によって地域の活性化を図る
- 上記を通じた「生物多様性保全」
- 上記を推進するための「多様な主体による協働」

なお、特に生物多様性保全の観点からは、高安地域のため池に生息する地域固有種であるニッポンバラタナゴ（環境省RLで絶滅危惧IA類に指定）が地域の生態系におけるシンボルと見なされている。

高安自然再生事業

高安自然再生協議会では、平成26年1月に設立以後、自然再生の全体構想と共に、実施計画についても議論を行った。以降内容については、こうした協議会での議論の経過を記載したものである。

高安地域の自然再生は、大都市近郊の里地・里山における自然再生である。

この地域の自然再生の目標は、ニッポンバラタナゴを含むこの地域固有の生物多様性を維持することによって、人と自然が共生して暮らせる持続可能な地域づくりを目指すことが重要である。

そのためには、自然再生をすることによって、地場産業である花卉栽培や造園業を活性化し、新しいライフスタイルを構築するために、水と食料とエネルギーを少しでも自給できる地域社会システムを開発する必要がある。

自然再生事業（その1） 高安山の自然再生

高安山のケーブル南側(6ヘクタール)と大阪経済法科大学花岡の森(2ヘクタール)の森林整備と生物多様性の維持活動を実施している。

高安山の自然再生と資源利用



森林資源（バイオマス）の利用

大阪さとり協議会の委託事業として、郡川上流部と大阪経済法科大学の花岡の森で森林整備を実施している。森林整備では、下草刈り・倒木の整理・間伐を行い、間伐材は土留などに利用し、森林の保水力回復と防災を重視して実施している。また、昨年はクヌギ・コナラを薪炭林やほだ木、フローリング材として切り出しを実施した。現在、徐々にナラ枯れが拡大しているため、その拡大を予防することが重要である。

遊歩道を利用した環境教育場づくり

高安山の郡川水源地周辺の森林整備によって、環境学習に利用できる遊歩道が完成している。NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会では、小・中・高・大学生を対象とした里山観察会を年10回程度実施し、自然環境学習を実施している。国指定の文化遺産である千塚とともに、エコツアーの可能性を追求する。

自然再生事業（その2） 河川と溜池の自然再生

溜池の「ドビ流し」(池干し)と改修工事によるニッポンバラタナゴを含む水辺の生物多様性の保全活動を実施している。現在、ニッポンバラタナゴが保護されているため池は、大阪経済法科大学構内ふれあい池、葎仲池、清水池、植田池、郡川A池、心合寺山古墳池、服部川山の峰の祖池、久宝寺緑地の心字池、神宮寺の山の祖池郡川、楽音寺川、恩智川など小河川の自然再生を実施している。



大阪経済法科大学ふれあい池のドビ流し ニッポンバラタナゴ

高安地域のニッポンバラタナゴの持続可能な保護活動

高安地域では、かつてため池を中心とした水循環の仕組みを構築して農業開発を進め、花卉・花木の特産物や米・野菜などの農産物を生産してきた。その中で、「ドビ流し」(池干し)などの伝統的な水管理手法が、ニッポンバラタナゴの保護と生物の多様性保全につながるようになってきた。「ドビ流し」とは、農閑期にため池の底樋を抜き、ため池に溜まった腐葉土を含む汚泥を田畑に流し出す作業のことで、ため池の貯水力の確保と田畑の土壌改良、および、ため池の富栄養化を抑制する効果がある。かつては、ため池で繁殖した魚介類を秋の食材として利用していた。

ニッポンバラタナゴの保護に関しては、大阪産のニッポンバラタナゴの近交化は極端に進んでいるため、池間の個体移動やより大きな複数の溜池で個体群を維持することが重要である。大型な溜池の改修工事として、郡川の祖池や久宝寺緑地の心字池、心合寺山古墳の溜池、服部川山の峰の祖池などが保護池の候補に挙げられている。

自然再生事業（その3） 里地の自然再生

現在、高安地域では大阪経済法科大学やNPOニッポンバラタナゴ高安研究会が放棄地を利用して、伝統的な河内木綿の無農薬有機栽培を実施している。



河内木綿の和綿の有機栽培



和綿の花と綿実



高安地域の稲作（キンタイ米のブランド化）

河内木綿の再生事業

かつて、高安山の山根き（扇状地）は河内木綿づくりに最も適した場所の1つであった。石油化学の進歩によって、化学繊維に押されそのニッチを譲ったが、2030年の近未来を予測するとき、オーガニック・コットンである伝統的な河内木綿の復活は地場産業としての大きな可能性を感じる。

耕作放棄地の自然再生方法として、地産地消の無農薬有

機野菜づくり可能性がありそうではあるが、外来種のイノブタやアライグマによる耕作被害の現状を考えると、あまり手のかからない河内木綿が最も適した花卉栽培になると考えられる。河内木綿藍染保存会などと協力して、高安地域の河内木綿の復活を目指している。

NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会と地元の農家が協力し、ニッポンバラタナゴが生息しているきれいなため池の水を使ったお米を“きんたい米”（きんたい：ニッポンバラタナゴの地元名）としてブランド化をして販売を開始している。

自然再生活動と魅力ある生活の空間づくり

若者が生活するためには、憩いの場としての自然景観とともに便利さと、さらに洗練された街づくりが必要であること。高安地域の農免道路に沿った空間利用として、地産地消の有機野菜販売所やその野菜を利用したイタリアンレストランなどが点在し、大都市近郊の里地里山の長所を利用したまちづくりがポイントになる。また、老人が生活するためには里山でかつて行われていた伝統的な生活様式を維持することと同時に、移動手段などの便利さが必要である。自然再生活動は持続可能な社会づくりを目指すので、高安地域のまちづくり協議会とも協働して地域のコミュニティづくりや地域の保全、防災活動を実施していく。

第18章

環境アニメイテッドやお

Kankyo Animated Yao

環境アニメイテッド八尾
八尾市経済環境部環境保全課

「環境アニメイテッドやお」とは

「環境アニメイテッドやお」は、八尾市内の環境への関心が高い事業者を中心に、当時の八尾市環境部局から環境研究グループの立ち上げを呼びかけ、数回にわたって議論を重ね、環境を総合的に考える協議会として、市民・事業者・教育機関が参加をして、2004年に発足した。「アニメイテッド」という言葉には「いきいきした」という意味であり、「みんなでいきいき活動していこう」という想いが込められている。

協議会の役割は次の3つである。

①協議 交流会や意見交換会を定期的に設け、みんなで話し合うことで、各団体の悩みを共有し、解決のための意見交換を相互に行うことで、相対的な価値に気づくことができる。

②支援 環境保全に取り組む団体の課題解決のための発展的な活動の実施に支援をしている。例えば、上限20万円の支援金を交付したり、多様な主体が集まって課題解決のための協議や話し合いなども行う。

③広報 これらの活動を広く伝えるため、また、市民の自主的な参加を促進するために、広報紙「河内の風」の発行やホームページ、facebookなどを通して、情報発信している。以下では、具体的な事業活動を紹介していこう。



環境活動交流会

「環境アニメイテッドやお」に参画している協議会メンバーだけでなく、八尾市内内外の様々な環境活動団体が集まり、事例紹介を通して

お互いを知りながら各々の環境活動について意見交換や情報共有を行う。そして、それぞれの活動がより発展的な取り組みとなり、新たな協働の取り組みを創出することを目的として実施している事業である。また、4月には大学生を対象とした合同新歓「OSAKA SOCIAL ACTION from YAO」(<http://www.world-seed.com/event/event0002/>)を実施し、新規団員の加入と新たなつながりづくりを目指した。

楽しい環境活動支援金

八尾市内で環境活動に取り組もうとしている団体や、現在取り組んでいる団体に上限20万円を給付し、活動実施のための支援を行う事業である。資金を支援するだけでなく、審査委員からの積極的な助言や、支援金を受給した団体同士の交流といった協働事業の実施などもあり、様々な発展もみせている。

広報紙「河内の風」と情報発信

情報発信のツールとして、広報委員会を中心に広報紙「河内の風」を毎月1回発行し、環境アニメイテッドやおの活動情報や環境保全の重要性などを広報している。広報紙の特徴としては、女性や若い世代の方にも読んでもらえるように、デザインも工夫していることがあげられる。

また、環境アニメイテッドやおのホームページだけでなく、平成28年度から、フェイスブックのページも開設し、多様な世代に活動情報を発信し、様々な主体とつながりをつくる取り組みも行っている。

市民環境講座

市民や環境活動団体との双方向で情報の発信と吸収を行い、交流を深める市民環境講座は、講演会や工場見学、体験型の講座など、多様なスタイルで年間を通じて開催している。

いきいき八尾環境フェスティバル

これは環境アニメイティッドやおの中で最も大きな事業である。このイベントは多様な主体が協力し合って、体験型の企画などで楽しんでもらいながら、多くの方々に日々の環境への取組みを発信し、啓発していくというイベントである。



中心市街地では、西武八尾店やアリオ八尾を会場にして体験型ブースを通じて啓発を行い、自然豊かな大阪経済法科大学花岡キャンパスでは、どび流しやシンポジウムを中心に、自然環境について啓発を行った。

また、平成 24 年度からフェスティバルの企画と運営に大学生が携わり、学生事務局として活動を実施している。

八尾ふるさと歴史楽校

八尾を含めた河内の史跡や民俗的遺物などを巡り、楽しみながら歴史を体感できるという講座である。

訪れる史跡はもちろん、その土地の歩みや土地柄を知ること、今後の八尾のまちづくりを考える視点の一つになるような内容である。

高安の森自然楽校

森林保全活動のリーダーを育成し、高安山をはじめとする自然環境の保全を目的に活動している。ハイキングをしながらの自然観察や、クラフトづくりなど、楽しみながら自然と触れ合う機会を提供。普段何気なく見ている植物な

どの自然も、魅力にあふれていることを知ることができる。

学校ビオトープ

八尾北高等学校にあるビオトープの中で、体験交流会などを通して、さまざまな植物や生き物と触れ合うことができ、自然環境について考え、実体験として学べる機会を提供している。「環境アニメイティッドやお」だけではなく、様々な団体が関わっていることが特徴である。

高安山自然再生定期活動

NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会が中心となり、毎月 1 回、郡川上流部のスギやヒノキの人工林、クスギやコナラなどの二次林で間伐作業や土留め作業などの森林整備活動を行っている。この活動は、高安山の水循環系を健全化し、高安山の下流部のため池に生息するニッポンバラタナゴを含む生物多様性を保全することを目的としている。

森林整備活動



高安山楽音寺森林整備定期活動

大阪経済法科大学花岡キャンパスの裏手にある竹などの間伐やツリーハウスの作成を行いながら、次世代を担う学生と自然環境について考えていく活動である。

ニッポンバラタナゴ保護池の定期調査活動

ニッポンバラタナゴをはじめとした生物多様性を保全するために、水質調査や生物調査を行い、持続可能な開発のための教育（ESD）の場として活動している。

「O-KES」環境マネジメントシステムの啓発活動

シンプル・低コストといった特色を持ち、中小企業をはじめとするあらゆる規模・業種の組織が環境改善活動に参加できる、取り組みやすい環境マネジメントシステム規格

である KES の普及活動に取り組む。(「O-KES」とは、NPO 法人グラウンドワーク八尾が 2010 年に設立した KES 協働組織のことである。)

環境に優しい企業見学

エコツーリズムの視点で、八尾にある魅力的で豊富な地域資源を発掘し、エコツアーという形で実施している。参加者が体験を通じて感じた八尾の魅力を回りに広め、八尾のファンを増やし、地域資源の保全と活用を行い持続可能なまちづくりにつなげることを目的とする事業である。

2. 「環境アニメイティッドやお」の課題と展望

「環境アニメイティッドやお」は 2017 年で発足して 13 年目を迎える。この協議会が 10 年以上続いてきたのは、中間支援的な「つなぎ役」に徹してきたことと、多様な主体で構成しているため、それぞれの様々な強みを持ち合わせることで課題を解決してこられたからである。

今後、さらにつながりを広げ、活動を展開させていくためには有機的な連携と次世代の人材育成が必要不可欠である。そして数多くの主体が集まる中で、組織全体をコーディネートし、マネジメントしていく人材を発掘・確保していくことも、今後の活動を推し進めていく上で重要なポイントとなる。

第19章

生駒チャレンジ登山大会

大阪・奈良の展望台生駒山脈を縦走するスカイウォーク

Climbing Mt. Ikoma Challengingly

渡瀬 弘美 (Hiromi WATASE)

平成16年10月16日、大阪府登山連盟主催の生駒チャレンジ登山大会スカイウォークに参加し、交野市の私市「水辺プラザ」から八尾市の「高安山」駅までの約32キロメートルを歩きました。

大阪は東側の奈良県境に生駒産山脈が縦走していて都心から近くに緑豊かな自然があり、恵まれた所ですが、市街地に住み、近代化した都市生活に慣れると山との関わりが薄くなり、八尾市の高安山山麓も、人と山とが共生することで保たれてきた「里山」が、今では管理が充分出来ずに荒れてきています。自然環境を保全し、住みよい環境を維持すると共に、地球温暖化対策に取り組むためには、一人ひとりが自然の大切さを経験することから始まります。



山や森に親しみ、自然環境の大切さを経験する人を増やしたいと、生駒チャレンジ登山大会が開催され今回が10回目になります。ウォーキングの内容は、脚力や目的に合わせて楽しく参加出来るようにと次の3部門になっています。

○ 「初級」

ゴール「むろいけ園地」 約12キロ

○ 「中級」

ゴール「なるかわ園地」 約23キロ

○ 「上級」

ゴール「高安山ケーブル駅」 約32キロ

各自の体力と目的に応じて個人でもグループでも参加のできる安心な登山です。私は友達に誘われ3人で参加しました。

朝6時過ぎに集合場所へ(水辺のプラザ)受け付けをして、順次スタートです。星の里いわふねの川添いをほしだ園地のビトンの小屋にむかって歩くと小屋の前にクライミングウォールがみえてきた。時間が早かったものでクライマーの姿はなかった。みんな止まることなく、もくもくと歩いている。友達も先に行ってしまった。

地図をみて、つぎは飯盛霊園へいそぐ、霊園内の道を通り抜け長い階段のハイキングコースを室池園地へついた。最初のスタンプを押してもらい次のところへ。

室池園地の、かきつばたの木道は滑りやすいので、「ここすべるよ」と声をかけあって歩く。まだ、一緒に歩く人達がいる。

室池では、家族連れのハイカーに会った。長いつづら路を次のぬかた園地へ向かう。なるかわ園地の休憩所のトイレを借りた。生駒山が見えていた。鳴川峠の鐘の鳴る丘・誰かが鳴らす、鐘の音が聞こえて、励まされた。

ここでも係の人にスタンプを押してもらった。うれしい!お昼を食べているグループの方達と一緒にゆっくりしていたら私達は引き返すよ。エッ、びっくり。ここからが一人旅になりました。胸はドキドキで、自然と早足です。

スカイライン沿いの道に入りアップダウンを繰り返すのでこたえました。でも、前に進まないと、下る道がない。

景色を楽しむことなく目的地へ歩く。

見慣れた山並みに"ほっ"としましたが、ゴールはまだまだ。

八尾市の歴史楽校と一緒に歩いている友達にぼったり、高安からグループで登って来たという。

十三峠から立石越の木道を通り高安山気象レーダーへ。(ここはランナーの人のゴール)歩いて来た人のゴールはまだ先の高安山ケーブル駅です。

やっと辿りつきました。最後のスタンプを押してもらい、抽選をさせて頂きほっとしました。まわりには先について休憩をしていた人達が拍手でむかへてくれました。

歩いた・歩けた・初めて 8 時間歩いた。やったアー。知らない山は魅力があったので、歩きはじめましたが登りでせつせと歩き下りでゆっくりとの思いでしたが、そんな余裕もなくて、思っていたよりは、きつく、山の中で一人が恐かった。なんども友達に電話をするが圏外でかからず。一緒に参加したお友達はやはり先に到着していました。全コース歩くことが出来・春には逆コースを歩きたいと思っています。懲りない 73 才……。



第20章

押し花・木工作品

Pressed Flowers and Woodworks

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

山上健三 (Kenzo YAMAGAMI)

自然に恵まれた日本の四季は、いろいろな花を楽しむことが出来ます。部屋に飾られた花は、人に潤いや安らぎを与えてくれます。また、花見会など集団で楽しむように、人と人とのつながりにまで花木が関わっています。そして花木を日常生活の中に取り入れる工夫をすることが文化的な活動になります。

自分たちの住んでいる街を住みやすくし、発展させる取り組みの一つに「コミュニティーセンター活動」があります。コミュニティーセンターでの講座の中で「押し花」「刻字」を取り上げてみました。花木を活用して作品を作ることが個人の楽しみ、生き甲斐だけでなく、人と人とのつながり、地域のつながりに役立っていることが分かります。

押し花作品

人と花の関わりについては、八尾市立歴史民俗資料館の学芸員岡田清一氏が、別稿で書いて下さっていますように、奈良時代の「万葉集」に始まり、現代の「生け花」「立華」まで、人々の文化的生活のあらゆる面で花に係わっていることが分かります。

花の美しさを長く保存して楽しむようにと、ドライフラワーを作ることから、その美しさを保つように乾燥した花を用いて、「押し花絵」や「押し花カード」などいろいろな作品作りを楽しんでおられる人達があります。



久宝寺地区のコミセン祭りには「小学生による子供教室」の共同作品「夏の日」と題する押し花絵が展示されていました。市内の各コミュニティセンターでは、毎年、各種の学習活動の成果を発表するコミセン祭りを開いておられますが、久宝寺地区の特色は、地域と学校との連携を重視しておられ、久宝寺小学校においても学校の運営方針の一つに「地域と共に歩む学校」として、学習活動の中で地域の人と共に学ぶ「共育」の取り組みを工夫し、各学年のプログラムを組んでおられます。この取り組み成果である展示物を見て、子供達が地域の交わりの中で育っていくことを感じました。

彫る歓びに生きる：刻字講座講師・山上健三

神社仏閣、旅館や料亭など、又個人のお住まいなどに、老師・名僧などの墨跡風豊かな掛け軸や額装類の装飾の逸品を見かけます。これらの多くは紙を素材とした墨筆の額装類ですが、さらにこれに趣を加え、墨跡を元に、素材を「紙」から「木」に託して彫り込んだものを刻字彫額と呼んでいます。時には彫刻を施した老舗の看板や、手作りと思われるお洒落な表札なども見かけます。木材は木独自の温もりと感触、そして自然の木目の多様な美しさと香りの調和があります。さらに自然を生かし既成概念にとらわれず、自由奔放な発想で創作する刻字の魅力は無限であり、観賞する人にとっては、日々の暮らしに潤いと一時の心を癒やす安らぎを提供できる装飾品として、美術的傑作を模索してゆくことが、即ち「彫る歓びに生きる」といえます。

平成15年、八尾市文化会館の展示会場で、刻字額を筆頭

に刻字衝立、組木（動物シリーズ）、コッピングソウ（ディズニー）、透かし切り行灯（松竹梅）、竹工芸など約 150 点の個展を開催することが出来、多くの方々にご観覧頂きましたことを感謝いたします。



平成 16 年からは、八尾市のコミュニティーセンター、シルバー人材センター同好会、等の学習講座講師をさせて頂いており、現在、刻字の講座の教室は四ヶ所で、講座生は約七十名が受講されております。

講座生は刻字に対する熱意があり、和気藹々と面白く刻字に励んで織られます。そして会員相互に切磋琢磨することによって技術が上達することによって、一層の創作意欲を高め生き甲斐を感じて貰っています。最近では当該刻字に絵を添えるなど一層作品に対する付加価値を高める工夫をするなど頼もしい限りです。

ある方は、自分の町のお寺でもある浄土真宗本願寺派(西本願寺・正経寺)に「正信げ」並びに寺院の表札を創作刻字

し、当該寺院に寄進され、また、ある方は、同じく村のお寺(西光寺)に完璧に刻字した「正信げ」や、お寺の「表札」を刻字創作して寄進付され、更にある方は、同町のお寺(太平寺の観音寺)に「般若心経」を創作刻字し、寄進されました。

神社の集会所の看板刻字や町内の地藏尊の社務所の看板など多才に亘って御寄進をされる等、寄特な方が多くおられることに名誉な事と誇りを感じています。



さらに、女性の方で、関西扇面芸術協会の会員(理事)でもある方が、京都市立美術館にて展示会を開催されることになり、挿絵を挟んだ刻字調額を果敢に挑戦され、出展されました。その結果、めでたく京都府知事賞を受賞されました。

これらの受賞に対して、会員が惜しみなく賞賛し、本人も刻字に対する面白さと歓びを体験すると共に、自信を深めた事でしょう。会員が相互に切磋琢磨して、更に向上を目指すと共に、全員が和気藹々の中で刻字調額を愛し、人生を楽しむようになって貰うことを希望します。

第21章

茅葺屋根の保存と生活

Life and Preserving Thecharded Roof

西辻 豊 (Yutaka NISHITSUJI)

東部山麓を中心に、茅葺き屋根の民家が多数ありましたが時代の変遷と共に減少して今では、茅葺き屋根を残している民家（トタンを被せている屋根を除く）は市内に6棟になりました。1987年の調査に依りますと、草葺きの屋根を残している民家は24棟で、トタンを被せた屋根家を含めて152棟が確認されています。

屋根の材料としては、農家など小規模民家では容易に得られる稲わらや小麦わらが使用されていて、藁葺きでは10年程度で葺き替えが必要になるので、村役人や豪農の家では30～40年もつ茅を使っています。

建築年代を知る手がかりとしては、棟札、普請帳、家相図などがあり、八尾木の民家では棟札に天保5年（1834）のものがあり、普請帳では黒谷の民家で安政6年（1859）のものが残されていました。記録はないが家の人の言い伝えとして350年ほど前の建物と言われる家が多いです。

2002年に「八尾すまい・まちづくり研究会」が、八尾の伝統的民家に学ぶ住まいづくりと題して、八尾市役所ロビーで開催された展示会の記録に依りますと、茅葺き屋根を有している民家が12棟、トタンを被せているものを含めて99棟となっています。

伝統民家の歴史を学ぶことによって、昔に出来た「草葺き民家」が時代に合わせて工夫を繰り返すことで民家の基本である「四間通型・梁間長三間」が江戸時代に完成したと思われまます。民家が建て込む久宝寺や八尾地内町と街道筋の村では、茅葺き屋根では火災が広がりやすいということで、火災に強く屋根は瓦葺きで二階部分を低くして物置にした「つし二階」が立てられるようになるなど、民家は時代の変化に合わせて増改築をし、人々は生活を続けてきたことが分かります。民家には先祖からの長い歴史が刻み込まれています。また、長い年月を生きてきた木材は、腐っ

ていない限り新しい木材よりも堅く癖がなくなった丈夫な材料ですから、続けて使用するなど民家の良さを残してほしいと述べています。

與兵衛桃林堂の茅葺屋根葺替

この建物は国の登録文化財であり、河内木綿商であった建物で、今は和菓子商として使われています。八尾市の中心街・近鉄八尾駅の近くにありまますので、2014年に大阪市立大学都市研究プラザが主催した「国際シンポジウム」にご参加頂いた外国の学者の方々にも見学して貰うなど、民間で保存して下さっている貴重な文化財です。

2014年大阪市立大学国際シンポジウム主要ゲストとともに
(UNESCO 文化副事務局長バンダリン氏ほか)



茅葺きの葺き替え工事は、奈良県大宇陀在住で、数々の寺院や茶室の葺き替えを50年続けておられる専門家・隅田棟梁によって行われました。住宅が密集した市街地で、作業場や材料置き場がとれないため、棟梁が自宅の資材置き場からその日に使う茅（宮城県の北上川畔で採取）などを運んでこられます。そして取り外した古い茅は持ち帰り、山で肥料に戻すということで、「人と植物の共生」には無駄がないという実例にもなっています。作業は束ねた茅を屋根に差し込むように載せてで押さえ、木小手（きごて）で叩いて整え銚（もり）のような道具に結びつけた針金で屋根裏まで差し込み、屋根裏の人と声を掛け合いながら垂木

(たるき)に結びつけるというという畳を縫うような手作業の連続です。最上部の瓦の葺き替えも併せて行われ、茅の束を重ねること九層で厚みが1メートルと立派な茅屋根になります。近所の人は、屋根の茅は「人という字が重ねられているようですね」と言われ、切り妻部分の漆喰の白さが屋根の美しさを際立たせています。

吉崎家の茅葺屋根葺替

高安山麓、大窪にある吉崎家は昔、薬草商をしておられたが、今の当主は内科医師として山本で開業しておられ、茅葺きの家屋はお茶やお花の稽古場など文化活動の場として利用されています。

屋根の形は、急な勾配の茅葺き部分と、勾配の緩い瓦葺き部分には調和のとれた「大和棟造り」の立派な屋根があり、国の登録文化財として登録可能な建物ですが、当主の意思で登録されていない八尾市内での貴重な古民家です。

時代に合わせた改造

住む者が時代に合った快適な日常生活を過ごせるように改造した民家があります。



高安自然再生協議会・会長加納義彦教授は、自宅である茅葺き屋根をトタンで覆った古民家（二列4間通り型）を古民家のままの部屋と近代的な部屋の両方を内在する家に改造され、日常生活は近代的で快適な暮らしをすると共に、来客などが和式の古風な雰囲気を楽しんで貰えるようにもされています。

仏間のある和式の南側は旧来のまま、畳や襖のある部屋に座敷机を置き、生活部分になる北側との間に廊下を設け、廊下から北側のダイニングキッチン、浴室、トイレなどの生活部分を段差のないフローリングとして老人が躓く心配の無い快適な生活空間とされています。玄関から入った土間部分は、加納教授の勉強部屋と、ニッポンバラタナゴの飼育研究が出来る作業場のセットにされています。

屋根裏には床を設け、河内木綿の機織機を設置して伝統工芸の保存研究をする人達へ開放することとし、玄関から直接屋根裏へ上られるように階段をつけておられます。

なお、この改造には建築の専門家の指導により、地震にも耐えられるよう構造計算をし、使える古材を使いながら補強もされています。

第22章

造園業の変遷

株式会社庭樹園・創業140年の歴史から

History of Gardening Corporation

當内 匡 (Tadashi TOUCHI)

創業期

庭樹園の創業は明治10年(1887)となっているが、植木の栽培事業も含めると、現会長當内勲より4世代前の當内七兵衛の時からのものである。江戸末期であるその頃から数えると植木に関わり始めて160年以上の歴史を重ねてきたこととなる。当時、當内家は同じ八尾市山畑の地にあり、齋當家の小作であり、齋當家の山の土地を借り、植木の栽培を行っていた。七兵衛は慶応2年(1866)に亡くなり、息子當内栄助が跡を継いだ。栄助は結婚して長男廣吉と次男重太郎を授かるが、次男が生まれて間も無い明治5年(1872)に若くして亡くなってしまふ。先にも述べたように当社の創業は明治10年、創業者は當内廣吉となっているが、その当時廣吉はまだ11歳だったので実際は栄助の弟當内与治平が仕事や家庭を担っていたようである。与治平は植木の生産以外に植木職人として庭木の手入れも行い始めていた。

発展期

植木生産を主とする個人の植木屋から脱却して広く商売を行い始めるのは、廣吉の代からである。廣吉は大和久安寺(奈良県平群町)表喜六氏の紹介で信貴山朝護孫子寺(以下信貴山寺と略する)の造園関係全ての作業を任されることとなる。信貴山の西の山裾で、祖父より植木生産を継承し、また植木屋としても仕事を行っていた廣吉に、表氏が白羽の矢をたてたものと考えられる。



明治43年(1910)信貴山朝護孫子寺
玉蔵院の石垣工事完成時の写真

関わった当初、信貴山寺は衰微していたという。しかし日清戦争(明治27-28年(1894-95))・日露戦争(明治37-38年(1904-05))の相次ぐ勝利で、日本全体の景気が良くなり国運が進展の一途を辿る中、大阪でも大いに儲けた事業家や商人があまた輩出され、その中に信貴山寺の篤信者が多数おり、信貴山寺の施設整備が一気に進められることとなる。

信貴山寺の隆盛とともに事業が拡大する中廣吉は、植清と名乗り隅切り花菱の紋を用いた。通常は自分の名前を用いて植廣とするのが一般的であると思われるが、廣吉は清という字を用いた。また隅切り花菱の紋も當内家の家紋とは異なっている。京都で修行をして、暖簾分けしてもらった可能性もあるが委細は不明である。

信貴山寺の造園工事に携わる中、信徒総代の深い理解と強力な支援を得て、植清の業績は順調に拡大し、常時10人以上の職人を雇用するほどとなった。この時、地元の山畑・

服部川、郡川の多くの若者に作業に従事してもらっていた。



大正3-9年の帳簿（襖の裏紙より発見）

当時の主な造庭物件として下記の現場があった。

- ・信貴山境内及び各宿坊 ・天下茶屋小西朝陽館
- ・松島赤松氏邸 ・永田三十郎氏芦屋別邸及び三軒屋本庭
- ・私市（北河内）原田氏邸（原田織機KK）
- ・倉治源氏瀧保勝会瀧の改修其他
- ・東京品川猿町社納氏造庭及東京大震災後の改修
- ・勢野（王寺）赤松氏別邸

中でも一番大きな現場は、大正2年(1913)ごろに造庭を行なった、道修町の薬商小西久兵衛(3世)翁が天下茶屋につくった「朝陽館」であった。大阪市阿倍野区の東天下茶屋付近は明治後半に市内の多くの財界人が広大な別荘を構えた場所であるが、「朝陽館」はそうした別荘の中でも最も大規模なものであった。「朝陽館」には大隈重信侯など政府や軍、皇族関係の要人が数多く滞在している。廣吉は久兵衛翁より、陸軍大将福島安正男爵と宮内大臣土方元伯爵が訪れた際の写真を頂いている。また當内家の旧宅離れ座敷も「朝陽館」の建て替えに伴って下賜されたものであった。



大正4年(1915)朝陽館玄関

陸軍大将福島安正男爵が訪れた際の写真

小川治兵衛(植治)が天王寺で住友家の「慶沢園」を造庭したのも同じ時期である。廣吉は植治とも交流があったようで、所有していた正嘉元年(750)につくられた十三塔を植治に売却している。その十三塔は京都南禅寺界限にある別荘「野村碧雲荘」に設置されているという。

大正8年(1919)商号を庭樹園とし、大阪市内の北浜に店を構えた。その店は廣吉の長男民三郎が取り仕切り、その頃まだ殆どなかった観葉植物の貸鉢も行い始めていた。



大正8年(1919)門松サンプル写真
(北浜の店で使用していたもの)

停滞期

當内廣吉には長男民三郎と3歳下の弟富三郎の二人の息子がいた。当時の帳簿をみると民三郎も職人に混じって信貴山寺の仕事に就いているので、中学(高校)を卒業した後、父の手伝いを行い始めたと思われる。富三郎は府立八尾中学校(現在の大阪府立八尾高等学校)に進むが、2年生の時に母が亡くなったため中退し、家事一切をやらざるを得なくなった。富三郎は他の職につく予定であったが、兄民三郎が株取引に失敗したことから家を出、その後間もなく廣吉が昭和3年(1928)に63歳で急死してしまったことから、富三郎が家督を継ぐことになった。富三郎は、経験が浅いことに不安を感じながらも、臆負にしてもらっていた得意先を継承した。その頃の造庭物件の主たるものは、瓢山森田氏邸(森田化学工業(株))、浜寺肥田邸(本邸長堀橋)、田辺橋氏邸(田辺本町)天下茶屋小西氏邸などであった。また昭和10年(1935)から大阪府や大阪市などに入札登録をし、大暴風による学校園の被害復興事業など小さいながらも多くの工事を受注した。

当時の帳簿には、仕事先として信貴山(玉蔵院、成福院、千手院)、住吉、吹田、富田林、額田、道明寺、園田、千里

山、枚方が記載されている。戦時中は、植木や庭の仕事が減ったため、富内家は親戚から米屋の権利を譲ってもらい、米や麺類の販売も行い家計を維持した。



昭和10年頃(1935)：四貫小学校奉安殿造庭工事(大阪市此花区)

戦後

戦前とは異なり、戦後は植木の生産販売が中心となる。昭和22～38年(1947-1963)の帳簿を見ると、ほとんどの職人は山で木の手入や掘取・根回しを行っており、育てた木を地元の植木屋に販売している。戦時中、小学校の校庭が芋畑となったように、植木畑も野菜畑に代わり、戦後には地元で植木を持っているところがほとんどなくなってしまった。庭樹園は山で大規模に植木の栽培をしており、野菜畑にせず残っていたため、多くの地元植木屋の植木の購入先となった。その頃から富三郎の長男毅も仕事を手伝い始めている。当時、栽培していた植木には、プラタナス、ヒマラヤスギ、キンモクセイ、イチョウ、カエデ、カイヅカイブキ、カロリナポプラなどがあり、苗木を埼玉安行や宝塚山本から仕入れ育てていた。仕事の殆どが樹木の生産販売であったが、昭和26年(1951)建設業登録(大阪府知事第3050号)を行い、公共工事は少ないながらも継続した。

また富三郎は植木の生産販売をしながら、地元の世話をまめに行っていたようである。昭和30年に八尾市と高安村が合併するが、富三郎は昭和30年(1955)から2期8年間、八尾市会議員を勤めている。それ以前も高安村の村会議員を勤めていた。その頃、富三郎の次男勲は高校を卒業し、繊維関係の会社で働き始めたが、親の意向で家業を手伝うこととなる。勲は大阪市役所に勤める知人の紹介で東京の大手造園会社「東京植木」に1年ほど修行に行き、昭和35年庭樹園に入社した。

高度経済成長期(前期)

勲は入社後主に公共工事を担当し、大阪市や建設省(現在の国土交通省)などの工事を担当した。大阪城の森ノ宮側の入り口部分の植栽工事を行った。アプローチの中央に植栽されたタマイブキは庭樹園の圃場より搬入したもので、当時大阪では庭樹園しか生産していなかった。



昭和59年(1984) 大阪城植栽工事

国道26号線の植栽工事を受注したが、植栽するプラタナスが九州福岡の内山緑地建設にしかなく、わざわざ九州まで買いに行ったという。当時は工事を行う職人さんが少なかったため、ほとんどの工事を親戚関係でご縁のあった平群の若林造園の協力のもと施工していた。

昭和37年(1962)頃には炭鉱閉鉱に伴う離職者が入社する。廣吉がもともと住んでいた家を提供し、家族ぐるみで受け入れた。

昭和40年、5年後に万国博覧会が大阪で開催されることが決まり、それに伴い大阪のインフラと経済が大きく躍進する。当時大阪では各官公庁関係の造園工事はそれぞれの業者が単独で受注していた。しかし万博の工事に全国から大手の造園会社が参入することが予想される中、大阪の造園会社も団結して対抗することが必要となり、同年阪神造園建設業協同組合(以下阪神造園組合と略する)が設立された。庭樹園もその設立メンバーに加わった。

昭和41年、山手に2階建の寮を建設、職人が移り住んだ。当時寮のお風呂は五右衛門風呂であった。昭和42年には九州から集団就職で大阪の他の造園会社に就職していた職人たちも入社し、寮の2階に住み働きはじめた。彼らは3年ほど勤務し九州に帰郷し、それぞれ自分の会社を設立した。

昭和42年、奈良市鹿野園の土地購入の打診があり、富三郎は数カ所に、計1,500㎡を超える土地を購入し、万国博覧会関連等で高まる植栽ニーズに対応できるよう樹木の生産を拡大した。鹿野園ではカイヅカイブキ、ケヤキ、シン

ジュ、イチヨウなど約 15,000 本を栽培し始めた。

また、それまで事務所は當内家の家屋の中に設けていたが、昭和 45 年同じ敷地の南側に新たに 2 階建の事務所（現在の山畑倉庫）を建設する。2 階に社長室、経理・営業部、1 階には工事部、和室、風呂・トイレを設けた。

昭和 46 年には、建設業法が改正され、それまで一体視されていた造園土木工事業から造園工事業が土木と切り離して位置付けられるようになった。すべての工事を造園会社が単独で受注できるようになったため、役所への陳情など様々な交渉・行動を造園業界だけで行う体制をつくり、施工技術の向上を図るために、日本造園建設業協会が発足した。大阪においても大阪府支部が設立され、当社もその設立メンバーとなった。

昭和 47 年には富三郎の末子斉も加わった。斉は中央大学経済学部に進学していたが、事業が多忙を極めてきたので、勲の要望で卒業後すぐに手伝うこととなった。斉は主に営業と設計業務に携わった。その頃の樹木生産業務は、自社で受注した工事に使用するカイツカイブキやケヤキなどの緑化樹木だけを生産する状態となっていた。

株式会社の設立

万博以後、個人経営であった造園会社も株式会社等に法人化するところが増えるが、庭樹園も確固たる信用を確立するため、昭和 47 年 6 月株式会社を設立し、社名を株式会社庭樹園と改める。

昭和 48 年には造園技能検定が実施されることとなった。阪神造園組合が先導、大阪府全域に散在する造園団体と団結して、その運営に関わった。また同年阪神造園組合は、造園技術者を育成するために阪神造園高等職業訓練校を開設、富三郎や勲はその講師として加わった。

昭和 45 年の千里万博以後、日本住宅公団発注の泉北などの団地造園工事や、大阪市や大阪府発注の住宅地区緑道整備や公園整備工事、府民の森整備工事などを多数受注、1 千万円を超える大型造園工事も 44 年度は 1 件、45 年度 2 件、47 年度 3 件、48 年度 5 件、49 年度 5 件、50 年度 6 件と年々増えていった。中でも昭和 49 年に万博記念協会から受注した「万博第 3 工区植栽その 3（日本庭園の迎賓館の西側の地域）」は工事金額 7 千 7 百 50 万円という、庭樹園設

立以来一番の大型工事となった。内容はパビリオンを撤去した後の植栽工事であった。

公共工事が増える中、庭園工事も並行し受注していた。その頃多かったのは西大和にあった濱口工務店からの仕事であった。個人邸の 1 件を勲が請け負った際に、濱口工務店の社長に大変気に入られ、その後勲社長の担当で多くの個人邸庭園の設計・施工工事を受注するようになった。



川村医院庭園工事スケッチ（設計：當内勲）

また、別件で大きな庭園工事も舞い込んだ。斉の中央大学同級生福井氏より、福井氏の父が六麓荘に建設する邸宅の庭園工事の依頼を受ける。地元の経験豊富で設計力に定評のあった海平賢次氏に基本設計を依頼、勲が詳細設計や使用材料など実施設計をつめていった。屋敷の中を通る川の大規模な護岸工事もあり、総工事費 4 千 5 百万円という大きな請負で、昭和 50 年 3 月から 1 年かけて工事が完成した。昭和 50 年 8 月に 5 百万円の増資を行い資本金 1 千万円とする。また特定建設業の許可を取得する。同年 11 月に富三郎が病気で死去し、勲が代表取締役、斉が専務取締役となる。勲が入社した昭和 35 年は、當内親子と手伝いの職人さん数名が所属する程度にまで規模が縮小していたが、昭和 50 年頃には社員 12 名、売上 3 億円を超える会社に再成長をとげていた。また協力業者にも若林造園以外に、府民の森の工事で知り合った阪和造園や、若林造園の手伝いで来ていた植熊が加わっていた。

この頃、来迎寺や西舞台山の畑から多くの樹木を掘り出していたため、資材置き場も来迎寺の畑内にあった。しかし車両や重機など所有する機械類も増えてきたため、より利便性の高い場所を探し始めていた。外環状線(昭和 44 年開通)沿いに土地の購入を考えていたところ、昭和 51 年に富三郎の従兄弟より、東町の土地購入の打診があった。費用は約 3 千 4 百万円であったが、奈良の鹿野園の土地を一

部売却して資金をつくり購入に至った。

営業部にも工事部にもスタッフが揃ったところで、さらなる受注を目指し新規顧客開拓を始めた。公共の営業に並行して（株）関西総合環境センター（現株式会社環境総合テクノス）や、ゼネコンの株式会社浅沼組へ積極的に営業をかけた。関西総合環境センター（現在の（株）環境総合テクノス、以降環境センターと略する）は関西電力の子会社で昭和49年に設立され、建設される電力保全施設の土木や造園の工事を行っていた。営業活動が実を結び、変電所などの草刈り業務を請け負い始めた。

昭和51年に茨木サニータウンにおいて緑地整備工事を受注、その後信貴変電所の植栽工事なども任せられるようになっていく。また、（株）浅沼組からも昭和52年の奈良県あすか野団地での造園工事を機に毎年工事を受注できるようになった。

昭和53年(1978)には、業務拡大に伴い、近鉄上本町駅前、天王寺区石ヶ辻町のビル内に本社を移転した。山畑の事務所は八尾支店として登録することになった。

その年担当した日本住宅公団の金剛東地区13号児童公園整備工事が優秀施工業者として表彰を受ける。同年に近鉄八尾駅が線路の高架化とともに移設されたが、その翌年に下請として駅前広場の噴水工事を行なっている。工事金額2千5百50万であった。



昭和53年(1978)近鉄八尾駅前噴水工事

昭和57年(1982)、株式会社設立10周年を迎え、信貴山観光ホテルにて記念パーティーを行なった。同年、奈良産業大学（現奈良学園大学）の工事を浅沼組が行い始めるが、この物件においては、開学当初から緑地の設計協力と施工を行なった。中でも平成58年の中庭滝池造園工事は大規模な滝を造る工事であった。

会社の売り上げは昭和50年前半には3億円程度であった

が、後半には5億円に届くまで右肩上がりに伸びていった。

昭和60年(1985)には業務の多様化を考慮し、子会社である株式会社グリーンプラザを設立する。

その頃、社員旅行で海外へいく同業者が多くなってきていた。当社も昭和63年初めてタイへの海外旅行を実施する。2組に分かれて現地2泊でのツアーであった。平成元年はシンガポール、平成2年台湾、平成3年ハワイ、平成4年グアム、平成5年マレーシア、平成6年韓国と、会社の業績が好調であったため海外旅行が続いた。

高度経済成長期(後期)：大型造園土木工事の下請受注による業務拡大

昭和60年代に入り、売り上げのさらなる向上に取り組み始める。10億円を売上目標にして、大型工事の受注を積極的に行うようになった。その主な受注先は（株）稲治造園工務所、（株）関西総合環境センター、（株）浅沼組、近鉄造園（株）などであった。

全国でゴルフ場の造成に取り組み始めていた（株）稲治造園工務所からは、昭和50年代後半より毎年工事を請け負っていた。中でも規模の大きな物件としては、大型重機を使用した2億円を超えるゴルフ場造成工事があげられる。1件は昭和61年から奈良の万寿ゴルフ場、職員が1年以上泊まり込みで現場を担当した、総額3億円弱の造成・植栽工事であった。もう1件は、その翌年施工した滋賀県のビックワンゴルフ場で、総額3億5千万円弱の工事であった。しかし、ゴルフ場の造成工事は、金銭的に大規模な工事であり売上増加には大きく貢献したが、利益確保が伴わず、以後ゴルフ場の工事は受注が減少していった。

（株）関西総合環境センターの仕事には昭和51年頃から携わっていたが、関西電力はその頃、南港火力発電所を新たに建設しており、昭和61年頃から地元への貢献として南港中央公園を造成、その後も発電所周辺の緑地整備も行ったが、それらの工事も任された。

また、大規模な送電線周辺の緑道整備も行なっていた。特に、平成元年の「関電北河内線緑化工事」は総額2億円以上の大規模工事であり、同じく平成元年から2年間にわたり工事を行なった「南港発電所周辺植栽工事」も総額2億円を超える規模であった。

(株) 浅沼組に対しても大型造園土木工事を任せてもらうように営業をかけた。昭和 57 年に奈良国体の整備で「新町公園工事」を任せてもらい、担当所長と良好な関係ができたことで、昭和 58 年には新町公園第 2 期工事、そして昭和 62 年には「葛城山麓公園造園土木工事」の下請けをする。「葛城山麓公園造園土木工事」は工期が 2 年以上にわたる工事であり、総額 1 億円以上の大規模工事であった。また、その後も平成 3 年からは、総額 3 億円以上で 3 期にわたる千里中央公園の造園土木工事、平成 5 年にも約 1 億 4 千万円の大規模工事である「中央幹線景観水路造園工事」を請け負った。

近鉄造園(株)の下請けも昭和 60 年頃から積極的に行い始めた。中でも昭和 63 年の「白庭台住宅地造園工事」は 1 億円を超える大規模工事であった。

しかし、民間外構工事は施工経験が乏しく、大きな利益確保には、なかなか繋がらないことが多かった。

平成 2 年(1990)に鶴見緑地にて国際花と緑の博覧会が開催される。当社もその会場の整備工事及び開催期間中の管理に携わる。工事については、平成元年に花博協会からの発注で「街のエリア(北西ゲート広場地区)造園工事」、環境センターの下請けとして「国際庭園インド・ブータン造園工事」「関西電力館造園工事」と 3 件で総額 1 億 5 千万円以上の工事を行なった。また開催期間中の管理においては阪神造園組合の下で街のエリアと山のエリアを担当した。

好景気の中、個人営業的なイメージから脱却し企業としてアピールするために、会社の事務所を山畑から東町の資材置き場に移転することを決定、平成 3 年(1991)12 月に新社屋が完成する。会社設立 20 周年となる平成 4 年 8 月に、盛大な竣工パーティーが行われた。

また平成 4 年には協力業者との親睦を深めるため庭樹園「庭協会」を発足させた。

多様化する緑化ニーズへの対応(特殊空間緑化での取り組み)

平成 6 年(1994 年)、工事金額 1 億円を超える大阪市立総合医療センターの屋上緑化を施工した際、屋上や壁面緑化など特殊空間緑化の必要性・将来性を実感した。時を同じくして、顧客である株式会社浅沼組から開発したばかり

の屋上緑化システム「スカイグリーン」の施工会社としての協力要請があった。



大阪市立総合医療センター屋上植栽工事

屋上緑化などの特殊空間緑化事業に乗り出す決意をした斉専務は、その年の 7 月、八尾支店屋上に「スカイグリーン」のモデル庭園を設営する。

また、本格的な営業活動を始めると同時に、建築と深くかかわる特殊空間緑化には、従来の造園にとらわれない新しい感性が必要と感じ、グリーンプラザに新しい人員を投入し、自らが指揮することを決意する。営業を開始するに当たり、「スカイグリーン」をはじめ流通する様々な屋上緑化システムの性能試験を行い、それぞれの特徴を分析し、TPOに応じて使い分けができる会社を目指した。メーカーと提携し、そのメーカーのシステムを提案する会社が多い中、他社とは一線を画する会社づくりを目指した。

この頃、地球温暖化が問題視され始め、緑化が有効な対策の一つとして認識されるようになってきており、屋上のみならずコンクリート壁面など人工構造物への緑化の開発が急ピッチで進められていた。そんな折、株式会社浅沼組技術研究所のもとに、国土交通省近畿技術事務所から壁面緑化の開発依頼があった。「スカイグリーン」のモデル庭園施工などで強固な信頼関係を築いた斉専務は、開発協力の要請を受け、全面協力体制を敷いた。

屋上緑化工事の主たる物件としては、以下があげられる。

平成 7 年 堺市民病院造園工事

静岡県湯河原厚生年金会館

屋上造園工事

平成 8 年 福岡単位制高校屋上緑化工事

天理よろづ相談所健康保険組合

総合体育館屋上庭事

市立貝塚病院屋上緑化工事

徳島鳴門病院屋上緑化工事
平成 11 年 東大阪短期大学屋上緑化工事
木村外科病院屋上庭園工事
泉北藤井クリニック屋上庭園工事
日本大学医学部屋上庭園工事
平成 12 年 関電病院屋上緑化工事
平成 17 年 大阪シーリング印刷
大阪工場屋上緑化工事

折からのガーデニングブームも後押しし、その講演を聴講した多数のデベロッパー担当者から、販売事務所のモデル庭園をはじめ新築マンションや戸建ての緑化計画を依頼されるようになる。

その中で、神戸モザイクのコンペに参加、受注が決定する。以降リニューアル工事、館内花修景工事、花の広場アレンジ工事を担当し、年間 2 千万円内外の売り上げで、大型継続物件となった。

デベロッパーからは、緑化の設計施工だけでなく販売促進のためのイベント企画・運営などのソフト面も任せられるようになった。

平成 13 年建築の大規模開発において屋上緑化が義務化され、イニシャル・ランニングコストともに低く抑えられる緑化が求められるようになったことから、放任型緑化システムの開発に着手する。デベロッパー株式会社興人から、開発した感温性吸放水ポリマー「サーモゲル」の活用を依頼され、放任型緑化システム「サーモグリーン」が完成する。

サーモグリーンによる主な施工物件

- ・鷹取駅屋上緑化工事
- ・畑山自動車屋上緑化工事
- ・アメニティ屋上緑化工事
- ・大三屋上緑化工事

その紹介で、妙法華院屋上緑化、ディーグラフォート千里中央屋上基盤整備、凸版印刷海老江工場屋上緑化、小松病院屋上緑化など多数の物件の施工を行った。

しかし、この頃からガーデニングブームが去り、デベロッパー関連の仕事が激減する。また、屋上緑化ブームで競合する会社が爆発的に増加する中、ゼネコンによる低価格

発注が常態化し、受注数が減少していった。

多様化する緑化ニーズへの対応（海外日本庭園での取り組み）

平成 5 年、勲の長男である私は荒木造園設計に研修に来ていたハンブルグ出身のバイラー氏から日本庭園の管理依頼を受け、その仕事を庭樹園として請負、ハンブルグ・プランテンブローメンの日本庭園の松の管理を行った。また平成 7 年にも松の管理と 1973 年に作られた日本庭園のリニューアル工事などを約 3 週間滞在して行なった。平成 7 年の松の管理は、設計会社が加わった共同プロジェクトとなった。その後私は平成 10 年 3 月にルイジアナ州立大学の大学院を卒業し、同年 4 月庭樹園に入社した。

多様化する緑化ニーズへの対応（自然保全工事・業務）

府民の森ひろいけ園地にある緑の文化園は、当社が施工から管理まで長年関わった物件である。平成 2 年、工事金額約 4 千万の植栽工事を行い、その後平成 3 年から平成 11 年まで継続して、補植を含めた管理工事を請け負った。平成 6 年には大規模な自然の森造成工事である八尾市の志紀住宅ふれあいの森公園を受注した。



平成 6 年(1994) 八尾志紀住宅ふれあいの森造成工事

平成 9 年には環境センターから奥多々良木発電所の大規模な緑化工事を受注したが、その中にもビオトープが含まれていた。

バブル崩壊期：公共工事激減による受注の大幅減少

国土交通省の建設投資は平成 8 年から右肩下がりに減り始め、平成 20 年には半減する。当社の受注金額も平成 7 年 10 億 5 千万円をピークに激減し始める。昭和 61 年から増加した民間の大型下請工事も減り、平成 10 年頃の会社の売

り上げは2割ダウンの6億円程度となり、平成11年度の決算も売り上げが伸びず、営業利益が会社設立以来、初めてマイナスに転じる。引当金などを取り崩してかろうじて経常利益を確保するような状態に陥った。

そのような状況の中、平成11年6月勲社長は60歳を過ぎ定年年齢に達したため、代表取締役を専務に引き継いだ。その際に私も取締役となる。齊社長は翌年に社内体制の変更を行うが、それを機に長年勤めた社員が次々と会社を後にした。また、定年退職者も多く、社員数の減少、営業・技術両部門の戦力は大きくダウンした。

平成13年度には工事受注はさらに落ち込み、売り上げが4億円台まで下がり、経常利益が初めて赤字に転落する。平成14年にはボーナスを出せない状況となり、決算後に1割弱の減給が実施された。翌年も売り上げ5億円に満たない状況の中、4月にさらに1割程度の減給が実施される。そんな時、心労から平成15年6月齊社長が心筋梗塞により急逝する。齊社長は前日まで趣味の野球に興じる程元気があった。急な不幸に見舞われ、再度勲会長が社長に復帰することとなった。

平成17年さらに売上が半減し、2億円程度に落ち込む。そんな中、不景気の影響で長期間控えていた新規採用を行い、4月に新卒の大学生が入社する。また同年大阪府の府営公園に指定管理者制度が導入され公募が始まる。当社もコンサル会社と連携して、枚岡公園の公募に参加するが残念ながら受注には至らなかった。

この年は、翌年の3月より大阪城にて開催される緑化フェアの準備工事や枚岡公園の大型遊具設置工事の下請けを行なった。この枚岡公園は工期の遅れなど色々問題が発生した工事であった。国交省より兵庫県丹波市の春日和田山道路の植栽工事を低入札で受注し、社員が泊まり込みで現場管理に当たった。

その頃受注した大型工事としては安威川ダム周辺整備工事がある。土木会社の下請けでの工事であり、複雑な階段工を整備するなど、施工内容で大変苦勞したにもかかわらず利益額は少なかった。

平成19年、3千万円を超える赤字となる。会社の運営を任せられていた私は、利益回復の見込みが立たないため、役員会議で固定費を下げるべく人員整理と給与の削減とい

う苦渋の提案を行なう。早期退職や社員のパートへの移行をお願いして引き受けて頂いた。この時期が一番大変な時期であった。

平成19年は都市再生機構の滋賀県東近江市での布引運動公園陸上競技場整備工事及び八尾市の公園工事を受注し状況は少し改善したが、平成20年は淀川河川公園の工作物清掃作業以外、公共工事が全く受注できず、民間工事も大型工事は西梅田公園のみであったため、売上が会社設立時と同程度の1億5千万円まで落ち込んでしまう。都市再生機構の大型工事については平成21年にも滋賀県大津市の伊香立公園整備工事を低価格入札で受注し工事を行ったが、工事利益がほとんど確保できない中、泊まりがけでの現場管理も大変であったので、以後同様な遠方の大型工事は受注を控える等、会社方針を転換することとなった。



平成22年(2010) アリオ八尾屋上緑化

回復期(平成21年～): 指定管理者業務への取り組み

大阪市営公園や大阪府営公園の管理業務が、指定管理制度に伴い民間事業者へ発注されることとなった。

新たな業務拡大のチャンスと考え、指定管理業務に関わりたいたと考えた私は、阪神造園建設業協同組合の指定管理業務と連携し、経験のある維持管理責任者を派遣することなど方策をたて、平成21年から服部緑地公園管理に関わることとなった。あわせて、長居公園の指定管理業務においても関わりを始める。その後、指定管理者関係では、平成25年から石川河川公園と枚岡公園、淀川河川公園にも関わることとなる。指定管理者の公園管理業務は、複数年の長期契約であるため、その間安定した受注が確保できる大きな利点があった。

樹木診断業務への対応

平成3年から樹木医研修制度ができ、当社にも樹木医が

必要と考えた斉社長は、樹木医の取得を社員に依頼し、複数の社員が合格し樹木医となった。平成14年斉社長の母校大阪府立八尾高等学校よりシンボルツリーであるユーカリの樹勢回復の相談を受け樹木治療をおこなった。

また、東京ですでに実施されていた街路樹診断業務が、全国に拡大するニーズを感じ、街路樹診断協会に所属し、大阪での早期受注を目指した。平成17・18年度に八尾土木事務所から街路樹の診断及び剪定検討業務を受注した。

公園管理業務においても、樹木診断業務の依頼が増えていった。主な業務として現在も、阪神造園組合の樹木医チームのリーダーとして、京都府八幡市にある淀川河川公園・背割堤の桜管理検討業務等を行っている。



淀川河川公園 背割堤 樹木治療

自然再生事業発展期：2017年まで

先にも述べた平成14年の八尾高校の樹木治療の際、八尾高校から、ビオトープを創出したいと相談があった。1級ビオトープ施工管理士の資格を取得した社員が、八尾市に生息する絶滅危惧種であるニッポンバラタナゴの生息できるビオトープ池を設計・施工する。

その頃、市民・NPO・事業者・教育機関・行政のパートナーシップにより、八尾の環境を良くするために活動する環境パートナーシップ協議会「環境アニメイティッドやお」が発足する。八尾高校にビオトープ池を設計・施工した縁で当協議会に参加、中心メンバーとして会をけん引することとなる。

八尾の山際の地域には、日本全国でも八尾を含め4地域でしか確認されていない絶滅危惧種の淡水魚ニッポンバラタナゴが生息しているが、その保護に尽力している「ニッポンバラタナゴ高安研究会」にも入会し、研究会と協働で保全活動を行うようになった。

平成16年、八尾高校のビオトープが日本生態系協会主催の第3回全国学校ビオトープコンクールで奨励賞を受賞。平成20年には、株式会社環境総合テクノスが受注した安威川ダムのビオトープ事業にも関わった。

八尾高校のビオトープ担当教員がその後、学校法人奈良学園中学校・高等学校に移籍、授業に里山保全を取り入れるなど、積極的に自然再生に取り組もうと考え、業務のコーディネーター及び施工の依頼を請けた。

この奈良学園の活動は、その後、全国学校・園庭ビオトープコンクール2011で国土交通大臣賞を受賞するなど、多方面から評価されることとなった。

様々な物件で経験を重ねることで、その後第二阪和国道・泉南マリブリッジ・和歌山森林公園などの自然再生工事に携わることとなった。

伝統のつながりを再び

社長となった私は自社の強みや弱みを分析する中で、長い歴史を持つことが強みであるが、その伝統やご縁が引き継がれていないことに気づき、平成22年から少しずつ自社の歴史調査を始めた。

信貴山寺に関わった写真や資料があったので、その写真や資料をもって信貴山玉蔵院を訪れ、お話を伺った。その訪問が途切れかけていた過去の歴史や伝統の糸を再び繋ぐことになった。

その結果、平成24年12月に富貴閣前の整備工事を、翌年には寺務所建て替えに伴う前庭の改修工事を任せて頂いた。その後、継続して植栽管理作業も行わせて頂くなど、一度途切れたご縁がつながり継続している。また現在、弱った桜の再生や御神木カヤノキの保全のご相談を頂いている。

業界への貢献

平成18年、勲が造園技能検定審査委員を退き、私が代わりに審査委員として関わるようになった。

また日造協が業界の活性化のために、若手の自主的な活動を促進する取り組みとして、平成22年地域リーダーズ事業が始まり、近畿総支部の代表として選出された。自分の会社が大変な時に、業界活動に取り組むのは程々にした方

が良いのではという認識もあったが、‘少しでも幸運がきた際には、それをお返りする行動をとりなさい’という信貴山の教えに従い、業界への貢献に真剣に取り組むことを決意した。そこでまずはじめたのが、人に任せるのではなく自分がリーダーとなって、率先して造園技術を受け止め、指導者として技術者を育成していくということであった。現在、一般の技術者や役所の専門技術者への街路樹剪定技術、街路樹診断技術、植栽基盤診断技術の講習会を、自ら講師を務めるなどしながら積極的な運営を行っている。

また業界でのネットワークを構築するために、様々な団体への協力も積極的に行なっている。現在、日造協においては国際委員として、また地域リーダーズの代表として、若手経営者や幹部の全国のまとめ役となって微力ながらも貢献している。

今後の取り組み

平成20年を底に、売り上げも徐々に回復し、現在過去の

累積赤字もほとんど解消できてきている。過去の売上高と比較すると、まだまだ寂しく感じられるところはあるが、経営審査事項の評点も昨年900点以上に再び回復し、経営状況を示すY点についても過去最高の854点となった。また自己資本比率についても過去最高の50%以上となり、経営状況も改善することができている。

今後は縮小傾向であった会社規模を再び広げていく方針で、平成26年以降毎年新規職員採用を行っている。

自然再生、屋上緑化、樹木診断治療など、他の造園会社との差別化を図ることができる特化した技術の取り組みについても順調で、安定した仕事の確保また会社の新たな魅力につながっている。まだまだどれも個人の技量に頼っている部分が多々あり、一つタガが外れると崩れるような危うい部分もあるので、今後は各分野での人材補充・育成を今まで以上にしっかりと行い基盤を固め、大阪の造園のリーディングカンパニー、さらに日本の造園のリーディングカンパニーになるように取り組んでいきたいと考えている。

第23章

「自然再生ネットワーク」を次世代へ

Making “Network for Natural Symbolis” Continuing for the Next Generation

太田 博之 (Hiroyuki OTA)

はじめに

若い頃から環境問題に関心があり、関連がある気がして八尾市内の造園会社、株式会社庭樹園に就職しました。

入社して最初の仕事で、四條畷市にある府民の森むろいけ園地で“ビオトープ”に出会い、初めて現場の責任者になった「八尾志紀住宅ふれあいの森」も“ビオトープ”工事でした。この“ビオトープ”という言葉に不思議な縁と魅力を感じ、2000年1級ビオトープ施工管理士資格を取得しました。

2002年、八尾市で絶滅危惧種の保護活動を行っている「ニッポンバラタナゴ高安研究会」への参加、八尾高校のビオトープ池の設計・施工を担当したことから“ビオトープ”が業務になり始めます。

しかし、当時“ビオトープ”という言葉は、池を創出して、いきものを育成・観察するという狭義なイメージが一般的には浸透していました。当時の現状にすっきりとしない何か心がの中に存在していました。

「ビオトープと自然再生」

同じく2002年、過去に損なわれた自然環境を取り戻すため、行政機関、地域住民、NPO、専門家等多様な主体の参加により行われる自然環境の保全、再生、創出等の自然再生事業を推進することを目的とした自然再生推進法が制定されます。このことを契機として“自然再生”という言葉と概念が世間に浸透し始めます。

2004年に発足した「環境アニメイティッドやお」に参加していたご縁もあり、高安地区の里地・里山の再生活動にも関わりを持ち始めます。この頃から“ビオトープ”から“自然再生”へ。「自然再生ネットワーク」がつながりはじめます。

業務としての“自然再生”を確立するため、2010年、社内

に地域貢献・社会（環境）貢献を促進させるための部署“自然再生事業部”を新設した頃には、八尾市以外からも業務依頼を受注できるようになりました。

奈良学園：ネットワークの拡がり 1

奈良学園中学校・高等学校は、奈良県大和郡山市にあり、約13haの広大な校地を有しています。校地北側には学校が所有する里地・里山が存在しますが、30年以上放置され荒廃が進んでいました。

弊社は2007年度から開始された里山再生整備事業の業務を受注し、「環境教育発信拠点校」をめざす学園の取組を全面的にサポートしています。業務の技術的特徴としては、①里地・里山の荒廃により分断された生態系をネットワーク化し、生物多様性を復元すること、②再生地において、恵まれた環境を利活用した環境保全教育を推進することの2点が挙げられます。

生態系のネットワーク化、生物多様性の復元

再生エリアは、かつて人の生活に密接していた里山林及び小川・棚田など、豊かな生態系が形成され、多様ないきものが生息した環境が広がっていた場所でした。

まず現地調査を実施した結果、現在分断された生態系ネットワークを復元し、本来有している自然ポテンシャルを復元することで、素晴らしい里山の原風景がよみがえる場所であると確信し、業務を行いました。

再生整備したエリアは①棚田跡、②森の教室、③里山・甲虫の森及び、各エリアをつなぐ観察遊歩道（図中点線）に大別されます。また、観察遊歩道はいきものの移動空間としての役割も兼ねています。



再生した雑木林

環境保全教育の推進

再生した各エリアを利活用した環境保全教育のプログラム作りにおいても、年々充実を図っています。中学・高校の在校生に対する教育だけでなく、入学希望者に対する見学会や、地域住民に対するいきもの観察会の実施など、幅広い内容を行っています。

また、弊社のネットワークを活かし、樹木医やビオトープ管理士等、専門家の研修場所としての活用も行うなど、環境保全教育の推進を進めています。



棚田での環境学習

和歌山森林公園：ネットワークの拡がり 2

和歌山市森林公園は、奈良時代には東大寺が塩田の製塩に使う燃料山を紀伊国海部郡加太に200ha所有していたという記述もある場所で、今は和歌山市の所有になっています。

薪炭の利用が減少したことで林床は薄暗くなってきており、里山の雑木林には継続的な手入れが必要な状態になっています。

適切に管理することによって、地表に光が届いて幼木が育ち、植物の根が張り、水を涵養する機能を取り戻すため、今年、森づくり作業支援業務委託が発注され、弊社が受注しました。

この業務の特色は市民ボランティアとの協働で整備を進め、森林公園の利活用推進と自然観察や自然に親しむ機会の充実により、森林公園の魅力アップとPRを図ることを目的としています。

森林自然再生モデル基地の創出

森林公園内の林内は遷移が進行し、全体的に薄暗い森林になっていました。高木枯損木の倒壊や落枝の危険性や、林内の樹木につる性植物が繁茂し、樹幹や枝葉を圧迫する状態も多く見受けられました。

また、適切な樹木の間伐や、つる性植物の除伐が、長年にわたって行われていないため、森林内部にほとんど光が入らない状態になっていました。地表面の地被類等の植生もほとんど生育していないので、降雨時に林床表層の表土等の流失も懸念される状態でした。

植生遷移が進行し、“森が荒れている状態”である現状を市民の方にまず理解してもらうため、市民による森づくり作業を展開していくこと重要です。

いきものが生息できる生物多様性が保全され、良好な生態系が維持され、景観的にも良好な“豊かな森”が形成されるプロセスを理解してもらい、多数の方の合意形成が得られるような森林自然再生モデル基地を、市民ボランティアが活用でき、園内で散策路の近接地であり、かつ作業しやすいような緩傾斜の区域に創出しました。

市民による森づくり協働作業を実施

選択的伐採（林床に光が指すくらいまで樹木を間伐伐採する）、表土利用（林床に堆積した表土の種子を含む層（A0層）の表土をかき集め、シードバンク（表土に含有する種子）を利用して、地域性種苗を復元する）、伐採した樹木の幹や枝葉を利用して、木柵（粗朶柵）を設置する。の3点

をメインの作業として計画・実行しました。

また、森の恵みを享受する生態系サービスの実践例として、散策路再整備中に伐採したコナラの木を活用し、シイタケのホダギを作成する体験プログラムを実施しました。



親子での里山体験プログラム

「自然再生ネットワーク」を次世代へ

気がつけば、八尾市内に住んで25年、第2の故郷として、人生の1番長い期間を八尾市で生活することになりました。“自然再生ネットワーク”を活かしてもう一つ成し遂げたいことがあります。次の世代へ、このネットワークを継承することです。継承・発展していく流れを作るためには若い技術者や作業者の要請が急務です。

多くの自然再生業務に携わる中で、年配者の方の長年の「知恵や工夫」、「想い」を教わりながら業務に活かしてきました。この「想い」を次の世代へ確実に、つなげるために“自然再生ネットワーク”業に真摯に携わっていきたいと考えています。

第24章

八尾市の環境と植物

Environment and Botany in Yao City

齊藤 侑三 (Kozo SAITO)

八尾市は大阪府の中央東部に位置し、市役所の位置は北緯34度37分25秒、東経135度36分12秒の位置にある。大津駅にある北緯35度線をたどって世界を見ると砂漠と荒地が多くある。

なぜ、砂漠がこの位置にあるのだろうか。赤道から北に行くと寒くなる事は誰でも知っていることだが、空のほうに目を向けることは少ないようだ。

赤道付近で暖められた水蒸気は上空に達すると冷やされて地上に降りてくる。これをハドレー循環と呼んでいる。このような大気の流れが緯度によってフェレル循環、極循環と呼ばれている。

亜熱帯高圧帯は乾燥しやすいので“砂漠や荒地”が多くなっている。しかし、日本は温暖な気候と豊かな雨量に恵まれ、樹木や野草の種類は多く、日本には外国の学者がびっくりするような、いろいろな種類の植物がある。それは、地球の自転の関係で大陸の東側は緑化しやすく、日本海があり偏西風で蒸発した蒸気が雨や雪を降らし、台風が来るなど水が十分供給される条件があるのと適当な気温が植物にとって条件がよくたくさんの植物が育つ。

植物は動物の食糧をはじめ、薬にもなり、材木となって住む場所も提供してくれる。また、街路樹や庭園、公園樹として、人々に憩いの場としても役だっている。

日本列島のほぼ中心にあたる八尾市の2016年の平均気温は16.6℃、最高38.7℃、最低-2.2℃で、年間雨量1,012.0mmという恵まれた環境にあり、南は柏原市、松原市と東西に流れる大和川、北は第二寝屋川と東大阪市、西は久宝寺緑地と大阪市、そして、東は急峻な高安山に囲まれている。

生駒山系の地形は、約200-300万年前から現在にかけての新しい地殻変動によって出来たと考えられ生駒断層帯と言われている。これは大阪平野と生駒山地との境界付近を南北に通る活断層帯で、枚方市付近から、南は羽曳野市付近

までの全長約38kmの地下にあり旧国道170号に沿って八尾市域を通過している。



高安山山麓の地形は傾斜扇状地で水はけが良いため田圃を作らず植木を育て、江戸時代から花木園が発達し、高安山山麓には珍しい花木が色とりどりの花を咲かせている。

古代には汽水の河内湖が八尾市まで広がっていた。八尾市恩智にある天王の森からは縄文・弥生時代の石器・土器が出現しており、高安山は燃料採取のため森林が伐られていったことが考えられる。



八尾市の河川

市内には恩智川、玉串川、長瀬川、平野川という大きな川が南から北に流れている。

恩智川は大和川と関係なく柏原市市役所の北側あたりから流れだし、高安山の谷水が流れ込む灌漑用に作られた川だ。柏原市役所の南で大和川から引き込まれた長瀬川、二

俣地区で分流した玉串川、玉串川から分流した楠根川。八尾空港の側から北西に流れている平野川が大阪市にむけて流れている。

八尾市は洪水があるたびに河内湖に土砂が流され平地の扇状地が広がっていき、大和川デルタ地帯が出来て平野部が出来た。(図5)標高10m内外の東西9.2km、南北7.4km、面積41.26km²で平坦地は86%もある人口約27万人の市である。この川沿いに桜並木やいろいろな樹木、道ばたの街路樹の根元から、公園、歩道、田畑のアゼ道、生け垣等にそれぞれの植物が生活環境に合わせて育っている。

約9000年前の大阪の海面は現在より20m以上低く梅田付近が海岸で、7000~6000年前には海面が上がり、河内湾が出来ていた。生駒山麓では外環状線の少し東側に海岸線があり、中央環状線の東にある亀井ポンプ場の地下8mのところからハマグリなどの化石などが見ついている。この地層は現在の海面より1.5~2m高い位置にあり、天王寺から大阪城にいたる上町台地は半島になっていた。

弥生時代の終わりから古墳時代の初めには、川が3m以上地層を削り込んでいる。そして、カシ類やシイノキの花粉が減り、アカマツの球果や葉が出てくる。照葉樹林を切り開いたため、ひなたで芽を出すアカマツの二次林となり、山が荒れ、川が氾濫して洪水が増えてきた。

河内湾の周囲の山や平地や川岸にはカシ類、エノキ、ムクノキ、ケヤキ、ムクロジ、ニレなどがあり、気候が暖かくなり、河内湾の終わりに近くなるとイチイガシやアラカシ、ヤマモモ、シイノキ、イヌマキなどの照葉樹林となった。縄文時代の人々は、貝類やマテバシイ、シリブカガシ、シイノキ、イチイガシなどの実(ドングリ)を食糧にしていた。湾から潟になるとヨシ類が生い茂り、弥生時代の遺跡からはカナムグラ、コナギ、イボクサ、カタバミ、タカサブロウ、オナモミ、イヌビエなどが繁っていたことが分かった。



東高野街道より山側に数多く点在する高安古墳群でも分かるように、八尾市では古くから人々が生活していた。そ

れは、大和川(現在の玉串川、長瀬川)の洪水が繰り返され、上流から森林の養分が運ばれ砂質の肥沃な低湿地帯となり、食糧の生産及び確保が出来たからだ。1704年(宝永元年)の大和川の付け替え工事以降は、洪水の危険性はほとんど無くなり、船運が栄えた。そうして、水はけの良い砂質土壌が、ワタの栽培に適していたため河内木綿の産地となり、大阪の台所となって農業生産物の集散地として発達してきた。

高安山山麓の生活

高安山山系は奈良県の春日山のように、イチイガシ、アラカシ、カゴノキ、クロガネモチ、ナナミノキ、カシ、ツバキ、クスノキ類を中心とした常緑広葉樹林で覆われていたと考えられている。

常緑広葉樹の林の中は暗く、伐採した跡は明るい林となり、めばえてくる植物も変化してくる。暗い場所で芽生えていた植物は衰退し、明るい場所で芽生える植物、クヌギ、コナラなどが育ってくる。現在の高安山の風景だ(写真2)。森林をすべて伐ると山崩れをおこし、水も涸れてくる。そして、燃料も無くなり生活に多くの影響が出てきた。スギやヒノキなど家の材料になる材木は永年育てなければ使えず、クヌギ、コナラ等の広葉樹は燃料として使われ、人口の多い大阪に持って行けば燃料として売れる。広葉樹は伐ると根元から“ひこばえ”が多く出てくる。絶滅しないように上手に育てながら、8年から10年位のサイクルで伐採して木炭にし、また下草は肥料として田畑に入れ、森林の恵みを大切に利用してきた。

常緑樹のアラカシでもシイタケは出来るが、より多く採れるのがクヌギやコナラだ。このようにシイタケ栽培して食べることが出来る木でもあり、炭にしても役立つ木として、山ではクヌギやコナラを残し、余り役立たない木は燃料にした。このように古代より木は家の材料、燃料として、木ノ実は食糧として利用された。管理された里山林の内部は明るく、林床に日光が届くようになる。コナラ、クヌギなどは切り株から萌芽更新して、常に若々しい落葉広葉樹林を保つことができる。

里山は、集落に接した地形で人間の影響を受けた生態系である。反対に「奥山」は集落から遠く、燃料などに利用するには木が重いため、炭にして軽量化してエネルギーとして利用する場所になる。したがって、高安山にはほとんど

ど炭窯がない。

昭和30年頃から、プロパンガス、都市ガス、化学肥料が普及し、燃料や肥料としての利用がなくなり、クヌギ、コナラの林は育てる人がなく放置されてきた。高安山は暗い林で芽生える植物に移り変わっていきつつある。このような場所の植物群落が長い年月の間に次第に別の群落に変わってゆくことを遷移という。

ブドウの房状にあるため池

高安山は山頂から麓まで近いため流域が狭く水量が少ない。山麓は水はけが良いため、田圃が作りにくい場所になっており、排水がよくて水やりが少なくても育つものとして花木園や畑を行って、その水やりのために谷川沿いに水を蓄えるためにため池をたくさん作ったので谷の横にブドウの房状に池が並んでいる。花木園という仕事を見いだした先人の知恵で、ため池群ができあがった(図6)。



キクなどを栽培する花木園

花木園

米作りの農業では年に1回の収入しかないが、花木園で消費地の販路を確保すれば日銭が入るということで植木や生け花材料などを栽培し、花木園が発達した(写真3)。太平洋戦争前までは、京都まで大八車で運んで販売した。また宝塚方面からも花木が売りに出されるので、『“〇〇の花”が出荷されたので他の品種を出荷せよ。』と大阪中之島から手旗信号で連絡していた。まるで株の取り引きのようだったと土地の古老に聞いた。

しかし、消費者のニーズが変わり、子どもたちもサラリーマン化し、車が入らない上方の花木園は放置され、暗い森林になりつつある。

総池(そういけ)

“やまんねき”と言われる山麓地帯の総池は傾斜扇状地の末端部にあたる。扇状地は上流からの水が地下に浸透し

ているから、水田には不向きな地形で花木園が発達したのは昔の人たちの「生活の知恵」とも言える。

扇端部は、伏流水が湧き出しやすい地形になる。北から、楽音寺総池、大竹総池、水越総池、千塚惣池、千塚大池、服部川総池、郡川総池が標高50m前後の所にあり、水田に入れる水を確保していた。郡川のため池中の湧水にお地藏さんが祀ってあった。総池のある場所は傾斜扇状地の扇端にあるので、地下水が湧き出しやすいのでため池を大きくすることが出来たのだ。

このように扇端の下では、水が確保されるため田圃を作るが、大和川の水が使えない高い所や傾斜扇状地が無いところでは、水を確保できない。

恩智総池は標高106mにあり、谷を堰き止めて水を集めて集落全体の財産である総池を作って水田の水を確保している。

危ない場所には古墳や墓地

安全の確保が出来にくい場所や山林崩壊の危険性の高い所、谷筋の凹んだ地形のところには墓地を作っている。これは川が氾濫して土地が崩れた場合、信仰心の厚かった昔は「祖先のたたりがある」と「すぐに修復しに行く」と「人が被害にあわないよう」に墓地を作ったという説がある。大阪の上町台地と谷町の斜面は上町断層で、斜面の上にも下にもお寺と墓地が作られている。

八尾市の南東の山麓にある神宮寺墓地は谷の出口の傾斜扇状地にあり、集落は墓地の北側で土石流の被害が少ない凸地に集落を作っている。

神立墓地のある場所は“墓の谷”と言われ、墓の下には愛宕塚古墳、新池が作ってある。新池の堤防は小高く作られており、山津波の防波堤の役割と農業用水の確保をしているように思える。

里山の利用

高安山山麓の里山は単に木材の供給源としてだけでなく、落ち葉や下生えは田畑の肥料に利用されていた。また薪やキノコを得ることは、農民にとって現金収入を得る方法だった。畑にまく堆肥や肥料は、すべてその場所で出来た自然のリサイクル品だったのだ。しかし、1955年頃から始ま

った燃料の化石燃料化によって、1975年頃には薪・木炭は娯楽用途を除きほぼ姿を消していった。また化学肥料の普及で落ち葉などを里山に利用するという利用価値が失われ、1960年代に入ると次々と宅地化されて消滅していった。宅地化を免れた里山も利用価値が失われた為に放置された所が出てきている。子ども達は農業に従事せずサラリーマンになり月々現金収入が入る方を選択するようになった。

地球温暖化と里山の役割



1時間に146mmというゲリラ豪雨があり神戸の都賀川(とががわ)わずか10分の間に1m35cmも水位が高くなって鉄砲水がでた。このようなゲリラ豪雨の原因は、温暖化で大気の水蒸気量が増え、積乱雲などの雲ができやすくなったことやヒートアイランドで地温がたかくなったことも一因と言われている。高安山でゲリラ豪雨が起きたらということを考えて対策をしていくことが大切である。

そのために使用されなくなったため池を整備して遊水池にすることで大雨の時は池に滞水する。使用されているた



め池の保全をして水生植物・動物の保護もする。八尾市には日本の絶滅のおそれのある野生生物(環境庁編平成3年)で絶滅危惧種に指定されているニッポンバラタナゴが生息しているが、干上がった池が増えてきている。この池を整備して水を溜めることで魚の生息池が増えてくる。高安山山麓の森林・花木園の維持・管理をして、小枝を採取などして森林を健全化していき、山地の急斜面に対する防災対策の実施や、里山の手入れをしていくことが大切だ。

未来遺産

未来遺産という言葉が普及し始めた。100年後の子どもたちに長い歴史と伝統のもとで豊かに培われてきた地域の文化・自然遺産を伝えるための運動をして残していくことだ。

「環境アニメイティッドやお」の活動で高安自然楽校を開催し後継者づくりにも取り組んでいる。高安山をレクリエーションの場としての活用し、身近な自然や生態系について勉強する、高安自然楽校への参加、活動の場の提供等を行う等の取り組みを強めている。「里山」が衰退することで、日本古来の自然が危機に瀕している。里山に関心を持ち、太平洋戦争前のように樹木の手入れをすることが、日本の自然保護や環境保護に役立つのだ。

100年後の子どもたちに美しい環境を残し「負の遺産を残さない」ために、高安山の環境をまもっていく人を一人でも多く作ってきたい。

第25章

植物社会デザインと都市の復元力^{レジリエンス}

文化の「編集者」としての自然

Nature as Editors of Urban Culture: Botanical Social Design and Urban Resilience

岡野 浩 (Hiroshi OKANO)

1. はじめに

八尾の前のレポートシリーズ(岡野2014)では、道・下水・水路、河内音頭を事例として、都市の創造性について検討した。八尾の歴史的推移の奥には、河内湾・河内潟、河内湖時代の重なりと変化、街道と一般道、古道と新道などの関係性、そのプロセスにおける神木の伐採など、様々な文化編集の在り様、多様な見えないアクターの関係性の変化などが埋め込まれていることがわかる。

本書の各章においては、八尾の自然について様々な紹介をしていただくとともに、自然と文化の他の地域への広がりや普及の在り様などが明らかになった。

以下では、「①ヒト・モノ」、「②知」、「③場・みち」、「④集り・交流」のそれぞれと創造性および復元力^{レジリエンス}との関連性と、これら四つのカテゴリーを拡張した「⑤広域的都市ネットワーク」を用いて自然と文化の相互浸透について考察する。

2. 文化編集と述語的包摂

社会における様々な行動様式や文化遺産、人々の営みなどが時代の流れの中で変容を加えられ、元々別のものではあったものが重なったり、複数あったものが他のものに埋没したり、まったく新たなものが突如として生まれたりすることを「文化編集」と呼んだ(岡野2012a,b)。

日本文化の基本作法として「かさね」をあげ、神仏習合が神道と仏教とが同じ空間で棲み分けてきたこと、すなわち、一方が他方を排斥したり圧殺したりすることなく、重なりながら領分を守り、親しく交わるのが有利とみれば「溶

け合いなじみ合って」きた(藤原2008)。そのうえで、「くずし」や「やつし」、「もじり」や「うがち」、「あそび」や「見立て」などの発想や作法を取り上げ、あくまで神仏習合の「習合」は混淆ではなく、交接し混血の神を生むことはなかった。

ヒトが重要なアクター(行為者)であることはいうまでもない。ただ、「誰がやったか」という問題を特定するのではなく、述語に焦点を当てることによって、ある特定の集団や人々が排除されるのを避け、モノに込められた想いや言葉、そして言葉にならない想いに焦点を当てることによって、そこから抜け出てくるものが浮かび上がるのである。ここでは、モノが重要な行為者であり、記憶やコトを動詞で捉えること(述語的包摂)によって、主体の議論を弱め、ともに形成してきたもの(共創のプロセス)を出土させることを目指したいのである⁵。ヒト・モノ・コトとの関係性のみならず、それらの一体化を想定しながら、世代間をつなぐモノのエージェンシー化と捉えるのである⁶(図表3)。

⁵ 鎌田(2010)は、それぞれの民族には、固有の言語体系ないし言語文化にとって、一語彙として使用頻度が高く、文法的にも概念的(意味論的)にも核(心)になる「根源語」が存在するとし、「モノ」

(物・者)と「コト」(事)をあげている。日本語の「モノ」は物質的・人間的・霊的の三つの次元があり、その三層一体的な非二元論敵思考の持つ創造性や可能性を探求すべきことを主張する。

⁶ この思考の基礎にはアクターネットワーク理論(ANT)がある。ANTは、1980年代後半からフランスのM. カロンとB. ラトゥール、イギリスのJ. ローが中心となって発展させた理論であった(Amin & Cohendet 2007)。ANTの方法論的な特徴として、研究の初期段階から一切の前提を置かない点があげられる。ANTは西洋における「自然」と「社会」、「主体」と「客体」という近代的二分法を採用せず、「人間」と「非人間」のイデオロギー的区別を超越しようとしていることにある。

3. 創造性を高めるための動詞

(1) 「包摂する」：社会的持続性と包摂力

ここでは、創造都市・文化創造・社会的包摂を連結する概念として、ポレス(M.Polese)とストレン(R.Stren)による「社会的持続性」を取り上げたい。

ポレスとストレンによる *Social Sustainability of Cities*(2000)では、ジェイコブズ(J.Jacobs)やフロリダとは異なり、都市化による「ダイナミクス」を記述している⁷。

都市はパブリックセクターの後退や労働市場の再構築によって社会的持続性への脅威を経験するが、移民の増加によってもたらされる多様性と通じ、新たな「機会」が得られると捉えるのである。

また、ポレスとストレンは、しばしば見逃されることの多かった、都市の多様な部分を「相互に結合した一つの全体」として紡ぎ、公的サービスと雇用へのアクセスのしやすさを増加させる、ローカルな「場のマネジメント」政策の役割を重視する。

①いかなるモノが「行為者」であるか、「行為者」でないかを先行条件とせず、フィールドワークで判断する。こうした視点からすれば、内的意図を持ち合理的な行為を行う「者」と、ただその行為の背景となる受動的な「モノ」との区別は単なるイデオロギーにすぎないとし、アクター（行為者）は近代的な人間主体を示すアクターではなく、独立して本質的な特質を持たず、単にエージェンシー（行為能力）であるアクタント(actant)とみなされることによって、ヒトとモノの結合からエージェンシー（行為能力）が生まれ、アクターネットワークに分散されていると考える。

②さらに、意図(intentionality)を行為から分離することによって、「物のエージェンシー化」(行為主体性)を可能となすとする。「意図」というのは行為の基準でなく、社会的事実としての「意図」は、行為の原因ではなく、逆に「意図」をネットワークが生じる行為の結果と捉える道を開くことになる。「アクターが他のアクターを取り込むための方法」あるいは「種々のアクターが変化し結びつけられていく過程」と意味づけられる。

③ある「翻訳」(translation)が失敗したときにはさらなる「翻訳」のため、既に安定化されたブラックボックスを開き、アクターの立ち現われ方が変幻自在に変容するのである。そこでは、意味はヒトや言語使用によって一方的にモノに付与されるものではなく、ヒト以外のモノを含む様々なアクターが織りなすネットワークの効果として生み出されるとする。

村松(1973)は、大工道具がモノとの対話の通訳者であると指摘し、次のように述べる。「日本の木は幸いにして昔からわれわれ日本人の多くにとって、単なる材料ではなくて、モノとしてあった。…(中略)… 材料と対話し、それをモノにするための、その対話の通訳者になってくれるのが道具である」。

⁷ J. ジェイコブズは、「創造都市」の主役である職人企業というマイクロ企業のネットワーク型の集積が示す「柔軟性、効率のよさ、適応性」のすばらしさに驚嘆し、その特徴を輸入代替による自前の発展とイノベーションとインプロビゼーションに基づく経済的自己修正能力あるいは、修正自在型経済と把握している。

より具体的には、ハウジング、食物の配給、保健、近隣計画に関する新たな試みを行いながら、社会・経済的なネットワークを有する地域社会を出現させることを目論むのである。

(2) 「バランスをはかる」

都市の創造性の源泉を追求する場合、バランスをはかること(balancing)が求められる。ブラッドフォード(Bradford,2004)は、こうしたバランスの一つの有り様を示し、カナダやイギリス、さらにはオーストラリアの都市をケースとして、それらのバランスの取り方について検討している。創造都市であるためのバランスとして、次の9点をあげる。

- ・「地域コミュニティに根差したモノやコト」と「グローバルなコスモポリタンの影響」
- ・「遺産」と「新奇性」
- ・「国際的な関心を引くような大規模なフラッグシップ的プロジェクト」と「創造的な基盤を奮い立たせる小さなプロジェクト」
- ・「公式的な高度な文化」と「非公式のストリート・シーン」
- ・「非営利のアーティスト」と「創造的な産業クラスター」
- ・「ローカルな知識」と「プロフェッショナルな専門技術」
- ・「規則に準拠した説明責任(アカウンタビリティ)」と「草の根の実験」
- ・「全体的な思考」と「戦略的な行動」
- ・「近隣の再生」と「社会包摂」

「地域コミュニティのルーツ」と「グローバルなコスモポリタンの影響」はこれまでの論稿(岡野, 2009)で取り上げたものであるし、「遺産」と「新奇性」はUNESCOの世界遺産と創造都市ネットワークとの関係性を検討していることを想起させる。また、社会的持続性に密接に関連する項目として、「フラッグシップ的プロジェクト」と「小さなプロジェクト」とのバランス、「ローカルな知識」と「専門知識」とのバランスは重要である。

問題は、こうした「バランスをはかる」をどのような手段を用いて達成し、どのような状況になれば達成したとみなされるかにある。政策的にいえば、単純にプロジェクト別の予算配分のバランスによって達成できるものではない。

一方が他方の文化基盤として優先されるべきものも存在する。また、上であげた各項目内のバランスだけでなく、各項目間のバランスも重視すべきである。たとえば、業績評価尺度（バランススコアカード）を組み込んだ人事評価制度と教育システムとの融合された人事教育制度があげられよう。このバランスを達成するための一つの重要な思考がシンクレティズムである（岡野 2012a,b）。これは異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した現象を指し、日本の神仏習合など、元来異質な神格や教義が混在・融合して一つの宗教体系をなしている場合や、同一社会に複数の宗教体系が併存し、人々が状況に応じて関与する場合などがある。ただ、シンクレティズムは折衷主義ともされてきたが、混合という意味の「折衷」ではない。二つのものが外見上は合体していると見えたとしても、両者は区別されながら、保持・保存され、併存しているといえる。

(3) 「パッチングする」：俊敏性とダイナミックケイパビリティ

ダイナミックケイパビリティは、経営学の資源ベースビュー（resource based view）という競争戦略論の流れから生まれたものである⁸。とりわけ、主に 80 年代以降の日本企業の台頭を背景として、その戦略行動の理論化を行うプロセスで定式化された。

資源ベースアプローチでは、企業が保有する資源に価値（valuable）があり、稀少で（rare）、真似ができません（inimitable）、代替できない（non-substitutable）場合、それらの資源が当該企業の持続的競争優位の源泉となるとされる（Barney, 2002）。

しかしながら、一度獲得した資源は長期間維持されるのを前提としており、変化の激しい動的環境は考慮に入っておらず、資源特有の固着性が逆に変革の足かせにもなるというパラドックスも内包されていた。

これに対して、ダイナミックケイパビリティの議論では、持続的競争優位というものは存在せず、資源の束を絶え間

なく組み替えながら、新たな競争優位の獲得を頻繁に繰り返さなければならないとし、特定の資源そのものではなく、その時々で相対的に出現する「資源」を俊敏に組み替える能力がダイナミックケイパビリティであると定義される（例えば、Eisenhardt & Martin, 2000）。

また、ティース等（Teecce *et al.*, 1997）は、急激な環境変化に対応するため、企業内部や外部のコンピテンシーを統合・構築・再構成する能力であるとする。すなわち、新たな資源構成を実現する企業内のプロセスが重要であると考えられるようになってきた。

こうした思考の変化は、資源の束を組み替える能力だけでなく、戦略的提携などによって他社の価値ある資源や知識を自社に取り込む能力、異質な文化を持つ提携パートナーとの相互作用によって、新たな知識を生み出すケイパビリティ（knowledge creating capability）、すなわち組織学習がその前提として位置づけられるのである（野中 1990）。

さらに、アイゼンハートとブラウン（Eisenhardt & Brown, 1999）では、ビジネスチャンスの変化や移動に合わせて、絶えず事業をマッピングし直す、戦略的プロセスである「パッチング」（patching）⁹の重要性を主張する。パッチングは変化の少ない市場よりも環境変化がめまぐるしい市場で効果的であるとし、パッチングの条件として、各事業ユニットがモジュール構造（共通単位を持つ部品を組み合わせたもの）で、完成度の高い業績評価指標があり、一貫した給与体系が組み込まれていることをあげている。

4. 創造性の構成要素としての「文化」：八尾におけるヒト・モノ・コト・道

それでは、創造性はどのようにして捉えればよいのであろうか。ド・セルトーは、モノが幾千もの過去の実践を生来させ、実践をとおして使用者たちは社会文化的な技術によって組織されている空間を「我がもの」にするとし、数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きを壊してしまうような、微生物にも似た操作を行って

⁸ 経営戦略論において、ポジショニングから、資源ベース、ダイナミックケイパビリティへの重点変化については岡野(2003)およびダイナミック戦略、とりわけパッチングについてはEisenhardt & Brown (1999)およびBrown & Eisenhardt(1998)を参照。

⁹ パッチングとは、(応急的に)手当てする、鎮める、調停する、などの意味がある。「鎮める」や「調停する」については、原始宗教や神道との関連性が浮かびあがる。これまでの組織改変との差異についてはEisenhardt & Brown (1999)を参照。

いる「モノ」に焦点を当てるべきであるという(ド・セルト
ー 1987, p.17-18)。

さらに、さまざまな集団や個人が、これからも「監視」
の網のなかに囚われ続けながらも、他方でそこここに散ら
ばっており、戦術的で、プリコラージュに長けた「創造性」
が隠れた型(隠密形態)をとっているか、この在り様を掘
り起こすことが必要であるとする。こうした策略と手続き
を行う主体はあくまで「消費者」であり、彼らが反規律の
網の目を形成していくと主張する。この点は、M.フーコー
の「考古学」的理解とはまったく逆の発想であることに留
意しなければならない。

次に、創造性を促進させ持続させるための要素として、
定型性、インプロビゼーション(即興性)、リズムを挙げ、
八尾の道路や河内音頭などを事例としてアプローチしてみ
たい。

(1) 八尾の道(道路・河川・水路) : 定型性と自由度の バランス

これは、型を歴史のなかから創り出しながら、個人およ
び社会の自由度を獲得することを意味する。自然からヒト
から、過去の文化的なエッセンスを消化し、過去の様々な
遺産や思考法を借りながら、編集しながらこれを定型化す
ることによって、一方では自由度を獲得する方法がこれだ
る。

まず、「八尾の軸」といえるようないくつかの軸がある。
そのなかで最も重要なものの一つが旧大和川の流路による
「軸」である。昭和38年(1963)に開通した光町久宝寺線
(表町線)は、やはり「八尾の軸」に直角になるように北
東から南西に向けて通されているが、この角度は他の都市
計画道路とともにほぼ同じ角度である。

そのすぐ北東部には旧大和川の付け替えによる新田が開
発されたことに影響され、北西-南東の軸に沿って街並み
が形成された。その結果、開通した道の両脇にある歴史的
道路との交差部分は直角ではなく、意図したかどうかは別
として結果的に「放射状」になっている。慣れるまでは分
かりにくいですが、ひとたび八尾の軸あるいはアーキタイプ
を(原型)の一端を理解すれば、行きたいところに最短距
離で行くことができる道になっている。この特徴を伸ばす

ことによって、さらに利便性の高いエリアを形成し、他の
地域との連携を高めることができる可能性がある。この特
徴がさらに伸ばされることを期待したい¹⁰。

表町線は、昭和21年に内務省の認可が下り、工事が進行
したが、本町1丁目交差点から近鉄八尾駅の間の舗装予定
地点に神木の楠が3本あった。これを伐採して工事を進め
るべきか慎重に検討されたが、八尾市によるお祓いがなさ
れ、昭和38年(1963)1月19日に開通式を迎えた¹¹。ここ
において、いのちへの共感が見て取れる。

八尾市主催による御神木のお祓い(昭和37年)



(出所) 八尾市市政情報課提供

八尾市役所の裏側(北)にある、やはり旧大和川の流路
と同じ角度で通されている「旧道」も維持されている。こ
れは可能な限り直線距離で目的地へ行くことができるとい
う利便性、および、歩いてみようと思わせる「仕掛け」を
重視したものとなっており、いまは水路になっている「新
橋」(志んばし)という歴史を感じさせる小さな欄干など
にも重要な文化遺産であるといえよう。自然の川であった
昔の姿を臉に浮かべることができる。

また、八尾市立幼稚園の横に最近設置された、下水の高
度処理水を利用した水路も、八尾商工会議所の西側を南に
走る水路とともに、重要な意味を持つものである。

¹⁰ これに関連して、会津若松市・都市計画マスタープラン(2013
年3月)における「4. 分野別構想:まちのつくり方」(他都市との
連携を図る「放射環状ネットワーク」)は注目できる。とりわけ、
災害に強い街を作るためにも、会津若松市の「外部に向かって開か
れた都市」を志向している点に注目すべきである。いうまでもない
が、これは河内の人々が一貫して目指してきたものである(図表6)。
¹¹ 表町線の延長工事の着工については八尾市(1962)、開通式につ
いては八尾市(1963)に詳しい。

旧大和川の軸とその対極の軸、流路を尊重した新田開発の結果、こうしたことが可能となったのであり、過去のモノを生かしながら、活かすか、付け替っても「変わらない」ものを保存するのである。川と水路、そして道路との関係性は重要であろう。その関係性において「見えないアクター」を見出す努力が求められるのである¹²。

八尾枚方線、安中植松線、萱振曙川線（南部分）、中央環状線や外環状線なども、とりわけ旧大和川の流路を跨ぐ部分は、まさにこの角度に道が建設されている。上述した「八尾の軸」の形成に旧大和川の流路が現在においても大きな影響を及ぼしていることがわかる¹³。

また、生活の中での「利便性」や「心地よさ」が生まれている。こうした「八尾の軸」を形作っている長い歴史の積み重ねが都市の創造性にとって重要である。もちろん、今の生活にも影響を与えているものも多いが、見えなくなっているモノやコトが多く、気づくのは難しい。埋め込まれた創造性を見抜く目をいかに養うかが課題である。

(2) 八尾の即興性：河内音頭とジャズ

第二のファクターとしてあげられるのが即興性である。即興 (improvisation) とは「構図 (作曲) と実行 (演奏) の行為が不可分であり、構図 (作曲) / 実行 (演奏) のそれぞれが過去のそれらとは異なること」 (Bastien & Hostager, 1992)、「自発的な方法で行為を導く直感」 (Crossan & Sorrenti, 1996) などと説明され、アドリブと同義とされる¹⁴。

これとの関連で、八尾の創造性の根源を生かした総合的なイベント (「コト」) である河内音頭が注目できる。河内音頭は、700年の歴史を持つとされ、常光寺での「流し節正調河内音頭」(本書第Ⅱ部に所収) などの宗教的な意味合いをもつもののほかに、農作業の際に歌われる「恩智音頭」、「ジャイナ音頭」、「植松ヤンレー節」、そして現代版の河内音頭など、様々なバリエーションがある。そのスタイルとメロディーは北河内の交野節のほか、滋賀の信楽の「やっちくれ」あるいは「信楽節」も重要である (佐々木 1997)。

河内音頭は滋賀県の江州音頭から生まれたといわれる。近江商人の藤野四郎兵衛良久は今でいうところのプロデューサー的役割を担ったとされるが、その足跡は大いに注目できる¹⁵。近江商人の文化活動は、伊勢商人と同様、地域連携の「アーキタイプ」(原型) であるとも考えられる。行商を自らのビジネスの発祥とし、「三方よし」の中でも商売の基本である顧客との信頼関係を築き上げるために「現地よし」の精神を浸透させることが喫緊の課題であった。

さらに、若い従業員と年配の経営陣との関係性を高めつつ、商人と顧客との商談と会話の即興性、そして年中行事を共に参加するなかで、各地域での信頼を獲得することが最重要課題であったわけで、文化の担い手の役割はその最も高度なモノであったといえよう。

前述した定型性との関わりでは、河内音頭は、冒頭のみ非常に形式的であり、年齢に配慮しながら、自分は「見かけどおりの若輩」で「悪声」であるという一方で、自由度を獲得するであり、その場に応じてアドリブを利かすこと

¹² 絶滅危惧種の淡水魚である日本バラタナゴの市民および高校・大学レベルでの保存・研究活動もこの文脈で考えることができる。いうまでもなく、日本バラタナゴなどの絶滅危惧種が重要なアクターとして位置づけることができる。

都市の水資源および大阪平野の地下水や水質については益田 (2011) に詳しい。

¹³ この角度の理由については、風水および陰陽道の影響も見逃せない。鬼が出入りするとされる北東-南西の「鬼門」(および裏鬼門) を避けるため、「南天」(なんてん) を植えることによって「難点」(なんてん) を避けることも行われてきたが、道そのものを鬼門の方向に据えることによって、各家の鬼門を逃がす(ズラす) ことになることも重要であろう。これも文化編集の一つであるといえよう。詳しくは宮本 (2009, 131 頁) を参照。

また、古代の河内と大和との接点については近江 (2013) を参照。

¹⁴ 即興演奏は「演奏の過程において作品が創作されること、あるいは演奏過程において作品に最終的な形が与えられること」と定義される。

¹⁵ 行基が建立した滋賀県豊郷町の千樹寺は天明年間 (1781~1789 年) に大火に遭い、消失する。北前船で活躍した近江商人又十の2代目 藤野四郎兵衛良久が、亡父の遺志を継ぎ、海上の安全や漁族の慰霊祈願も込めて浄財を投じ、千樹寺の再建に取り組んだ。その遷仏供養の日を七月十七日 (旧暦) に迎えるにあたり、隣町の八日市に祭文語り・桜川離山の弟子、「歌貞」こと西沢寅吉 (後の初代桜川大龍) を自宅に招いて経文祭文を採り入れた一般民衆向きの音頭を作らせたという。当日、この音頭に節をつけて歌わせ、更には光彩を添えるために「絵日傘」や「扇」を与えて踊らせたところ、集まった人々は、「踊らにゃ損」と音頭にのって踊り明かしたという。評判が評判を呼び、美濃や伊勢にも広まり、「江州音頭」という呼び名が定着するようになったのである。本来の祭文の意義も徐々に豊作祈願へと変わり、各地で盆の恒例行事となるに従い、「恋物語」から「軍記」、「出世もの」、「お国自慢」と、演題もみるみる増えて行く。娯楽に乏しかった当時の人々にとって、この上ない「楽しみ」でもあり、また厳しい時代を生き抜く「力の源」でもあった。詳しくは、滋賀県・豊郷町の豊会館のHPを参照。

が許されるとも考えられよう。

また、歌に使われるテーマは地域によって異なり、歌の構造は定めないことも多い。河内音頭は伝統的な民衆音楽の定型的なものであるとともに、即興性と無際限性を兼ね備えた文化遺産であるといえる¹⁶。

たとえば、「新聞詠み」を復興した河内家菊水丸(2001)は、その時々^{しんもん}の出来事(グリコ森永事件、国際食糧問題、北朝鮮やイラク訪問など)、歴史人物、言い伝え、ボブ・マーリーやジョン・レノンなどの音楽家の生涯を題材とした。リクルート事件を糾弾した菊水丸による河内音頭は NBC や NY タイムスなど欧米メディアでも大きく取り上げられた(同上、89頁)。

また、多くの音頭取りにより、エレキギター¹⁷など 1960年代において社会的に問題視されていた楽器を取り入れられるとともに、太鼓など伝統的な和楽器と掛け合わせたりすることは「文化編集」の視角からも興味深いといえる。

すなわち、伝統をベースにしながらも、現在性をアピールし、「即興性」を交えながらダンスと共に物語を語るというやり方は、伝統的な社会への抵抗や社会批評(クリティーク)をようでもあった。

「即興性」の分野はジャズ音楽を引き合いに出されることが多いが、ジャズの象徴への接近は避けることができず、ジャズは即興がさらに大きく洗練されたものに発展した静かな現象の一つとなった事実がある。探究へと進歩させた団体の有効性は、学者が徹底的に調べた比喩的なアリーナと交響楽団の演奏会ほど違いが見られる(Kanter, 1989; Sayles, 1964)。

「即興による創造性」とは、価値の創造、効果的な新製品、もてなし方、ひらめき、行動、また複雑な社会的組織

¹⁶ 河内音頭は他の地域でも人気を増しており、東京墨田区錦糸町(1982～現在)、姫路、宝塚、大阪府池田市、四国などその他の町の盆踊りで歌われるだけでなく、町おこしとしても重要な存在となっている。この墨田区・錦糸町の河内音頭については朝倉喬司氏の貢献が大きい。詳しくは朝倉(1978)を参照されたい。

¹⁷ 1965年10月、足利市教育委員会は「エレキギター禁止令」を出し、エレキギターなどの購入、バンド結成、演奏会への参加を禁じ、テレビのエレキ番組は見ないよう指導するということが同中学校の校長会で申し合わされた。高校生も自粛が求められ、校外での演奏は休日でも学校の許可が必要になった。その後、エレキは社会的な認知を受けることになるが、バンド活動をする高校生たちが置かれた立場は現在も変わっていないという(毎日新聞、2013年6月24日、地方版)。

の中での個人の働きによるプロセスに関係するとする(Woodman *et al.* 1993)。また、Miner *et al.*(1996)によれば、行動とは、変化を起こすこと、改正すること、創造すること、いじくったり、変更したり、つけ加えることというよりも、より純粋に即興で新たな発見をすることであるとす

(3) 八尾のリズム¹⁸

「リズム」(律動)とは時間軸における二つの点を置くことにより、その二点間の時間に長さを感じるようになるが、その「長さ」をいくつか順次並べたものをいう。すなわち、「時間的現象要素の規則的反復である」といえる。これに対して、「拍子」は、弦を一様に叩くこと、あるいは弾くことである。

「リズム」と「拍子」の対立は、運動の持続性がリズムとして体験されるためにはまず拍子がそれに加わらねばならないということと矛盾しない(クラークス 1971)。それゆえ、運動が少なからず[リズムの]決定的要因としてとどまる。しかし、他方で、「リズム」と「拍子」が本質的に異なる発生源を持つにもかかわらず、人間のなかで互いに融合しうる¹⁹。

「繁栄と衰退、受容と放棄、邂逅と離別など、人間生活にとって避けることのできないこれら転変とともに、あらゆるリズム的脈動を、ことさら人間の生命の非常に感動的な反映たらしめているものはまさにこれのみである」。

次に、朝倉(1978)は河内音頭とリズムについて次のように

¹⁸ クレストン(1968)は、リズムの要素として、拍子・速度・アクセントおよび型をあげ、アクセントがリズムの生命であるとする。「それ(アクセント)なくして、拍子は単調な鼓動拍の集合の連続にすぎず、速度は全く動きの感覚をなくし、型は雲をつかむようなぼんやりしたものになってしまう」(35頁)。

岡(1987)は、リズムが音楽・芸術・文化をはじめ、日常生活の隅々にまで浸透しており、東と西の文化が各民族の「リズム的風土」の上にはっきりと根付いていると主張する。

¹⁹ クラークス(1971)は、昼と夜、明と暗、夏と冬、生長と衰弱、生誕と死亡、貯蔵と分配、逗留と放浪、拘束と放逐のリズム的交替のなかで、また、天と地、太陽と太陰、火と水、男と女、上と下、前と後、右と左のリズム的交互性においても、生成と消滅へと対極化する万象の姿を明らかに見出そうとする。

このような諸現象のリズム学は現象世界の領域内にとどまり、直接現象するリズムの本質的特徴を拡大することによって、原則的に測定可能な中間ではなく、上がり下がりや下がり上がりの質的対立によってリズム的な交替現象になっているという。

述べる。「……流れるようなメロディ・ラインが内にリズムを生んでいく、あるいはまたその逆の、河内音頭の両極性に結びつくだろう。喜びの中の悲しみ、悲しみのひしめきからの喜びの蘇生、河内音頭に限らず、歌とは、だいたいこうした両極性のほさまに生まれるものだと思うが、河内音頭は、その構造がとりわけダイナミックである。リズムと節の反発と融合の目まぐるしい入れかわりが、歌い手と踊り手の間の底の深いスウィング感として増幅され、悲業を悲しむ涙の節まわしが地と足の間に浮きたつような喜びの磁場をつくり、それは生者と死者の、やや騒々しい年に一度の交歓の場に、あれよあれよと移りかわっていく」(39-40頁)。

そのうえで、朝倉は、同じ道を聖俗のほさまから繰り出された念仏踊りの遊芸人たちも歩いたはずであり、この遊芸人の念仏踊りが村々に定着し、河内音頭の祖型になったのであり、河内音頭は、異質なものを排除するのではなく内にとりこむ「容器」ともなっているという。

「リズム」と「拍子」、および創造性との関係性についていえば、時間的および空間的に「ずらす」(文化編集) ことによってリズムが生まれ、創造性が生みだされる可能性がある。河内音頭の最近の踊り方である「まめかち」もアップテンポにしてリズム感を増したものであり、ゆったりとした正調河内音頭、さらには江州音頭との間の大きな差を生みだしている。こうした正調河内音頭、河内音頭、まめかち、スウィング調の踊りなど、異なる時代に生みだされた多様な河内音頭を一つのスペースで行うことによって創造性の芽が出るとともに、伝統的なものを残しつつ、若い世代の脳裏に刷り込むことができる²⁰。

異なる地域における文化の重なり、時間の重なり、ずらしの文化編集によって、新たなリズムが生まれ、創造性に繋がっていくといえよう。世代の感性の違いにより音頭に変容が加えられる。問題はその変容に対して支持が得られるかどうかであろう。ただし、この支持については、短期的な評価ではなく、長期的な尺度でみていく必要がある。

²⁰ 平家物語、電車などの車内放送など、語りのリズムについての幅広い分析は兵藤(1997)を参照。

5. 八尾の歴史と創造性：『八尾の文化創造性』(2013)のレビュー

次に、岡野・西辻(2013)で取り上げた「ヒト・モノと創造性」、「知と創造性」、「場・みちと創造性」、「集り・交流と創造性」を要約し、本書のテーマである自然と文化創造性・復元力の考察の準備作業としたい。

(1) 「ヒト・モノ」と創造性

久宝寺の出身で、文化活動にも精力的に活動した野村証券の創業者・野村徳七(初代)の幼少期のエピソードや大阪の大弥両替店での丁稚時代での経験について興味を持つとともに、コスモポリタンの視点と地域に根ざした視点および伝統芸術との融合など、非常に大きな意味がそこに埋め込まれているといえよう(岡野 2003,2009c, Harvey 2009)。

ブータンの農業指導に尽力されたダショー西岡氏についても、現地のキーパーソンとの関係や「ヒトとモノ」との融合によるアクターネットワーク分析の枠組みによって解釈できる²¹。1953年、第一次マナスル登山の年にネパール西北部学術探検隊が京都大学生物誌研究会(FFRS)に提出され、今西錦司氏は中尾佐助氏(大阪府立大学教授)と共に「ブータン計画」を始めた(川喜田 1992)。

西村市郎右衛門と講念仏踊りとの関係も、地元住民の西村氏への想いと関わらせて理解することができるのであって、個人の信頼から地域間や国家間の信頼へ展開させるなど、重要な文化交流のプロセスの問題である。

(2) 「知」と創造性：知の中継地・編集地・発信地

八尾に知の拠点創設し、教育基盤を築いた私塾「環山楼」が重要である。環山楼に招聘された京都の伊藤東涯とその父親で古義学を打ち立てた伊藤仁斎については、朱子学の解釈文献を見るのではなく、儒学の原典(孔子や荘子など)そのものに立ち戻ろうとするものであった。伊藤親子は、幕府から弾圧される可能性もあったにもかかわらず、あえて、当時の権威に反対する説を八尾という場所で講義

²¹ 西岡氏の師匠である川喜田二郎氏(大阪市立大学)や中尾佐助氏(大阪府立大学)との関わり、さらには京都大学生物誌研究会、今西錦司氏による「ブータン計画」などについては川喜田(1992)の巻末・座談会に詳しい。

することは、創造的な行動であるとともに、かなりのリスクを背負っていたことであろう。伊藤親子を講師に迎える環山楼の人々にとっても、とりわけ「寛政異学の禁」の発布以降において、大きな決断であったのではないだろうか。

すなわち、知の連携・文化の連携の実践と、その背後にある武士だけでなく商人も学問や文化を通して何を掴もうとしたのかについて、一層の考察が求められる。

とりわけ興味深いのは、医学と農業学との関わりであろう。大坂の代表的町人学者で大物産家、本草学者であり画家でもあった木村兼葭堂^{けんかどう}などと八尾の町人学者との関係を通して、知のネットワークとそれを推進させた八尾(河内)の特質を浮き彫りにできるであろう(山中 2012)。

それに先立つ江戸時代の中期における農業研究も重要な意味をもっている。河内木綿を栽培し、その復活・研究に努力したヒトについては、大学と民間との研究の在り様や個人および団体の橋渡しのプロセスについて学ぶことができるし、八尾の郷土食を保存・革新についても、日常生活でもっとも重要な生命の維持・再生産である食に関する保存の知識、体への影響など食に関する様々な知は風習のなかに受け継がれ、日々の経験による革新の積み重ねが見て取れるであろう。

また、大正時代の能率増進運動への関心の高まりについても、大阪が他の都市と比べても先駆的であることも、農業研究の歴史と合わせて考慮する必要がある。すなわち、三河木綿と河内木綿との関係、明治における紡績業の発展、そして、紡績生産システムから自動車などの生産システム(トヨタ生産方式、JIT)への発展プロセスのルーツとして、木綿生産が重要な意味を持つことも想起される(岡野 1995, 2002, 2003)。

また、小学校教育の新たな可能性については久宝寺小学校の試みが語られている。地域住民を巻き込んだカリキュラムの策定(小学校2年から6年までの)は全国的に見ても高く評価できる。「教育とは『共育』であり『協育』である」という言葉はまさしく至言である。

(3) 「場・みち」と創造性

久宝寺寺内町のまちづくりについては、「まちを愛する心づくり」の重要性が主張され、具体的な取り組みがなされ

ている。地域間、世代間の垣根を越えたネットワークづくりのための取り組み(灯籠まつり)も注目できるのであり、「まちがひとつをつくり、ひとつがまちをつくる」こと、そして、幼いときの「心づくり」の重要性を示されている。

さらに、久宝寺寺内町と八尾寺内町とを結ぶ「お速夜市」の伝統を復興した事例も重要である。様々な地域からの商人の役割と生業との関係、宗教行事としてのお速夜からそれを「差し引いた」市への変容、ハレとケの峻別とそれに見合った生活風習など、残していくべきものは多い。

シルクロードを経由して中国から入ってきた散楽高安山麓で発祥したといわれる高安能についても、様々な意味合いが隠されていると思われる。高安と京都との関係もその一つであり、京都言葉との親和性をよく耳にする。地域毎に神社が存在し、高安流の様々な能集団が存在したようであり、今後の研究が待たれるところである。

大和川付け替えについては、最近でもシンポジウムなどが頻繁に開かれており、多くの関心を持たれている。付け替えによって変わった部分だけでなく、付け替えられた後でも変わっていないものの存在も重要であろう。

講念仏踊りが生まれる契機として、この大和川の付け替え後の日照りによる干ばつから逃れるため、弓削村の庄屋・西村市郎右衛門がお上に背いて水を通したことで処刑されたが、これを悲しんだ村人が念仏を唱えていたところに通りがかった僧が踊りを教えたことといわれる。文化の道と念仏の場との交わりによって講念仏踊りが生まれたともいえるが、まだ明らかにされていないコト、あるいは言説には上せないモノが埋め込まれていると考えられよう。

(4) 「集り・交流」と創造性

これまで伝承されてきたものを復活し、後世に伝えるという作業は見えない様々なものを創造する。講念仏踊りもその重要なものの一つであり、また、本書の第II部に収めた常光寺の片岡英逸前任職による『流し節正調河内音頭考』も重要な意味が隠されているといえる。

「八老劇団」は、いまほど高齢社会の問題が深刻でなかつた1973年に立ち上げられたものであるが、目的とされる「痴呆予防」からは大きくかけ離れた試みであろう。自らを「いちびり」と称して邁進する姿こそ、八尾の創造性を

示すものであろう。

「高安城を探る会」の草創期から探索を始め、高安城倉庫礎石群の発見に至るストーリーは、非常に参考になる。発見のために一役かった「探索棒」そして「トレンチ棒」は発見のシンボルとして重要な役割を担ったに違いない。

「やお文化協会」による郷土誌『河内どんこう』の発行は、八尾のヒト・モノ・コトをまとめ、その関係性を高める重要な「エンジン」であろう。いかなる団体でも、設立に尽力したヒトが存在し、そのヒトを支えた人々がいる。やお文化協会が推進したのは「モノを調べ、書き、躰ける」ことにつながるものであったといえる。

6. ^{レジリエンス}復元力：創造性とかかわりから

^{レジリエンス}復元力は、ラテン語の“resilire”という反動で跳ね返る、跳び戻るといった意味の動詞に由来し、弾性、弾力性、跳ね返り、復元力、回復力、などと訳される。

その研究のルーツとしては、精神疾患（たとえば統合失調症）、貧困、トラウマなど発達やメンタルヘルスのさまざまなリスクを負いながらも年齢相応の発達を遂げた子ども・若者の研究に遡ることができる。近年、他の領域にも広がっており、とりわけ東日本大震災との関わりから危機管理に関するものが多数みられる²²。これら弾性、弾力性、跳ね返り、復元力、回復力など、復元力の訳語として掲げられた言葉のすべてに植物は適合したものである。

文化という言葉は、西洋では“cultivate”からの派生語として「耕す」ものであると解されることが多いが、「耕す」というよりも、意味や時間をずらし、(イメージを)重ねながら範囲や奥行を広げ、これまで見えなかった新たな意味を繋ぎ合わせながら展開していくダイナミックな「動き」として理解すべきであろう。ここでは、①定型性と自由度とのバランス、②即興性、③リズム、といった文化編集という視点から、メタセコイアと復元力、文化の創造性の要素、について考察していこう（岡野 2012、2014b）。

(1) 復元力とバランス（定型性と自由度）

定型性とは、型を創り出しながら、個人および社会の自

²² また、ゾッリ(2013)は、生態学と社会学からの議論を援用し、復元力を「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力である」と定義する。

由度を獲得することを意味する。自然や人から、過去の文化的なエッセンスを消化し、過去の様々な遺産や思考法を借りながら、文化編集によって定型化して自由度を獲得する方法がこれである。

すなわち、一方において、定型性が見られるものの、他方において自由度が見られる。この差異が、新たなダイナミズムを生み出す源泉になる。たとえば、信楽焼＝タヌキという定型性ととも、信楽の陶板技術が西洋絵画と結びつくことによって、大塚国際美術館で見られる複製絵画が実現することになる（岡野 2014b）。色彩の不変性によって常に劣化していく実物を超えることもできるかもしれない。これは時間のずらしを実現するテクノロジーであるともいえよう。キトラ古墳への応用や空襲で焼けたゴッホのひまわりの再現によって、歴史遺産の保存や学習目的などにも使う道が開けるのである。

ここで、大阪万博の芸術面を指揮した岡本太郎が縄文に惹かれ、なぜ「芸術の本質が爆発である」と主張したことを想起すべきである。定型性を残しながらこれを打ち破るという、相反するものを同時に達成しようとしたのであった。また、風水および陰陽道の影響も見逃せない。鬼が入りするとされる北東-南西の「鬼門」（および裏鬼門）を避けるため、「南天」^{なんてん}を植えることによって「難点」^{なんてん}を避けることも行われてきたが、道そのものを鬼門の方向に据えて各家の鬼門を逃がしていたというのも重要であろう。これも「文化編集」の一つといえる。

さらに、生活の中での「利便性」や「心地よさ」が生まれている。「都市の軸」を形成する長い歴史の積み重ねが都市の創造性にとって重要である。もちろん、今の生活に影響を与えているのも多いが、見えなくなっているモノやコトが多く、それらに気づくのは難しい。埋め込まれた創造性を見抜く目をいかに養うかが課題である。

(2) 復元力と即興性

第二の要素としてあげられるのが即興性である。即興性(improvisation)とは「構図(作曲)と実行(演奏)の行為が不可分であり、構図(作曲)/実行(演奏)のそれぞれが過去のそれらとは異なること」、「自発的な方法で行為を

導く直感」などと説明され、アドリブと同義とされる²³。

岡本(2008)は、根源的に疎外されている人間が、それを悟り己を取り戻す場が「祭り」であり、日常の自分を抜け出して「生きる喜び」がそこに生まれるとする。「勤勉で純粹だが、底ぬけの豊かさに欠けている」日本人を解放させるもの、これが大阪万博のシンボル「太陽の塔」の理念にも関わっている。

また、河内音頭の、伝統をベースにしながらも、現在性をアピールし、「即興性」を交えながらダンスと共に物語を語るという手法は、伝統的な社会への抵抗や社会批評のようであった(岡野2013)。「即興性」の分野ではジャズ音楽が引き合いに出されることが多いが、ジャズの象徴への接近は避けることができず、ジャズは即興がさらに大きく洗練されたものに発展した静かな現象の一つとなった事実がある。探究へと進歩させた団体の有効性は、学者が徹底的に調べた比喩的なアリーナと交響楽団の演奏会ほどの違いが見られる。「即興による創造性」とは、価値の創造、効果的な新製品、もてなし、ひらめき、行動、また複雑な社会的組織の中での個人の働きによるプロセスに関するものである(Woodman *et al.* 1993)。

(3) 復元力とリズム

リズム²⁴と拍子という2つの似通った言葉がある。リズムとは、時間軸における二つの点を置くことにより、その二点間の時間に長さを感じるようになるが、その「長さ」をいくつか順次並べたものである。拍子は、たとえば弦のように叩くこと、あるいは弾くことである。

このリズムと拍子との対比については、あるものが「リズムカル」なものとして体験されるためには、拍子がそれに加わらねばならず、リズムの決定的要因としてとどまる。リズムと拍子が本質的に異なる源を持つにもかかわらず、互いに融合しうることを示している²⁵。

²³ 即興演奏は「演奏の過程において作品が創作されること、あるいは演奏過程において作品に最終的な形が与えられること」と定義される。

²⁴ 岡(1987)は、リズムが音楽・芸術・文化をはじめ、日常生活の隅々にまで浸透しており、東と西の文化が各民族の「リズム的風土」の上しっかりと根付いていると主張する。

²⁵ クラーゲス(1971)は、昼と夜、明と暗、夏と冬、生長と衰弱、生誕と死亡、貯蔵と分配、逗留と放浪、拘束と放逐のリズム的交替のなかに、また、天と地、太陽と太陰、火と水、男と女、上と下、前

クレストン(1968)は、リズムの要素として、拍子・速度・アクセントおよび型をあげ、アクセントがリズムの生命であるとする。メタセコイアの並木においていかなるものがアクセントとして機能するかが緊要点になる。

リズムと拍子、そして都市の創造性との関係性については、時間的および空間的に「ずらす」(文化編集)ことによってリズムが生まれ、創造性が生みだされるといえる(岡野2014b)。すなわち、異なる地域における文化の重なり、時間の重なり、「ずらし」の文化編集によって、新たなリズムが生まれ、創造性に繋がっていくのである。世代の感性の違いにより文化に変容が加えられる。問題はその変容に対して支持が得られるかにかかっている。

7. 八尾の自然と復元力

(1) 「ヒト・モノ」と復元力

第2章から第7章において、八尾の考古学や文化財、高安の花木や木綿、花、特産野菜について詳述されている。

まず、木造文化財として、聖徳太子が戦乱で難を逃れたと伝える椋の木による「神妙椋」、玉祖神社、渋川神社、善光寺の樹齢千年といわれる3本の楠が取り上げられる。恩智は古代から「母木(おもき)の里」とされ、聖徳太子ゆかりの「母木観音」がある。市の保全樹である矢作神社の大銀杏には大きな乳房状の突起があり、この皮を煎じて飲むと母乳が良く出るといふ。

高安の神立・大窪の花づくりは、江戸時代に始まったとされる。明治時代後期にはこの地で培ってきた切枝花木の促成開花の工夫により一躍先進地となる。その後、種類の違う花づくりに励み、三大生産地になった時期もあった。

ここで注目されるのは、多くの人々と遠くの花木畑へ出向き、そこで栽培と伐り取りをする「**出作**」^{しゅっさく}という行為である。これによって服部川から神立までの約2kmにわたって造園業と切枝花木・切り花栽培者が並ぶ農業道路、すなわち「八尾農免農道」が出来上がり、木綿や米の「衣」と「食」、ワラを屋根にすることで「住」を支えてきた。

と後、右と左のリズム的交互性においても、生成と消滅へと対極化する万象の姿を明らかに見出そうとする。

このような諸現象のリズム学は現象世界の領域内にとどまり、直接現象するリズムの本質的特徴を拡大することによって、原則的に測定可能な中間ではなく、上がり下がり^{しゅっさく}と下がり上りの質的対立によってリズム的な交替現象になっているという。

また、戦後復興の一環として一般市民を対象とする啓発活動である「フラワーソサイエティ」も注目できる。その初代社長は小学生の時から花を育てるのが好きで、太平洋戦争以前には中国上海で花壇の運営をしていたという。戦後、引き揚げ後の食糧難を乗り切るため、花作りの基本を覚えた。

さらに、八尾の特産野菜としての「若ごぼう」や「えだまめ」は、戦後、都市化の進展とともに大阪市内や八尾市の西部では栽培されなくなり、現在では南高安地域が中心産地である。

河内木綿の研究家である辻合喜代太郎氏²⁶（元大阪市立大学教授）は、研究活動を続ける傍ら、「河内木綿研究会」を組織し、河内木綿に関する各種技術の発展に努められた。

河内木綿研究会員である山本在住農家の寺尾和一郎氏は、平成2年（1990）にはその努力が認められ第4回にわ大賞が授与された。

（2）「知」と復元力

8章から11章では、八尾高校、技木、民芸、祭りなどを通じた「知」と復元力との関わりについてである。

花の需要が増大するのは大坂夏の陣(1615年)の戦死者の供養からであるといわれ、大阪市住吉区長居西周辺ではキンセンカ、キク、ケイトウなどの仏花の栽培が開始された。大阪は平地が狭く、低地も水田に不敵な砂質地で、花づくりには好条件であった。

八尾では、山麓の西側に花の産地である高安地域において花作りが盛んになる。とりわけ北部の神立地区において、夏ギク、秋ギク、寒ギクといったキク栽培が行われていた。明治期にはキクその他の切花、春の枝もの(桜の木など)を大阪の間屋へ出荷され始める。長居地区からの種苗や技術の導入により、各農家で花づくりが盛んとなっていく。山の傾斜地を利用して建てられた石組みの「ムロ」と呼ばれる加温施設によって促成栽培が行われる。キク以外にナデシコ・カーネーション・ケイトウ・ヒマワリ・チューリップ・アスターなど、季節ごとにいろいろな種類の花が植えられ

²⁶ 大阪府出身。大阪天王寺師範学校卒、関西大学法文学部哲学科卒。1959年「日本上代文様の研究」で関西大学文学博士。大阪市立大学家政学部助教授、教授、京都府立大学教授。72年定年退官、琉球大学教授、帝国女子大学教授を歴任。

ていった。

八尾高校では平成11年から大阪府立高校における環境教育推進のためのエコ・ハイスクール指定事業に応じ、環境に優しい学校作りを目指し、①緑化環境（花と緑にあふれた学校環境）②自然環境（自然に優しいエコロジー社会）③生活環境（資源再生のリサイクル生活）の3分野の取り組みを開始した。

とりわけ、初代校長・坪井仙次郎氏は、東京小石川植物園のユーカリ樹に感銘を受け、生徒の健全な生育を願い西運動場に30本のユーカリ樹を植えたという。ユーカリ樹が八尾中学校のシンボル樹となり、現在も同窓会報のタイトルにも使われ愛されてきた。昭和9年、鉄筋コンクリート造りの校舎が西運動場に建てられたとき、敷地整備で多くの樹木が整理され、ユーカリ樹も現在校門横に残っている1本になる。平成10年創立100周年の記念事業の一つとして樹齢100年を超えたシンボル樹・ユーカリの空洞部に炭を入れPR樹脂で蓋をする保存治療が行われた。

（3）「場・みち」と復元力

12章から15章では、ブータン、ワシントンの桜、八尾北高校、造園業について取り上げ、場と道との関係性を考察する。

国民総福祉量を指標とするヒマラヤ山麓の王国ブータンで、国葬の待遇を受けた人がダショー西岡京治氏²⁷であった。ブータンの農業指導に一生を捧げ、最高の称号である「ダショー」を授与されるとともに、国葬が挙行された。

大学や企業において使われてきた発想法であるKJ法を生み出した大阪市立大学の川喜田教授の「最初の1年間はブータンのことを徹底的に調査せよ」という教えを守り、各地を訪問し農民の声を聞いた。西岡が植えた作物がブータンの各地に広がっていった。大阪で開催された「花博」では、ブータン展示場を担当し、昭和天皇崩御の祭にはブータン国王の随員としての役を果たす。

八尾北高等学校の「人間・科学系列」に「ビオトープと

²⁷ 八尾高校から大阪府立大学に進み、探検家でもある中尾佐助教授（当時）のもとで修士課程を終え、中尾教授や、川喜田教授らと共にネパールの学術調査に参加した。この時、中尾教授は西岡氏がブータンの農業に強い興味を持っていることを知り、開発途上国援助計画としてコロポ計画によりブータンに派遣する農業専門家として西岡を紹介した。

科学」という選択科目が設定され、教員・生徒、地域の小学生、ガールスカウト、地元のNPOなどから毎回約70～80名の人々が関与している。

高安の服部川地区では多い時で170軒～180軒の植木屋（造園業）があった。山畑、郡川にも植木屋が多い。昭和初期は、植木が副業で農業が主であったが、昭和30年頃に逆転し、植木だけでなく新築家屋の外構工事もしていた。

（4）「集り・交流」と復元力

16章から21章において、『植物とのふれあい』の出版、高安自然再生協議会、「環境アニメイテッドやお」などによる「集り・交流」についての検討がなされた。

まず、『植物とのふれあい』は、市街地や田畑、高安山山麓、山間部の4地域に分け、樹木・草本類についての特徴、名称の由来、俗名、花言葉、利用法などについて説明したものである。

高安地域では、大きな市場に近い里山であったことが、地場産業の活性化につながっており、稲作や河内木綿を含む花卉栽培が盛んであった。また、水不足を補うために400の溜池が農業用水用の人工池としてつくられ、ニッポンバラタナゴを含む多様な生物が生息している。人と自然が共生して暮らせる持続可能な地域づくりを目指すことが重要である。

高安自然再生協議会は、自然再生の全体構想と共に、実施計画についても議論を行っており、例えばニッポンバラタナゴ高安研究会では、小・中・高・大学生を対象とした里山観察会をほぼ毎月実施され、自然環境学習が行われている。「ドビ流し」（池干し）などの伝統的な水管理手法が、ニッポンバラタナゴの保護と生物の多様性保全につながる事が明らかになっている。ニッポンバラタナゴが生息している水を使ったお米を「きんたい米」（「きんたい」とはニッポンバラタナゴの地元名）として売り出されている。こうした活動を継続的に行うことが非常に重要であろう。

與兵衛桃林堂の茅葺屋根建築は、国の登録文化財であり、河内木綿商であった建物で、今は和菓子商として使われている。葺き替えは、奈良県大宇陀で50年以上にわたり携わってきた隅田棟梁が行った。茅は宮城県北上川畔のものを使っているが、束ねた茅を屋根に差し込んで木小手で叩き、

整え、銚もりのような道具に結びつけた針金で屋根裏まで差し込み、屋根裏のひとと声を掛け合い垂木たるきに結びつける方法で、畳を縫うのに似ているという。

（5）広域的な都市間ネットワーク

22章から24章までは造園業の庭樹園、自然再生ネットワーク、八尾の環境と植物についての概説が説明された。

庭樹園は、創業は明治10年（1887）であるが、それ以前から植木に関わり始め160年以上の歴史を持つ。当時、八尾市山畑で小作であった當内栄助は山の土地を借りて植木の栽培を行うとともに、植木職人として庭木の手入れも行い始めていた。

そのなかで注目すべきは、大正2年（1913）ごろにおいて、道修町の菓商小西久兵衛（3世）が阿倍野区晴明通（東天下茶屋）につくった「朝陽館」の庭園であろう。明治後半に市内の多くの財界人が広大な別荘を構えた場所であるが、「朝陽館」はそうした別荘の中でも最も大規模なものであった。「朝陽館」は、大隈重信侯など政府や軍、皇族関係の要人が滞在した場所として有名である。第22章に示されているように、八尾・服部川に最盛期には160件以上もの造園会社が作られ、今年創業140年を迎える「庭樹園」を創業した當内廣吉氏はこの「朝陽館」の庭園の管理を任されることになる。

これは、庭師で近代日本庭園の先駆者とされる小川治兵衛（植治）が天王寺で住友家の「慶沢園」を造庭したのと同時期であるが、廣吉は植治とも交流があった。當内廣吉氏が所有していた正嘉元年（750）につくられた十三塔を植治に売却しており、その十三塔は京都南禅寺界限にある別荘「野村碧雲荘」（八尾・久宝寺出身で文化人でもあった野村証券の二代目野村徳七氏の創建）に設置されている。また、庭樹園の當内家の旧宅離れ座敷も「朝陽館」の建て替えに伴って下賜されたものである。こうしたことは、自然と造園文化や産業を媒介とした創造的ネットワークの事例として興味深いものである。

8. おわりに

これまで、①ヒト・モノ、②知、③場・みち、④集り・交流、のそれぞれと創造性および復元力レジリエンスとの関連性、さらに、これら四つのカテゴリーを拡張した「⑤広域的都市ネ

ットワーク」を用い、自然と文化の相互浸透について考察した。ここで示したのは一端に過ぎないであろう。ヒトとモノとの間に自然や文化に関する様々な分厚い「知」があり、場と場を繋ぐ道や集りや交流がある。それぞれには歴史的事実が存在する。

参考文献

- 朝倉喬司(1978)「大阪の闇をゆさぶる河内音頭のリズム：いまなおホットなその生命力のしぶとさ」『ニュー・ミュージック・マガジン』10月。
- 朝倉喬司(1997)「盆踊り唄、口説」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 伊丹敬之(1991)『グローバル・マネジメント：地球時代の日本企業』日本放送協会。
- 近江俊秀(2013)「大和と河内の峠道」(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』八木書店、所収)。
- 岡 利次郎(1987)『リズム考：東と西の文化の源流』草葉社。
- 岡野 浩(2003)『グローバル戦略会計：製品開発マネジメントの国際比較』有斐閣。
- 岡野 浩(2009c)「グローバル創造都市の文化ブランド戦略」(佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社、所収)。
- 岡野 浩(2012a)「都市創造性と文化編集」岡野 浩・三島啓子編『都市創造性プラットフォームとしてのアートギャラリー：大阪空堀をめぐる文化ネットワークの形成』大阪市立大学都市研究プラザ。
- 岡野 浩(2012b)「原価企画の文化史的含意：動詞化・述語的包摂による文化編集の視点から」『会計』第182巻第4号。
- 岡野 浩ほか(2009)「パブリックセクターにおける戦略的業務革新」富澤修身編『大阪新生へのビジネス・イノベーション：大阪モデル構築への提言』ミネルヴァ書房、2009年。
- 鎌田東二(2010)『モノ学・感覚価値論』晃洋書房。
- 川喜田二郎(1992)『鳥葬の国：秘境ヒマラヤ探検記』講談社(初版1973年)。
- 河内家菊水丸(2001)『河内家菊水丸の新聞詠み河内音頭』集英社。
- クラークス, L. (1971)『リズムの本質』(杉浦實訳) みすず書房(原著出版年1923年)
- クレストン, P. (1968)『リズムの原理』(中川弘一訳) 音楽之友社。
- 佐々木幹郎(1997)「河内音頭」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 佐々木雅幸(2001)『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』岩波書店。
- 佐々木雅幸・水内俊雄(2009)『創造都市と社会包摂：文化多様性・市民知・まちづくり』水曜社。
- 菅 豊(2013)『「新しい野の学問」の時代へ：知識生産と社会实践をつなぐために』岩波書店。
- ド・セルトー, M. (1987)『日常実践のポイエティック』(山田登世子訳)、国文社。
- 野中郁次郎(1990)『知識創造の経営：日本企業のエピステモロジー』日本経済新聞社。
- 兵藤裕己(1997)「口承文学総論」『岩波講座 日本文学史』(第16巻：口承文学I) 岩波書店。
- 藤原成一(2008)『かさねの作法：日本文化を読みかえる』法蔵館。
- 益田晴恵(2011)『都市の水資源と地下水の未来』京都大学学術出版会。
- 宮本要太郎(2009)「聖なる都市のコスモロジー：儀礼都市から祝祭都市へ」木岡伸夫編『都市の風土学』ミネルヴァ書房、2009年。
- 村松貞次郎(1973)『大工道具の歴史』岩波書店。

- ロジャース, R. (2002) 『都市：この小さな惑星の』 鹿島出版会。
- 八尾市(1962) 『八尾市時報』 241号 (1962年9月) 八尾市。
- 八尾市(1963) 『八尾市時報』 246号 (1963年2月) 八尾市。
- 八尾市土木部(2013) 『八尾市の下水道』 八尾市。
- 八尾市防災会議 (2004) 『八尾市地域防災計画』 (Ⅲ) 資料編、八尾市。
- 山折哲雄(1983) 『神と仏：日本人の宗教観』 講談社。
- 山中浩之(2012) 「近世の医家と学芸」 『文化財講演会記録集』 (八尾市文化財紀要 17) 八尾市教育委員会文化財課。
- Amin, A. and P. Cohendet (2007) *Architectures of Knowledge*, Oxford: Oxford University Press.
- Barney, J.B.(2002) *Gaining & Sustaining Competitive Advantages*, 2nd ed., NY: Pearson. (岡田正大訳 『企業戦略論：競争優位の構築と持続』 ダイヤモンド社。)
- Bastien, D.T. and T. J. Hostager (1992) “Cooperation as Communicative Accomplishment: A Symbolic Interaction Analysis of an Improvised Jazz Concert,” *Communication Studies*, 43.
- Bradford, N. (2004) “Creative Cities: structures Policy Dialogue Backgrounder,” *Background paper F/46 Family Network*, Canadian Policy Research Networks Inc., August 2004.
- Brown, S.L. & K.M. Eisenhardt (1998) *Competing on the Edge: Strategy as Structured Chaos*,” Boston: Harvard Business School Press. (佐藤洋一訳 『変化に勝つ経営：コンピューティング・オン・ザ・エッジ戦略とは』 トッパン、1999年。)
- City of Vancouver (2005) “Policy Report: Social Development,” May 10, 2005, City of Vancouver.
- Colantonio, A. (2009) “Social Sustainability: Linking Research to Policy and Practice,” Working paper, Oxford Brookes University.
- Crossan, M. and M. Sorrenti (1996) *Making Sense of Improvisation*, unpublished manuscript, University of West Ontario.
- Eisenhardt, K.M. & S.L.Brown (1999) “Patching: Restitching Business Portfolios in Dynamic Markets,” *Harvard Business Review*, May-June 1999. (DIAMOND ハーバードビジネスレビュー編集部訳 『「選択と集中」の戦略』 ダイヤモンド社、2003年。)
- Eisenhardt, K.M. & J.A. Martin (2000) “Dynamic Capabilities: What are they?” *Strategic Management Journal*, Vol.21, No.10-11, October.
- Harvey, D. (2009) *Cosmopolitanism and the Geographies of Freedom*. New York: Columbia University Press, 2009
大屋定晴ほか訳 『コスモポリタリズム』 作品社、2013年。
- Kanter, R.M. (1989) *When Giants Learn to Dance*, NY: Simon & Schuster.
- Litting, B. & E. Grief3ler (2005) “Social Sustainability: A Catchword Between Political Pragmatism and Social Theory,” *International Journal of Sustainable Development*, Vol.8, No.1/2.
- Miner, A.J., C.Moorman, C. Bassoff (1996) *Organizational Improvisation in New Product Development*, unpublished manuscript, University of Wisconsin, Madison, WI.
- Okano, H. (2010a) “Building Business for Poverty through Cultural Creativity,” *The 8th Academic Forum on*

Empowering Urban Culture and Creativity: Art, Publicity, and Transformation, Chulalongkorn University (Thailand), March 9-10, 2010.

Okano, H. (2010b), "Building Businesses for Poverty Through Cultural Creativity: BOP (Bottom of the Pyramid) and Social Sustainability," *Proceeding of CCS Workshop at University of Manchester*, 9 November, 2010.

Okano, H. & D. Samson (2010) "Cultural Urban Branding and Creative Cities: A Theoretical Framework for Promoting Creativity in the Public Space," *Cities*, Supplement No.1, June 2010.

Polese, M. & R. Stren (2000) *Social Sustainability of Cities*, Toronto: University of Toronto Press.

Sayles, L. (1964) *Managerial Behaviour: Administration in Complex Organization*, NY: McGraw-Hill.

Teece, D.J., G. Pisano, & A. Shuen (1997) "Dynamic Capabilities & Strategic Management," *Strategic Management Journal*, Vol.18, No.7, December.

Woodman, R.W., Sawyer, J.E. and R.W. Griffin (1993) "Toward a Theory of Organizational Creativity," *Academy of Management Review*, 18(2).

おわりに

西辻 豊

岡野教授からテーマをいただき「八尾における人と植物の共生」を考え、多くの方々から原稿や資料をいただきましたことを感謝申し上げます。

古代から現代まで、人と植物の共生は続いています。生活様式が近代化するにつれ、日常的に「植物との共生」を意識することが少なくなっていますが、生きていくための食料から都市基盤整備に至るまでのあらゆる分野において、また、個人生活における趣味の分野にまで、植物が係わっています。

都市生活に欠かすことの出来ない環境保全は、「地球温暖化対策」など世界的な課題となり、その対応が求められています。漁労に携わる人達が山に植林をするという事で、自分たちの生活が守られるというニュースも聞きます。個人生活は当然のこととして、世界的にも、「植物との共生」による豊かな自然環境を守り続けることによって、豊かな生活を後世に伝えていくことが出来ると言えます。

八尾市では、昭和 39 年に制定した市民憲章全文に、「八尾市は豊かな伝統と美しい自然にめぐまれたまち」であるとし、本文五箇条の一つに「みどりのまちをつくりましょう」があります。自然に恵まれた都市を未来に引き継いでいくためにも、みどりのまちづくりを続けていく必要を表しています。

東部山麓を中心に植物を育てることを生業として発展させた「花作り・造園業」が地場産業として続けられています。大都市大阪の都市生活に潤いと安らぎをもたらすようにと活動をされている「フラワーズサイエティ」の齊藤農場は、年間を通じて花の苗を作っておられます。

今回は、八尾市における「植物との共生」をあらためて考える事とし、埋蔵文化財調査による考古学の観点、伝統文化、産業活動、そして個人の日常生活に及ぶ種々の事柄についての資料や原稿を頂きました。

組織的環境活動としては「環境アニメイテット八尾」並びに「高安自然再生協議会」のように、地方自治体、教育機関、企業、そして多くの人々が参加して環境保全、都市緑化、里山保全など、住みよい「まちづくり」に取り組み、豊かな生活を守り続けようとしておられる団体があります。

個人的活動では、生涯をブータンの農業振興に捧げ、国王から「ダショー」の称号が与えられ、亡くなったときは国葬で送られた西岡京治氏が特別な事例としてあげられます。

種々の活動、取り組みを十分に纏めきれませんが、八尾市では都市の緑化を守り育てるため、保全樹の選定、緑の街角賞を設けると共に、入学、結婚、出産などに際して記念樹を配布しています。また、高安山系の急傾斜地で危険箇所には、宅地造成に代わって「市民の森公園」を設置し市民のご協力で植樹していただき、その後も毎年公園の草刈り整備にボランティアとして参加していただくなど、市が進める「都市緑化事業」に多くの市民の皆様が協力をしていただいています。

八尾市における事例を参考にいただき、「植物との共生」が、都市生活に潤いをもたらすと共に、環境保全活動に役立つことをご理解いただくことを願っています。

編者紹介 Editors

西辻 豊 やお文化協会理事長・元八尾市長

太田博之 株式会社庭樹園自然再生事業部長・環境アニメイテッドやお事務局長

岡野 浩 大阪市立大学都市研究プラザ副所長、教授、経営学研究科・商学部（併任）教授

筆者紹介 Contributors

岡田清一 八尾市歴史民俗資料館 学芸員

金子初美 やお文化協会

加納義彦 大阪経済法科大学教授

川西 茂 八尾市史編纂室

齊藤侑三 NPO法人自然と緑 理事長・高安の森自然楽校代表

塚口倫生 大阪府立八尾北高等学校講師

當内 匡 株式会社庭樹園代表取締役

中西勝晴 八尾木民芸つくりもん保存会

原田昌則 八尾市立埋蔵文化財調査センター 学芸員

牧江良祐 グラフィックデザイナー/八尾市魅力創造戦略アドバイザー

村西徳子 NPO法人河内木綿藍染保存会 理事長

山上健三 八尾市コミュニティセンター刻字講座講師

渡瀬弘美 やお文化協会

環境アニメイテッドやお（八尾市経済環境部環境保全課）

大阪市立大学 都市研究プラザ レポートシリーズ No.41

URP Report Series No. 41

『八尾の自然と文化』

Urban Resilience with Nature: Botanical Social Designing and Inter-Cities Networking of Yao, Osaka

Edited by Hiroshi OKANO, Yutaka NISHITSUJI, Hiroyuki OTA,

Published by Urban Research Plaza (URP), Osaka City University

3-3-138 Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka 558-8585 JAPAN

発行日：2017年9月19日 19 September, 2017

編集：岡野 浩・西辻 豊・太田博之

発行：大阪市立大学 都市研究プラザ

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL: (+81) (0)6-6605-2207

FAX: (+81) (0)6-6605-2069

大阪市立大学 都市研究プラザ レポートシリーズ

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/report.html>

No. 25: 岡野 浩・三島啓子 (2012) 『都市文化プラットフォームとしてのアートギャラリー：大阪空堀・楓ギャラリーをめぐる文化ネットワークの形成』

No. 28: 岡野 浩・西辻 豊 (2013) 『大阪・八尾の都市創造性：市民知による文化実践分析と文化編集』

No. 29: 岡野 浩 (2014a) 『大阪・交野の自然と創造性：大阪市立大学・私市植物園と庵原遜のコスモロジー』

No. 30: 岡野 浩 (2014b) 『信楽の都市創造性と社会デザイン：自然と都市と市民知に関する文化編集分析』

No. 34: 岡野 浩・潘 山海 (2016) 『利他主義・レジリエンス・創造性：日本・中国における植物社会デザイン』

No. 41: 岡野 浩・西辻 豊・太田博之 (2017) 『八尾の自然と文化：植物社会デザインと広域的都市ネットワーク』

大阪市立大学 都市研究プラザ・ブックレット

No. 3: 岡野 浩・塚腰 実 (2015) 『メタセコイアと文化創造：植物的社会デザインの招待』大阪公立大学共同出版会。



URP 
Osaka City University

大阪市立大学 都市研究プラザ
Urban Research Plaza, Osaka City University